

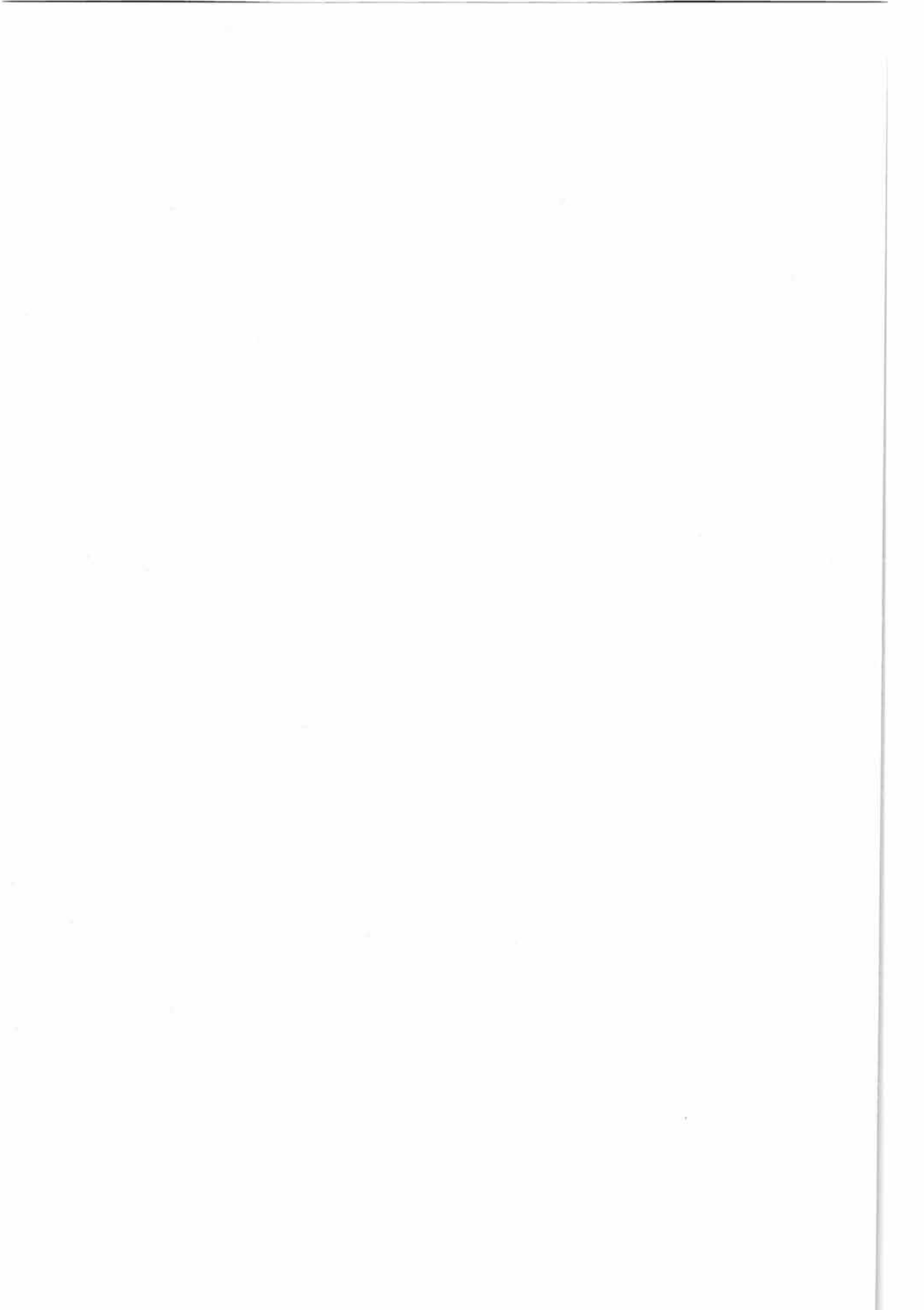
京都府遺跡調査概報

第 45 冊

1. 長岡京跡右京第285・310・335次
2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路

1 9 9 1

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、本年3月末で満10年を迎えることになりました。この10年の間に、公共事業は年々増大し、それに伴い、発掘調査は、単に件数の増加だけでなく、近年とみに大規模化の傾向にあります。当センターでは、こうした状況に対応するため、徐々にではありますが、組織・体制の強化を進め、調査・研究の充実を図ってまいりました。このような発掘調査成果については、『京都府遺跡調査報告書』をはじめ、『京都府遺跡調査概報』・『京都府埋蔵文化財情報』等の各種印刷物を逐次刊行して公表してまいりました。また、毎年、「小さな展覧会」・「研修会」を開催し、出土遺物や調査の概要を広く府民に紹介して、一般への普及・啓発活動にも意を注いでいるところでもあります。また、本年は、冒頭にも述べましたように、設立10周年を記念し、特別展覧会・特別講演会の開催、論文集の刊行などの事業を実施してきたところでもあります。これらの諸事業の遂行にあたりましては、皆様方の御協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、昭和62～平成2年度に実施した発掘調査のうち、京都府乙訓土木事務所・京都府総括調整室の依頼を受けて行った長岡京跡右京第285・310・335次及び平安京跡の各発掘調査を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また埋蔵文化財を理解する上で、何がしかの役に立つところがあれば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された京都府乙訓土木事務所・京都府総括調整室をはじめ、京都府教育委員会・長岡京市教育委員会・京都市文化観光局などの関係諸機関、並びに調査に直接参加・協力いただいた多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成3年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理事長 福 山 敏 男

凡 例

1. 本冊に収めた概要は

1. 長岡京跡右京第285・310・335次 2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路を対象としたものである。

2. 各遺跡の所在地・調査期間・経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

| 遺 跡 名 | 所 在 地 | 調 査 期 間 | 経 費 負 担 者 | 執 筆 者 |
|------------------------|-------------------------|---|------------|------------------------|
| 1. 長岡京跡右京第285・310・335次 | 長岡京市今里更ノ町 長岡京市井ノ内下印田 | 昭62.11.12 ～63. 3. 5 昭63. 7. 5 ～平元.3.28 平元. 8. 4 ～平2.2.27 | 京都府乙訓土木事務所 | 石尾 政信 戸原 和人 土橋 誠 |
| 2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路 | 京都市上京区下立売通新町 西入敷ノ内町 | 平 2. 8. 7 } 平 3. 1.14 | 京都府総括調整室 | 引原 茂治 |

3. 本冊の編集には、調査第1課資料係が当たった。

目 次

1. 長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要…………… 1
2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路発掘調査概要……………77

付 表 目 次

- | | | |
|-------|-----------------------|----|
| 付 表 1 | 第335次出土銭貨一覧表…………… | 53 |
| 付 表 2 | 木製品一覧表…………… | 71 |
| 付 表 3 | 土坑 S K 63出土古銭一覧表…………… | 90 |
| 付 表 4 | 出土遺物一覧表…………… | 94 |

挿 図 目 次

1. 長岡京跡右京第285・310・335次

| | | |
|--------|---------------------------------|----|
| 第 1 図 | 調査地位置図及び周辺遺跡分布図 | 2 |
| 第 2 図 | 調査地位置図 | 3 |
| 第 3 図 | トレンチ配置図 | 4 |
| 第 4 図 | A・Cトレンチ上層遺構平面図 | 6 |
| 第 5 図 | B・D・Gトレンチ上層遺構平面図 | 7 |
| 第 6 図 | 二条条間大路南側溝(S D28502)実測図 | 8 |
| 第 7 図 | 西二坊大路路面上の轍(Bトレンチ)平面図 | 10 |
| 第 8 図 | 西二坊大路の路面上の轍と長岡京造宮に伴う轍(Dトレンチ)平面図 | 11 |
| 第 9 図 | 掘立柱建物跡(S B28511)実測図 | 13 |
| 第 10 図 | 柵列(S A28512)実測図 | 13 |
| 第 11 図 | 井戸(S E31035)実測図 | 15 |
| 第 12 図 | Bトレンチ下層遺構平面図(住居跡ほか) | 17 |
| 第 13 図 | 竪穴式住居跡(S H31030)実測図 | 18 |
| 第 14 図 | D・Gトレンチ下層遺構平面図 | 19 |
| 第 15 図 | Aトレンチ下層遺構平面図(方形周溝墓) | 21 |
| 第 16 図 | E1・E2・Fトレンチ遺構平面図 | 22 |
| 第 17 図 | Fトレンチ南壁土層断面図 | 23 |
| 第 18 図 | 丸太敷き路盤改良遺構(S X31037)実測図 | 25 |
| 第 19 図 | A・Bトレンチ出土遺物実測図 | 26 |
| 第 20 図 | Dトレンチ出土遺物実測図 | 27 |
| 第 21 図 | Gトレンチ出土遺物実測図 | 28 |
| 第 22 図 | E2・Fトレンチ出土遺物実測図 | 29 |
| 第 23 図 | S E31035出土遺物実測図 | 30 |
| 第 24 図 | S D33503出土遺物実測図 | 31 |
| 第 25 図 | 溝(S D33501)出土遺物実測図 | 32 |
| 第 26 図 | 溝状遺構(S D33513)出土遺物実測図 | 33 |
| 第 27 図 | 流路跡(S D28509)出土遺物実測図(1) | 34 |
| 第 28 図 | 流路跡(S D28509)出土遺物実測図(2) | 35 |

| | | |
|--------|------------------|----|
| 第 29 図 | 弥生土器実測図 | 36 |
| 第 30 図 | S D28509 周辺割り付け図 | 37 |
| 第 31 図 | 墨書土器実測図(1) | 38 |
| 第 32 図 | 墨書土器実測図(2) | 39 |
| 第 33 図 | 墨書土器実測図(3) | 40 |
| 第 34 図 | 墨書土器実測図(4) | 41 |
| 第 35 図 | 木簡実測図(1) | 44 |
| 第 36 図 | 木簡実測図(2) | 45 |
| 第 37 図 | 軒丸瓦実測図・拓影 | 51 |
| 第 38 図 | 軒平瓦実測図・拓影 | 52 |
| 第 39 図 | 銭貨拓影 | 53 |
| 第 40 図 | 鉄製品実測図 | 54 |
| 第 41 図 | 銅製品実測図 | 54 |
| 第 42 図 | 石製品実測図 | 55 |
| 第 43 図 | 木製品実測図(1) | 56 |
| 第 44 図 | 木製品実測図(2) | 58 |
| 第 45 図 | 木製品実測図(3) | 59 |
| 第 46 図 | 木製品実測図(4) | 60 |
| 第 47 図 | 木製品実測図(5) | 61 |
| 第 48 図 | 木製品実測図(6) | 62 |
| 第 49 図 | 木製品実測図(7) | 63 |
| 第 50 図 | 木製品実測図(8) | 64 |
| 第 51 図 | 木製品実測図(9) | 65 |

2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路

| | | |
|--------|---------------|----|
| 第 52 図 | 調査地位置図 | 77 |
| 第 53 図 | 平安京条坊図 | 77 |
| 第 54 図 | 層序断面図 | 78 |
| 第 55 図 | 調査地平面図(近世) | 79 |
| 第 56 図 | 遺構実測図 | 81 |
| 第 57 図 | 調査地部分図(平安～中世) | 82 |
| 第 58 図 | 出土遺物実測図(1) | 85 |
| 第 59 図 | 出土遺物実測図(2) | 86 |

| | | |
|--------|-----------------|----|
| 第 60 図 | 出土遺物実測図(3)..... | 87 |
| 第 61 図 | 出土遺物実測図(4)..... | 88 |
| 第 62 図 | 出土遺物実測図(5)..... | 89 |
| 第 63 図 | 調査地関係図..... | 91 |
| 第 64 図 | 西洞院大路変遷図..... | 92 |

図 版 目 次

1. 長岡京跡右京第285・310・335次

| | |
|-------|--|
| 図版第 1 | (1)調査前風景(南から) (2)調査前風景(北から) |
| 図版第 2 | (1)Aトレンチ全景(南から) (2)Aトレンチ・中世溝群(北から) |
| 図版第 3 | (1)Aトレンチ・西二坊大路東側溝 S D28501(南から) (2)Aトレンチ・掘立柱建物跡 S B28511・柵列 S A28512(南から) |
| 図版第 4 | (1)Aトレンチ・二条条間大路南側溝 S D28502(南から) (2)Aトレンチ・二条条間大路南側溝 S D28502(西から) |
| 図版第 5 | (1)Cトレンチ・二条条間大路南側溝 S D28502(東から) (2)E1 トレンチ・丸太敷き路盤改良遺構 S X31037(西から) |
| 図版第 6 | (1)Cトレンチ・石敷き溝が伴う井戸 S E31035(南から) (2)Cトレンチ・S E31035井籠組みの木枠(南東から) |
| 図版第 7 | (1)Aトレンチ下層・方形周溝墓 1 (南から) (2)Aトレンチ下層・方形周溝墓 2 (南から) |
| 図版第 8 | (1)Bトレンチ東半部(北から) (2)Bトレンチ東半部(南から) |
| 図版第 9 | (1)Bトレンチ・西二坊大路東側溝 S D28501(南から) (2)Bトレンチ・西二坊大路路面上の轍群(南から) |
| 図版第10 | (1)Bトレンチ下層・竪穴式住居跡 S H31023ほか(南から) (2)Bトレンチ下層・竪穴式住居跡 S H31030(南から) |
| 図版第11 | (1)Bトレンチ下層・竪穴式住居跡 S H31025ほか(北から) (2)Bトレンチ下層・竪穴式住居跡 S H31026(南から) |
| 図版第12 | (1)Dトレンチ上層遺構(南から) (2)Dトレンチ下層遺構(南から) |

- 図版第13 (1)Dトレンチ・西二坊大路を横断する轍群 S X31010(西から)
(2)Dトレンチ下層・土坑 S D31015(南から)
- 図版第14 (1)Gトレンチ上層遺構(南から) (2)Gトレンチ下層遺構(南から)
- 図版第15 (1)Fトレンチ北部全景・西二坊大路東側溝 S D33501ほか(南から)
(2)Fトレンチ北部・西二坊大路東側溝 S D33501(北から)
- 図版第16 (1)E 2 トレンチ北部全景(南から) (2)E 2 トレンチ北部全景(北から)
- 図版第17 (1)E 2 トレンチ・西二坊大路を横断する溝 S D33505(西から)
(2)E 2 トレンチ南部全景(手前が S D33505)(北から)
- 図版第18 (1)Fトレンチ南部全景・自然流路 S D33516ほか(北から)
(2)Fトレンチ南壁断面
- 図版第19 (1)遺物出土状況・野井戸1の軒丸瓦
(2)遺物出土状況・S D28509上層出土の齋串
(3)遺物出土状況・S D28509上層出土の齋串
(4)遺物出土状況・S D31012出土の壺
- 図版第20 (1)掘立柱建物跡 S B28511・柱穴(P 5)
(2)掘立柱建物跡 S B28511・柱穴(P 13)
(3)掘立柱建物跡 S B28511・柱穴(P 10)
(4)掘立柱建物跡 S B28511・柱穴(P 11)
- 図版第21 出土遺物(1)
- 図版第22 出土遺物(2)
- 図版第23 出土遺物(3)
- 図版第24 出土遺物(4)
- 図版第25 出土遺物(5)
- 図版第26 出土遺物(6)
- 図版第27 出土遺物(7)
- 図版第28 出土遺物(8)
- 図版第29 出土遺物(9)
- 図版第30 出土遺物(10)
- 図版第31 出土遺物(11)
- 図版第32 出土遺物(12)
- 図版第33 出土遺物(13)

2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路

- 図版第34 (1)調査前風景(北から) (2)西洞院大路(南から)
- 図版第35 調査地全景(東から)
- 図版第36 (1)調査地西半部(近世・南から) (2)調査地東半部(近世・南から)
- 図版第37 (1)井戸42(北東から) (2)井戸95(北から)
- 図版第38 (1)土坑50(北東から) (2)土坑63古銭出土状況(西から)
- 図版第39 (1)土坑16(東から) (2)土坑125(北から)
- 図版第40 (1)溝281(北から) (2)溝220(左)・溝201(右)(北東から)
- 図版第41 (1)溝241(西洞院大路東側溝・北から)
(2)溝 (西洞院大路西側溝・南から)
- 図版第42 出土遺物(1)
- 図版第43 出土遺物(2)
- 図版第44 出土遺物(3)
- 図版第45 出土遺物(4)

1. 長岡京跡右京第285・310・335次発掘調査概要

(7ANIFC・GSN地区)

1. はじめに

この調査は、長岡京市今里～井ノ内地区で京都府が進めている都市計画街路(外環状線)改良工事に伴うものである。昭和62年度から府道長法寺向日線より北方で、府道善峰向日線までの区間が、用地買収の完了した地点から道路建設工事が計画された。道路建設の担当機関である京都府土木建築部都市計画課及び乙訓土木事務所と、京都府教育庁指導部文化財保護課、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが、埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ね、工事に先行して、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが当該地の発掘調査を実施することになった。

外環状線建設工事に伴う発掘調査は、昭和52年度以来、京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが断続的に行っている。今回の調査は、昭和62年度から平成元年度までの3か年にわたり、約5,000m²を対象とした。現地調査には、調査第2課調査第3係長小山雅人、同調査員石尾政信が当たった。調査期間中に、学生諸氏や地元有志の方々には調査補助員及び整理員として多大のご協力をいただいた^(注1)。また、発掘調査や遺物整理にあたって、長岡京市教育委員会、(財)長岡京市埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の協力を得た。京都文教短期大学名誉教授中山修一氏をはじめとして、多くの^(注2)の方々のご指導を賜った。あらためて感謝の意を表わしたい。なお、この調査に要した費用は京都府が負担した。

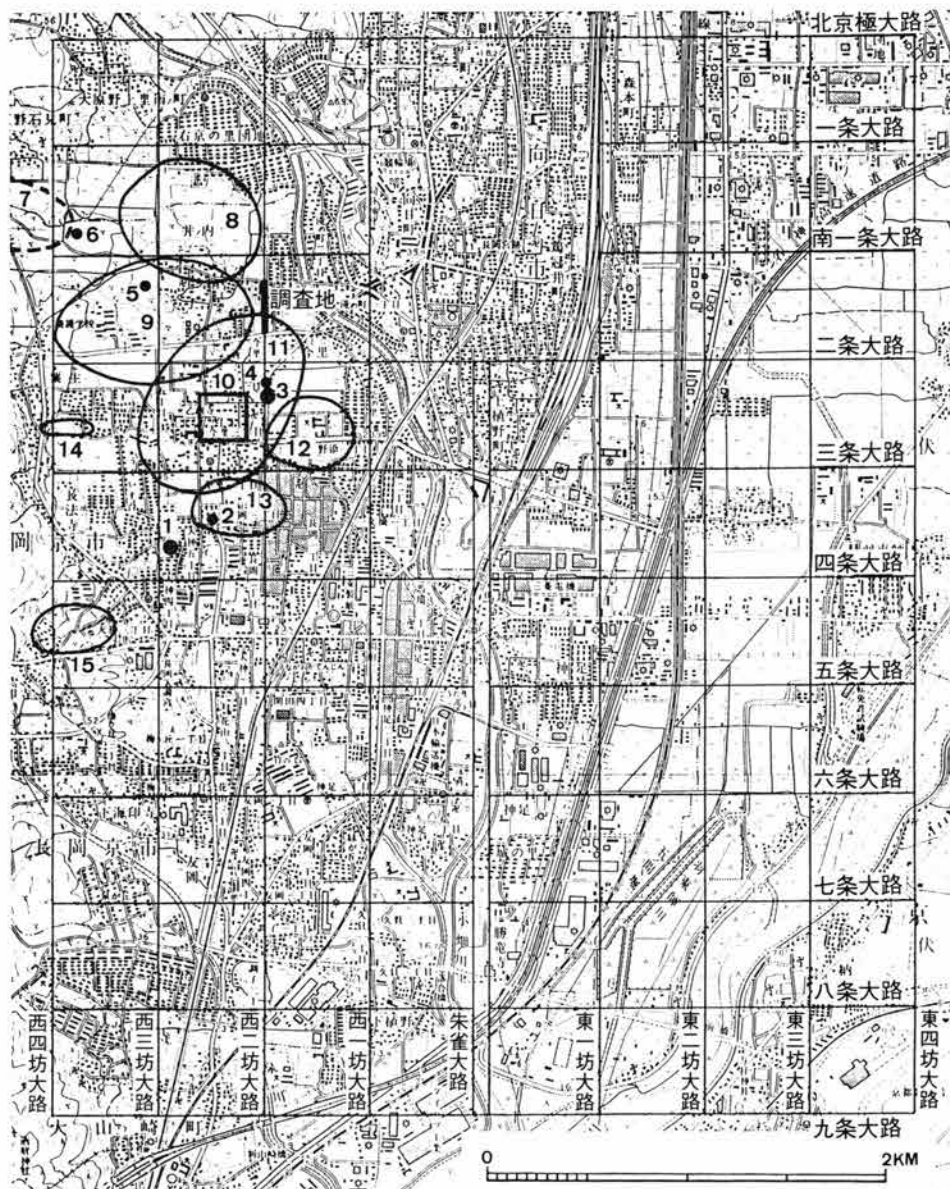
2. 調査経過・概要

調査対象地は、長岡京の条坊復原によれば、右京二条二坊十四・十五町及び西二坊大路・二条条間大路に推定される。また、弥生時代から中世の集落跡である今里遺跡の範囲にも含まれる。縄文時代から中世の集落跡である井ノ内遺跡に近接する。調査地は、長岡京市井ノ内から今里にかけての段丘の東側で、西から東に緩やかに傾斜する扇状地形をなしており、現在は水田として土地利用されている。水田面の標高は30m前後となっている。調査地の中央を西方から東方に走る水路付近では、50～70cmの段差(地形変換線)が認められる。この段差から南が今里更ノ町、北方が井ノ内下印田と地区がわかる。

この調査地の西約200mに所在する井ノ内集落で実施された右京第214次調査^(注3)で、奈良時

代の掘立柱建物跡をはじめ、各時代の遺構・遺物が確認されている。

昭和62年度調査(右京第285次)は、昭和62年11月12日に開始し昭和63年3月5日に終了した。この調査で約900m²を発掘し、Aトレンチと呼称した。検出遺構として上層面に水田耕作に伴う近世の野井戸、近世土坑、中世素掘り溝群、中世土坑及び柱穴群、長岡京期



第1図 調査地位置図及び周辺遺跡分布図

1. 今里大塚古墳 2. 舞塚古墳 3. 今里車塚古墳 4. 今里庄ノ瀧古墳 5. 稲荷塚古墳
 6. 井ノ内車塚古墳 7. 芝古墳群 8. 上里遺跡 9. 井ノ内遺跡 10. 乙訓寺 11. 今里遺跡
 12. 今里北ノ町遺跡 13. 陶器町遺跡 14. セツ塚古墳群 15. 谷田瓦窯群

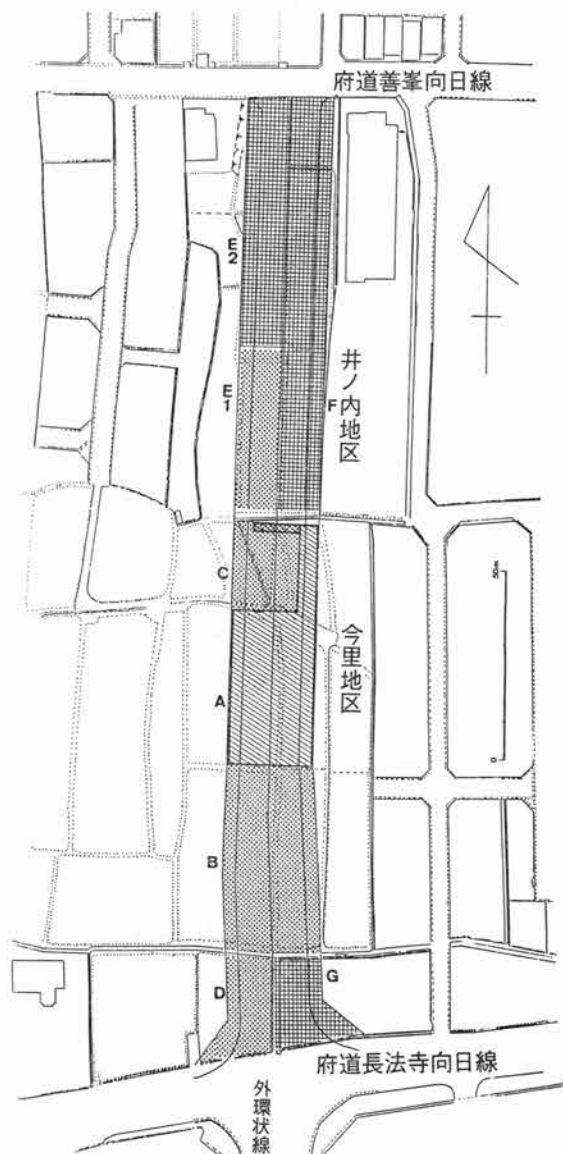
の大路の側溝、北部に埋め立てた自然流路、奈良時代の掘立柱建物跡があり、これらの下層面では弥生時代の方形周溝墓を確認した。

昭和63年度調査(右京第310次)は、B～Eトレンチを設定し、昭和63年7月5日から平成元年3月28日まで約2,100m²にわたって行った。この調査で検出した遺構には、今里地区で近世～現代の土坑、中世の素掘り溝、平安時代の自然流路、長岡京期の大路の側溝と轍群、長岡京造宮に伴う轍群、長岡京造宮で埋められた石敷き溝に伴う井戸、奈良時代の自然流路、古墳時代の竪穴式住居跡群と集落を区画する溝などがある。井ノ内地区では、丸太敷きの路盤改良工事跡を確認した。

平成元年度調査(右京第335次)は、E2～Gトレンチを設定し平成元年8月4日から平



第2図 調査地位置図 (1/5,000)



第3図 トレンチ配置図

成2年2月27日まで約1,900㎡にわたって行った。この最終年の調査で検出した遺構には、井ノ内地区で近世の井戸、中世の素掘り溝、平安時代の自然流路、長岡京期の大路の側溝・大路を横断する溝・埋め立てた自然流路の続きと推定される埋土層を確認した。また、今里地区では中世の素掘り溝、長岡京期の大路の側溝、長岡京造営に伴う轍群、長岡京造営で埋められた溝状遺構、さらにその下層で土器だまりや柱穴を検出した。そして、埋め立てた流路跡に造った大路側溝と周辺調査も行った。

なお、現地測量に当たって長岡京基準点52-9・56-10・52-12を使用した。遺構平面図は国土座標で示した。ただ、右京第285・310次調査で使用した国土座標に誤りが確認されたため訂正した。すでに公表の遺構図面等は、この調査概要のものを正式とする。遺構番号は、調査次数の後に各々の番号を付けた。

(小山雅人・石尾政信)

3. 検出遺構

この調査で検出した遺構には、現代から弥生時代までの各時代のものがある。今里(I F C)地区・井ノ内(G S N)地区に分け、時代の新しいものから記述する。A～D・Gトレンチが今里地区、E・Fトレンチが井ノ内地区である。

A. 今里地区

今里(I F C)地区は、AトレンチとCトレンチの境界のAトレンチ北西端が最も高く、そこから南東方向に向かって緩やかに下っている。Aトレンチ東部・Bトレンチ北東部では、耕作土・床土の下に遺物包含層がほとんど認められず、黄灰・黄褐色の砂礫層及び砂礫混入土層となる。Aトレンチ南部では、床土の下に暗褐色土層が堆積する。Bトレンチの集落を区画する溝(S D31001)より南部では、床土の下に灰色砂礫混入土層、暗褐色土層、黒褐色土層が堆積する。これらは、右京第7・12・26次調査の第3層、4層、5層に(注4)対応すると考えられる。Bトレンチ西南部やD・Gトレンチでは、暗褐色土層、黒褐色土層が厚く堆積している。暗褐色土層には長岡京期の遺物を包含する部分がある。

①近世の遺構

水田耕作に係わる土坑・野井戸がある。土坑には、円形のものと同円形ものがあり、深さが10～40cm程度である。野井戸1は直径2.5m前後の円形を呈し、深さ約0.8mを測る。野井戸には崩落を防ぐ杭が打ち込まれていた。中から軒丸瓦やひらがな木簡「こら」が出土した。

②中世の遺構

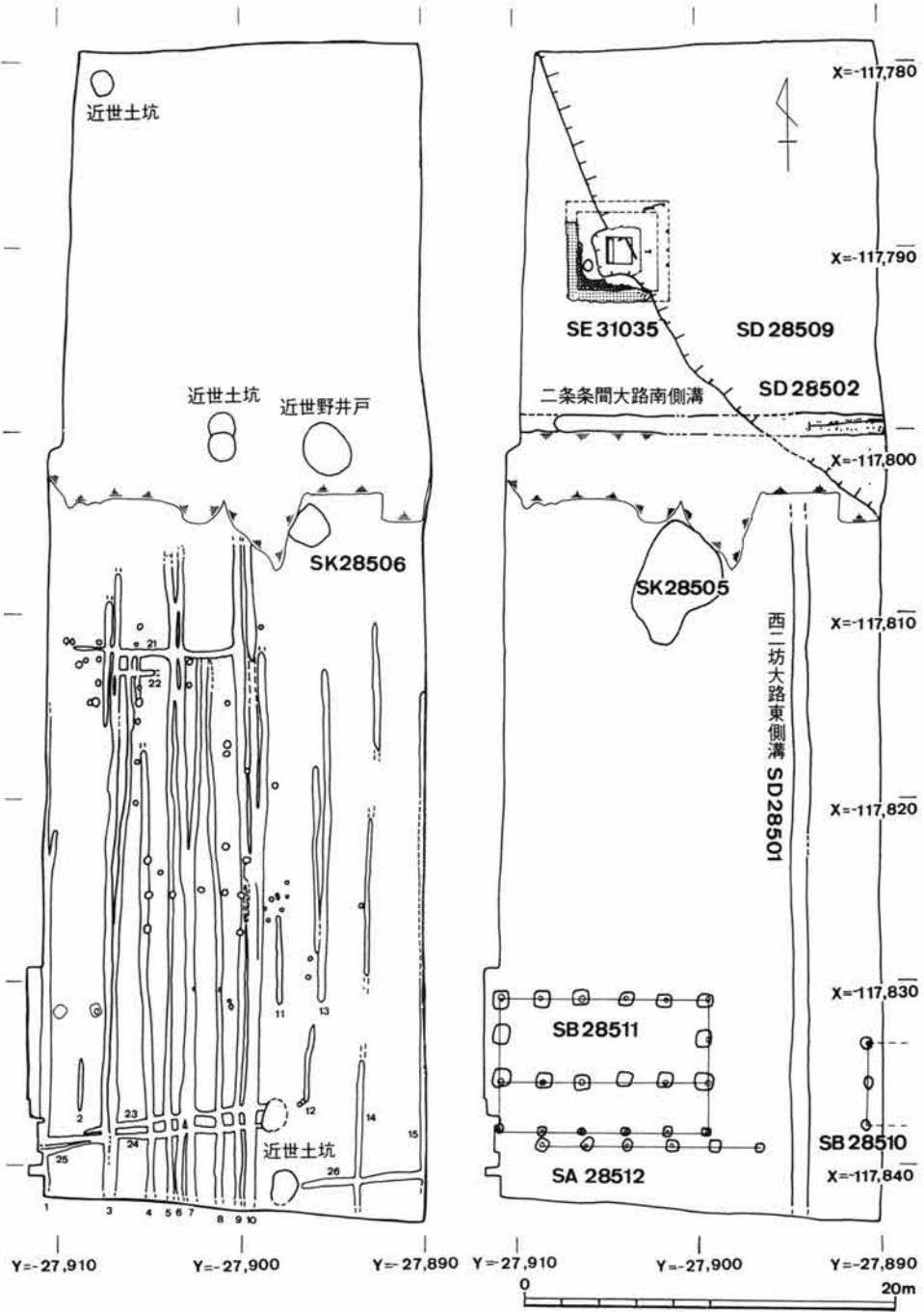
中世素掘り溝 A・Bトレンチのほぼ全域、D・Gトレンチの一部で検出した。Aトレンチでは主に南北方向に走る。また、南北方向の溝を切るかたちで、東西方向の溝が走る。これらの溝には、重なり合ったり分岐するものがある。溝幅は広いもので約0.7mを測り、狭いもので約0.2mを測る。溝の中には、須恵器・土師器・瓦器・陶磁器などが含まれ、その中には13世紀前後と推定される白磁片がある。Bトレンチでは、南北方向の溝と東西方向の溝があり、前者を後者が切るかたちで走る。溝幅は0.2～0.5mを測り、溝の深さは0.1～0.3mを測る。溝の心々距離は2.0～3.5mを測るが、0.3m前後のものが多い。なお、各々の素掘り溝には、南北方向の溝に1～15、東西方向の溝に21～39の番号を付した。

これら以外に、Aトレンチで中世の土坑S K28506を、中世～平安時代の柱穴をAトレンチ中央部やBトレンチ北部で検出したが、明瞭な建物跡と判断できるものはなかった。

③平安時代の遺構

自然流路SD31011 Dトレンチ南端で東西方向の流路跡として検出した。流路の幅は3m以上と推定されるが、攪乱により南端は不明である。流路の中央部が深くなり、最も深いところで0.8m以上を測る。流路内に堆積した砂礫層には、古墳時代から平安時代の土器が混在していた。

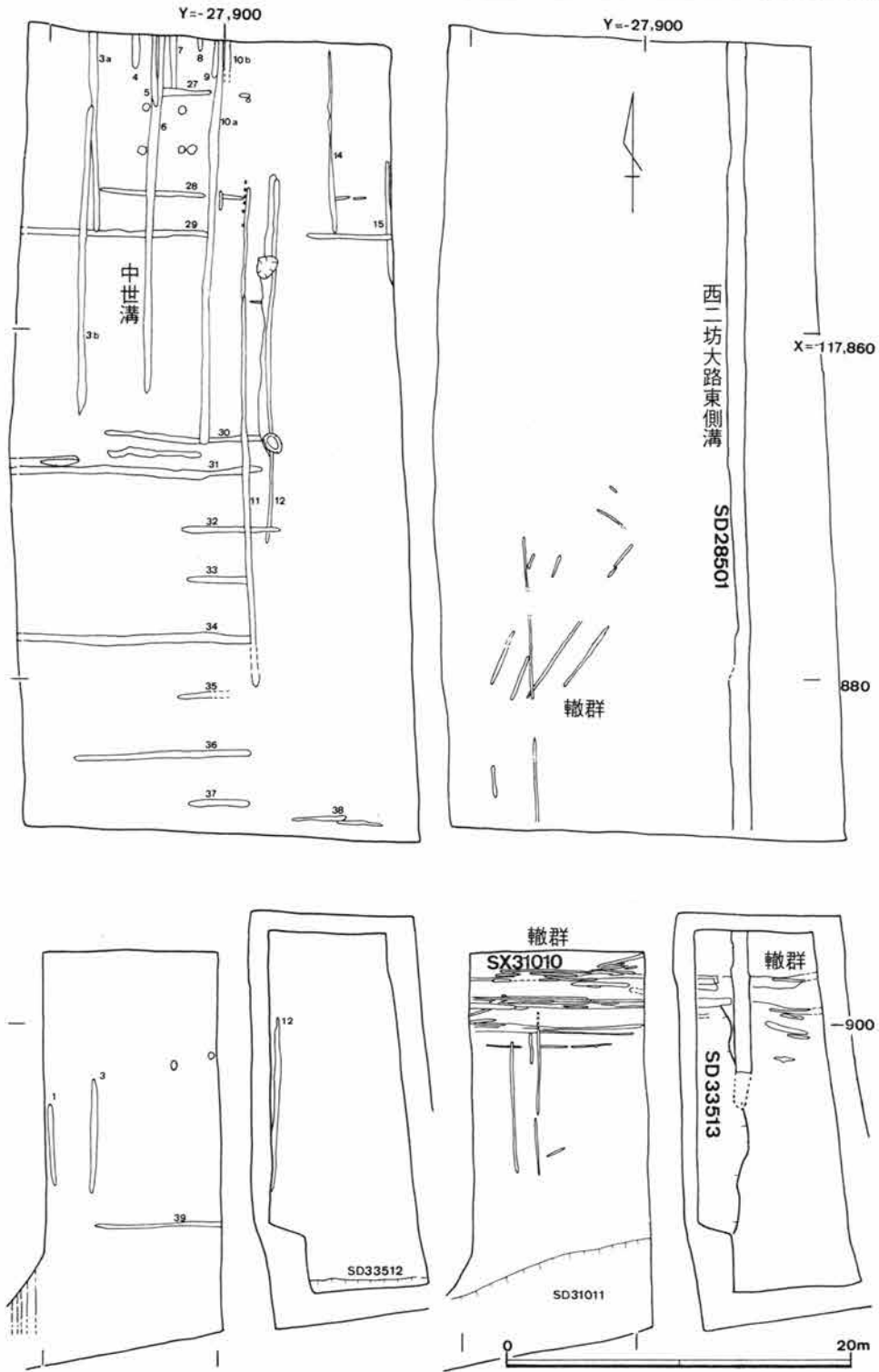
自然流路S D33501 Gトレンチ南端で東西方向の流路跡として検出した。流路の幅は0.5m・深さ0.4m以上と推定される。流路内に堆積した砂礫層には、平安時代の土器が包



長岡京期以後（中世溝ほか）

長岡京期前後

第4図 A・Cトレンチ上層遺構平面図



長岡京期以後 (中世溝ほか)

長岡京期前後

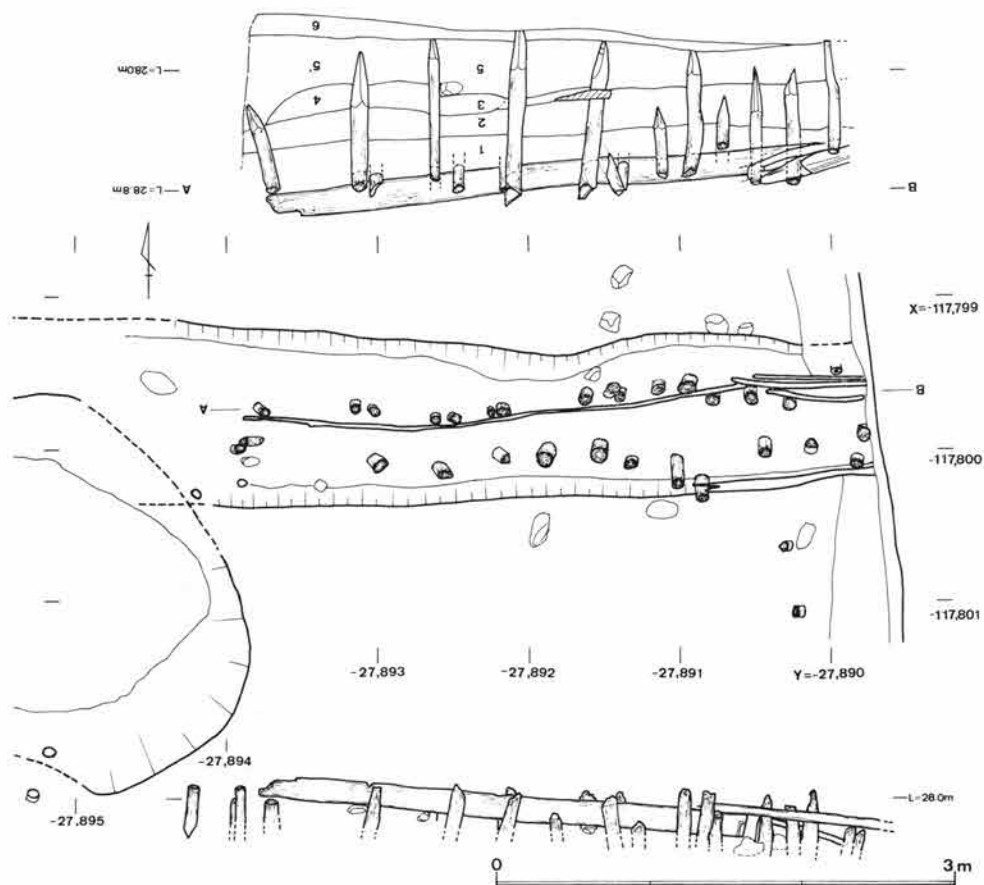
第5図 B・D・Gトレンチ上層遺構平面図

含まれていた。この流路の方向は、流路 S D31011とは若干異なるが、堆積した砂礫層の状況から同一流路の可能性が高い。

④長岡京期の遺構

長岡京期の遺構と推定されるものには、前述のとおり大路の側溝、路面上の轍群、長岡京造宮に伴う轍群、造宮時に埋められた土坑・溝状遺構がある。なお、造宮時に埋められた井戸・建物跡は、ここには含めない。

溝 S D28501 A・B・Gトレンチで総延長98mにわたって検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅は1.0～0.7m、溝の深さ0.1～0.3mを測る。この溝は、地形変換線にあたるAトレンチ北部で途切れている。このため東西溝 S D28502との関係が不明である。溝の南端にあたるGトレンチでは、最も深いところで0.1mを測るが、南に下るにしたがって浅くなり消滅している。Gトレンチでは、東西方向の轍群の上層に堆積した砂礫層を横



第6図 二条条間大路南側溝 (S D28502) 実測図

1. 黒褐色砂礫混入土層
2. 黒褐色土層
3. 黒灰色土層 (砂礫混入)
4. 暗灰色混入土層
5. 黒褐色粘質土層
6. 黒灰色粘質土層

断していることから、轍群との先後関係が判明した。溝は北から南に向って下がる。

この溝の南端では国土座標が $X = -117,903.500$ のときに $Y = -27,894.400$ 、中央部では国土座標が $X = -117,840.000$ のときに $Y = -27,894.500$ 、北端部では国土座標が $X = -117,805.000$ のときに $Y = -27,894.450$ を示し、平均値は $Y = -27,894.450$ となる。この座標値から溝S D28501が西二坊大路東側溝であることがわかる。

総延長98mにわたって検出したが、この溝から出土した遺物は、下層のものを含めてもコンテナ整理箱1箱に充たない。このことが、大路の使用状況を示すと推測される。

溝S D28502 地形変換線北側の、Aトレンチ北部・Cトレンチで検出した東西方向の溝である。長岡京造営で埋め立てられた自然流路S D28509の部分では、側板を杭で止めた護岸施設を伴う。この護岸施設のある部分も、西端が近世の野井戸1で壊されていた。その西側の段丘面では、素掘り溝となる。護岸施設のあるところで、溝の掘り幅は約1.0m、側板の間隔は0.7m前後を測る。側板からの深さは0.2~0.4mを測る。その北側では、側板を4枚重ねて補強してあるか所が見られる。杭には大小あり、杭の間隔も接近したものから離れた(約0.5m)のものまでである。側板の一つは、長さ約4m以上・幅約0.2m・厚さ2cm前後ある。素掘り溝部は、南肩が攪乱で壊されているが、溝幅0.7m以上・深さ0.2m前後を測る。

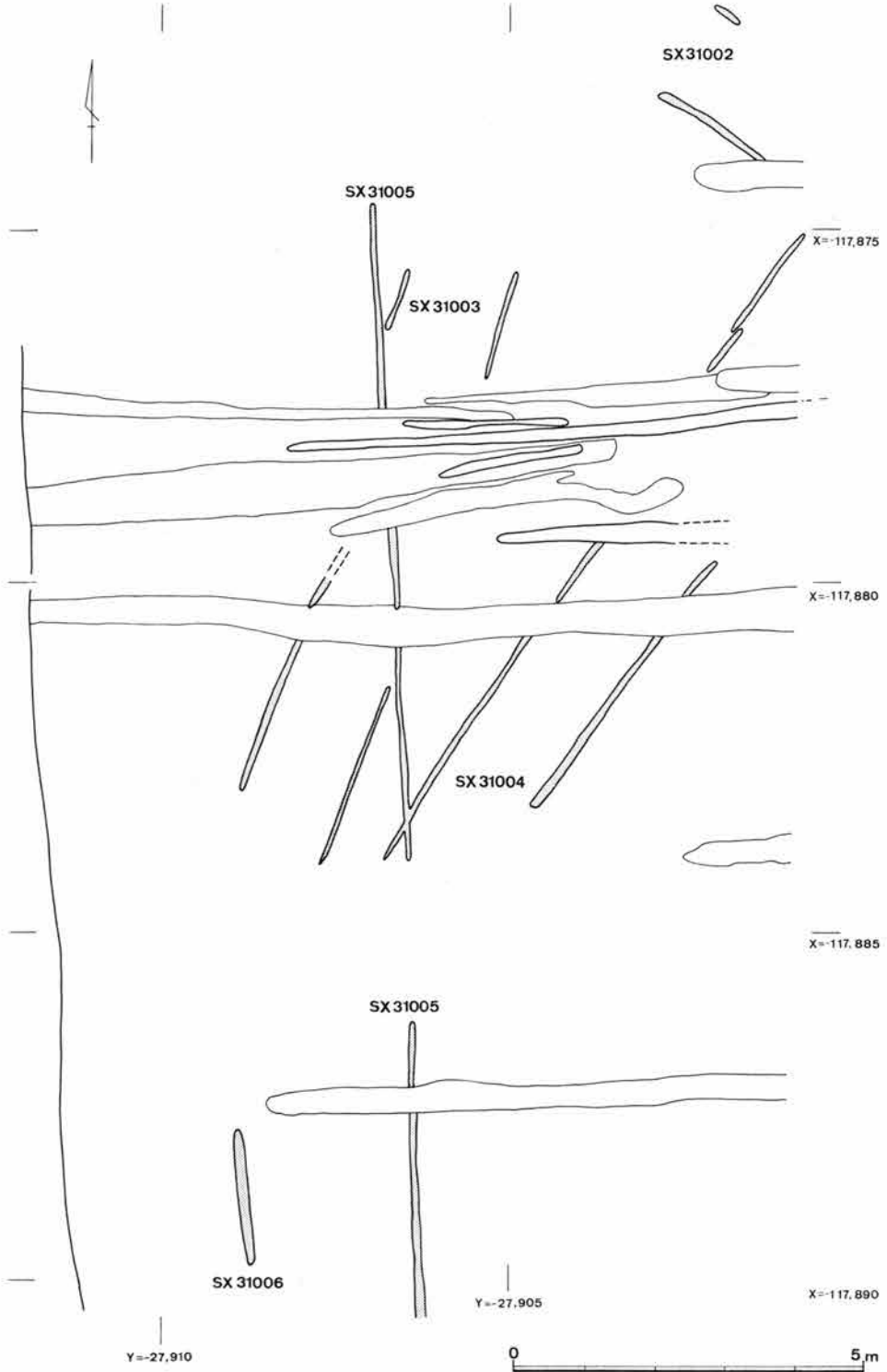
溝の西端で遺構を検出した段丘面の標高は29.7mを測り、護岸施設のある東端で、側板上端の標高は最も高いところで28.7mを測る。上記のことから、この溝が東に傾斜することがわかる。護岸施設のある東端の国土座標は $Y = -27,890.000$ のとき $X = -117,799.900$ を示す(側板の中心)。

溝の性格については、左京第162次調査の溝S D16202との関係、この溝の南北に長岡京期の溝が存在しないところから、二条条間大路の南側溝と推定した。

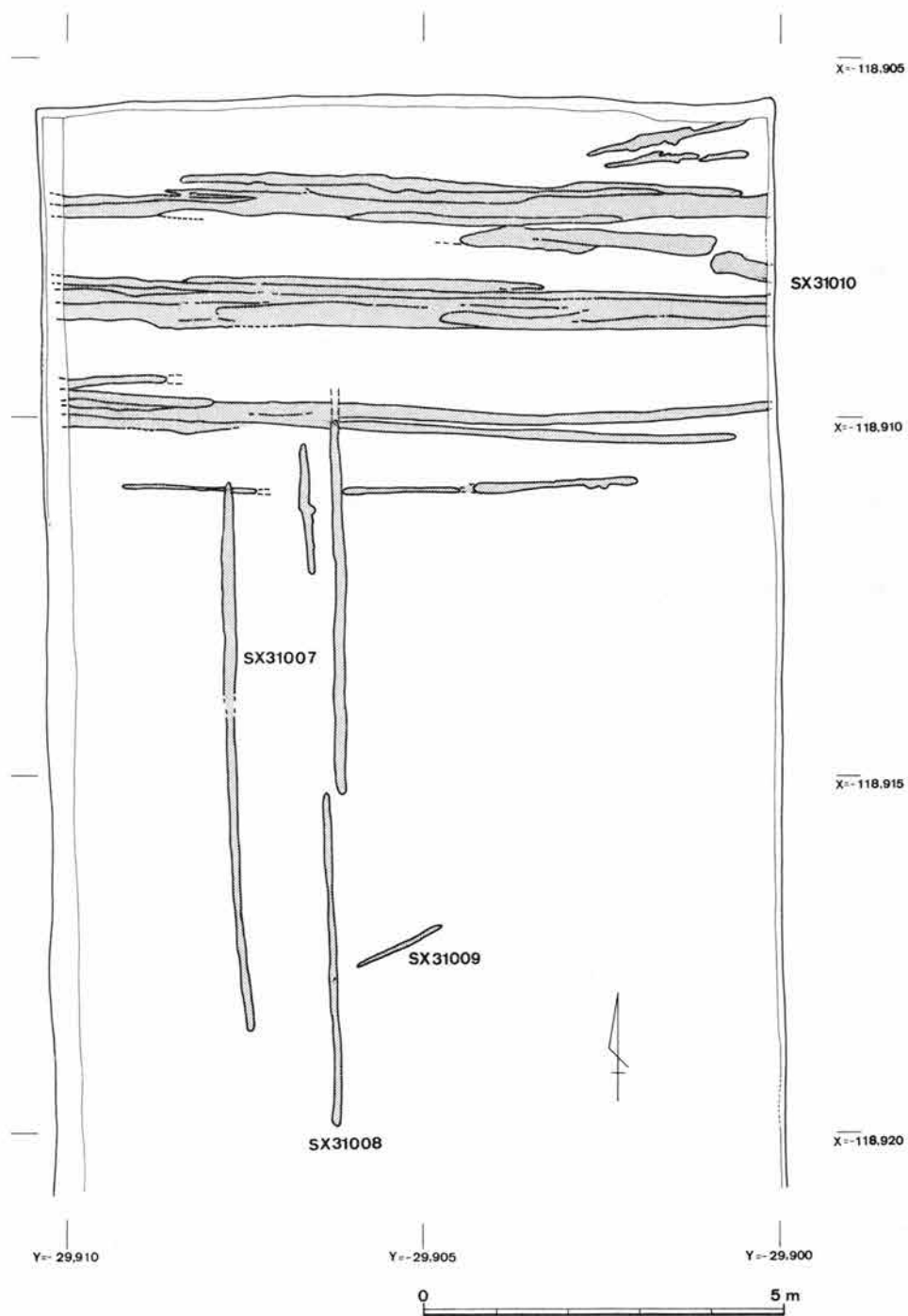
自然流路S D28509 Aトレンチ北部の地形変換線より北側で検出した流路跡である。流路は、北西方向から南東方向に流れ、西方の段丘を抉るように流れたと推測される。段丘面との比高差1m前後の崖が形成され、この段差を大量の土砂を投入して埋めていることがわかった。崖側と反対側は序々に浅くなるため流路の幅は確認できない。

長岡京期以前に流路の一部を埋めて石敷き溝が伴う井戸S E31035がまず造られ、長岡京期に井戸を含めた全体を埋め立てた後に二条条間大路の南側溝S D28502を造っている。流路を埋め立てた土は、井戸を造ったときと、長岡京造営に伴うものとの2時期に分かれ、前期の埋土には大量の奈良時代の土器等を包含する。

轍S X31002 Bトレンチで検出した暗褐色土層に食い込んだ北西から南東方向(N50°W)の両輪の痕跡である。両輪の心々間隔は145cm、轍の幅は10cm、深さ5cmを測る。



第7図 西二坊大路路面上の轍（Bトレンチ）平面図



第 8 図 西二坊大路の路面上の轍と長岡京造宮に伴う轍（Dトレンチ）平面図

轍 S X31003 Bトレンチで検出した北北東から東南東方向(N20°~15°E)の両輪の痕跡である。両輪の心々間隔は145cm, 轍の幅は7~12cm, 深さ2~5cmを測る。

轍 S X31004 Bトレンチで検出した北東から南東方向(N35°E)の両輪の痕跡である。両輪の心々間隔は145cm, 轍の幅は8~13cm, 深さ3~5cmを測る。

轍 S X31005 Bトレンチで検出した南北方向(N2~3°W)の片輪の痕跡である。轍の幅は7~12cm, 深さ約5cmを測る。

轍 S X31006 Bトレンチで検出した南北方向(N5°W)の片輪の痕跡である。轍の幅は約15cm, 深さ約5cmを測る。

轍 S X31007 Dトレンチで検出した南北方向(N1~2°W)の両輪の痕跡である。轍の幅は10~17cm, 深さ3~5cmを測る。この轍は、長岡京造営に伴うと推定している轍群S X31010の一部を横断するかたちで検出し、轍の先後関係が判明した。

轍 S X31008 Dトレンチで検出した南北方向(N3°W)の片輪の痕跡である。轍の幅は約10cm, 深さ2~5cmを測る。

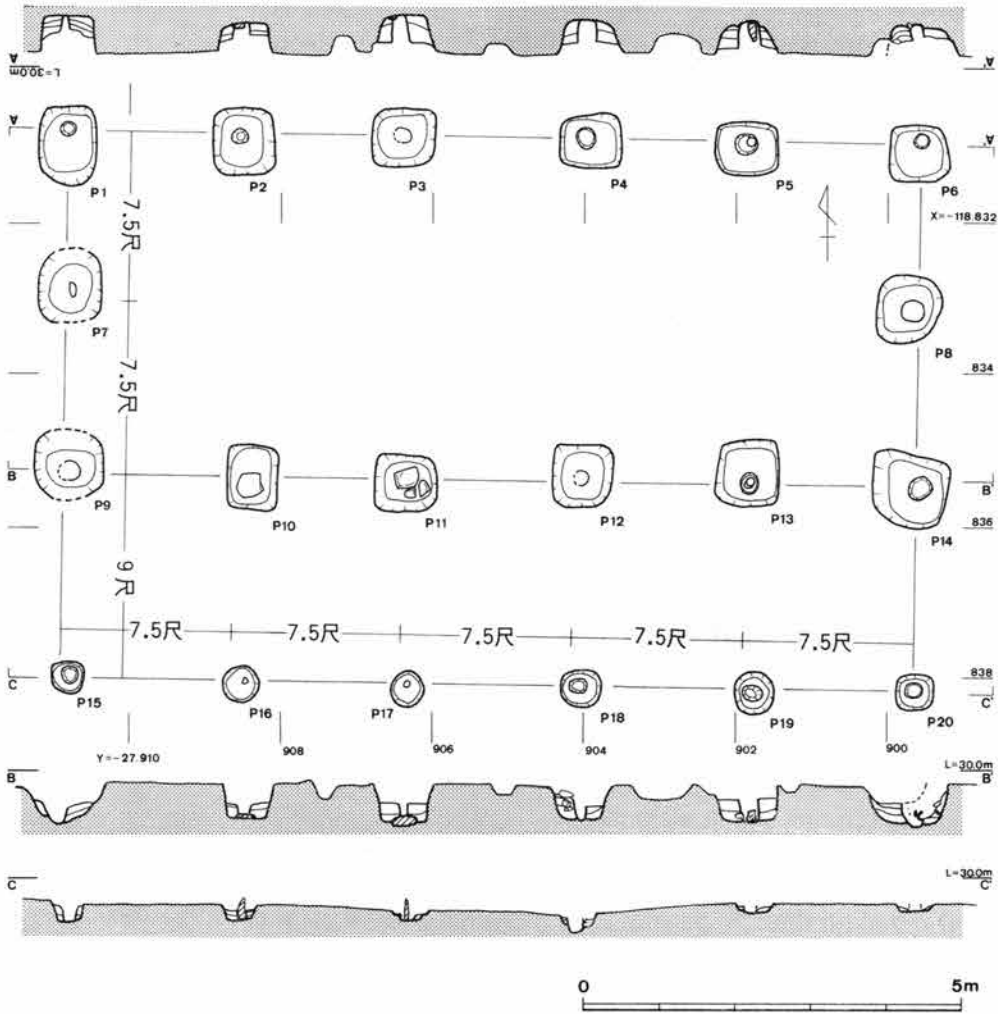
轍 S X31009 Dトレンチで検出した東北東から南南東方向(N75°E)の片輪の痕跡である。轍の幅は10cm前後, 深さ約3cmを測る。

轍群 S X31010 Dトレンチで検出した東西方向の轍群である。平行する轍が暗褐色土層・黒褐色土層に深く食い込み、重なり合い、何度も行き来したようすを窺わせる。轍の最も深いものは、約20cmの深さがある。平行する轍は、三群以上に分けでき、各々の間隔は、およそ140~150cmと推定される。確認できるもので、轍の幅は約10cm程度である。また、東側のGトレンチでも、S X31010の続きを確認した。ここでは、轍はDトレンチほど明瞭ではなかったが、東西方向の轍群S X31010が西二坊大路東側溝S D28501によって分断されていることがわかった。この状況から、大路の側溝と轍の先後関係が判明し、轍群S X31010を長岡京造営に伴うものと推定した。

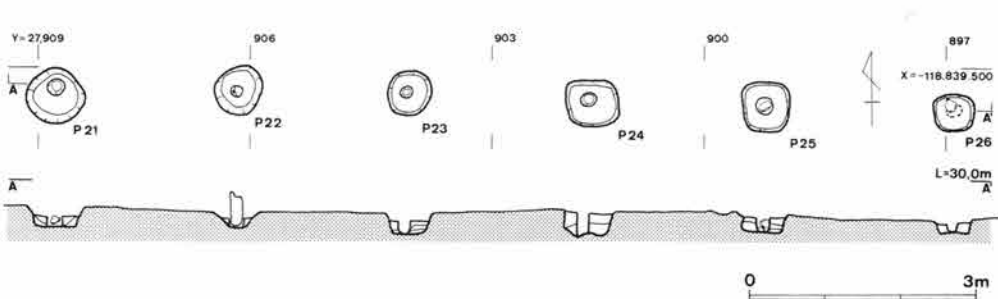
轍群S X31010の上層に堆積した砂礫層には、礫が轍に深く食い込んだ状況を窺わせるものがあり、車輪の沈下を防ぐため砂礫を敷いたものと考えられる。礫には長径20cm前後のものがある。砂礫層には、ほとんど遺物を含まない。

溝状遺構 S D33513 Dトレンチで検出した南北方向の溝状遺構である。南北約13m・東西2.5m以上の広がりを確認した。北方から流れ込んだ状況の砂礫層と、その上に暗褐色土層・黒褐色土層等が堆積する。これらの堆積層は、厚いところで33cmを測る。砂礫層には、奈良時代から長岡京期の土器を含むことから、この溝状遺構は長岡京造営に伴い埋められたと推測される。

土坑 S K28505 Aトレンチ北部で検出した不整円形の土坑である。南北約7m・東西約



第9図 掘立柱建物跡 (S B 28511) 実測図



第10図 柵列 (S A 28512) 実測図

4.7mを測り、最も深いところで約0.2mある。土坑内から、瓦片や土師器・須恵器などが出土した。出土遺物から、長岡京造営に伴い埋められたものと推定される。

⑤奈良時代の遺構

奈良時代の遺構には、長岡京造営で埋められた建物跡、柵列跡、井戸(流路の一部を埋めて造った)と自然流路がある。そして、古墳時代の遺物包含層を掘り込んだ、砂礫の詰まった東西方向の溝(S D31018・31020ほか)がある。砂礫層には、古墳時代の土器片を含むが、遺構検出状況から奈良時代の遺構と推定している。

掘立柱建物跡 S B28510 Aトレンチの東南で検出した南北方向に並ぶ3か所の柱掘形である。柱掘形は、径0.4~0.5mで円形及び隅丸方形を呈し、深さ0.2m前後を測る。北端の柱掘形には柱痕がみられる。柱掘形の心々間隔は、2.25m(7.5尺)を測る。

南北方向に並ぶ柱掘形は、東西方向の建物の梁間と推定している。また、北端及び中央の柱掘形が建物跡S B28511の柱掘形と並ぶので、現時点では、この建物跡を奈良時代に考えている。ただ、大路の側溝ともほぼ平行するため、長岡京期とすることも可能である。

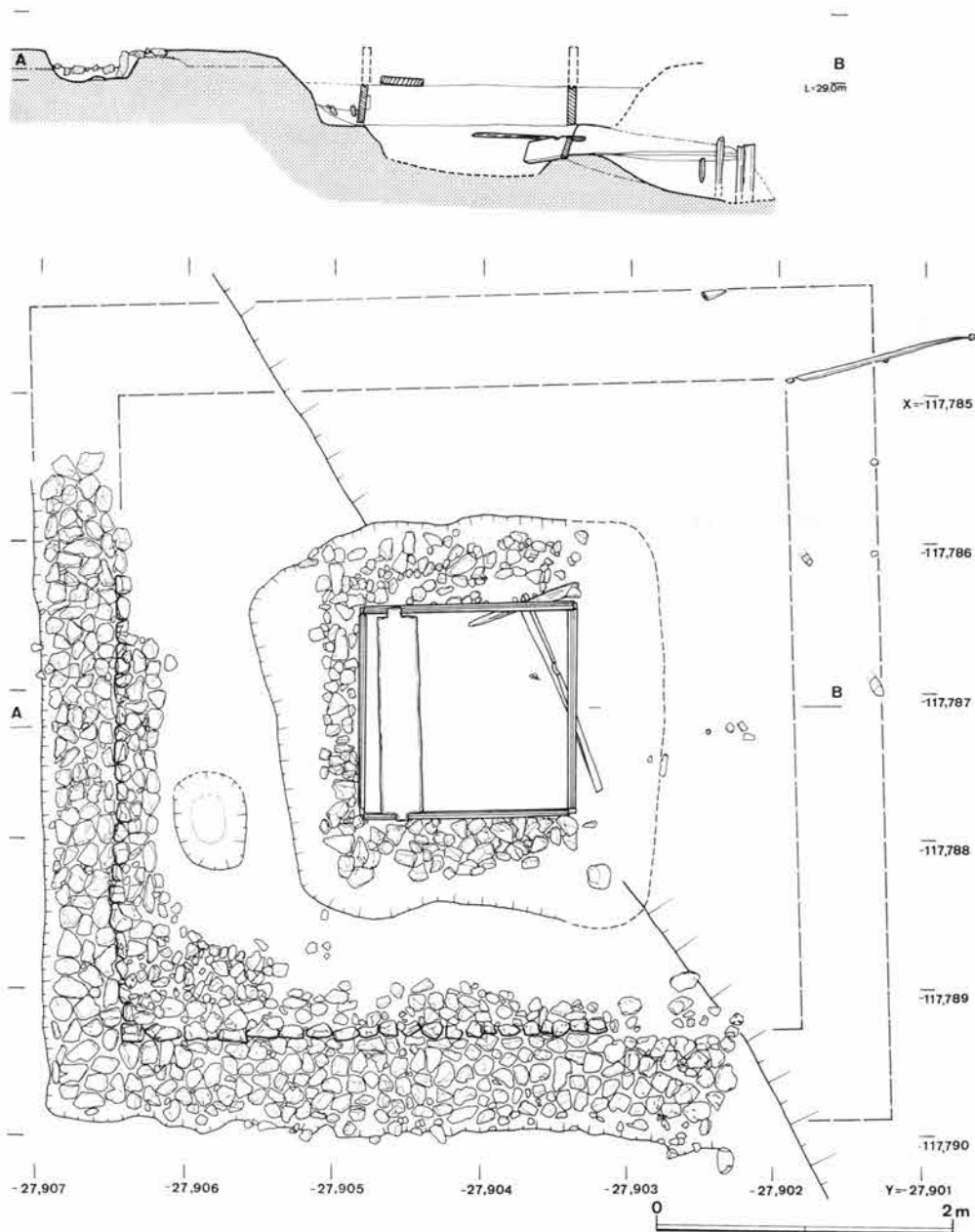
掘立柱建物跡 S B28511 Aトレンチ南部の、西二坊大路の路面にあたる場所で検出した廂の付く建物跡である。東西5間・南北2間の身舎の南側に1間の廂が付く、東西方向の掘立柱建物跡である。柱間は、身舎のところで桁行・梁間とも7.5尺(2.25m)を測る。廂の部分で南北(梁)が9尺(2.7m)を測る。身舎の柱掘形は、一辺0.8m前後の隅丸方形を呈し、検出面からの深さ約0.4mを測るものが多い。廂の柱掘形は、一辺0.4~0.5mの隅丸方形及び同程度の円形を呈し、身舎のものに比べひとまわり小さい。これらの柱掘形には柱痕が明瞭に確認できるものが多い。また、柱根が残るもの(P5・P13・P16・P17)、礎石が残るもの(P10・P11)もある。

柱の方位は、国土座標の方位に近いが、廂の柱掘形の検出状況(暗褐色土の遺物包含層の下層)から、長岡京造営に伴い埋められたものと推定している。また、柱掘形から出土する少量の瓦片、土師器片(甕)からも長岡京期前後と推定される。

柵列 S A28512 建物跡S B28511の南で検出した東西方向の柱列である。東西方向に並ぶ5か所の柱掘形の心々間隔は、8尺(2.4m)を測る。柱掘形は、一辺0.5~0.6mの隅丸方形及び同程度の円形を呈し、遺物包含層の下から検出したため、深さは0.15~0.3mと浅い。柱根が残る柱掘形(P22)では、本来の深さは0.4m以上と推定される。また、柱掘形にはいずれも柱痕が確認できる。

井戸 S E31035 長岡京の西二坊大路と二条条間大路が交差する。辻の中央に相当する位置で検出した敷石の排水施設を伴う井戸である。この井戸は、約2.5m四方の掘形内に、井籠箱の井戸枠を据え置き、その周辺に礫を敷き詰めて構築している。流路側では井戸枠

を据え置くとき、板材を台座として使用している。井戸の底に曲物等はみられない。井籠組の井戸枠は、上面にホゾの溝を、これと組み合う上段のものには凸ホゾを施す、極めて精巧な造りである。この両者を組み合わせた2段組であったと考えられる。井戸枠から約1.5m離れて、西と南に石敷きの溝が巡っている。西側の溝の幅は50cm, 南側の溝の幅



第11図 井戸 (S E 31035) 実測図

は50～60 cm、深さはいずれも15cmを測る。もとは四方に巡らされていたと考えられる。石敷きの溝は、ほぼ真東西・南北に向くが、国土座標でみると西側の溝で、わずかに西に振る(N1°W)。この溝から少量の長岡京期以前の土器等が出土した。

溝S D28518・19・20・21・22 Bトレンチで検出した東西方向の溝である。暗褐色土層を掘り込んだ幅30cm前後の溝で、なかに砂礫が堆積していた。交差するもの、東方で合流するものがある。砂礫層には、わずかに須恵器等が含まれる。

自然流路S D31012 Dトレンチで検出した北西から南東方向の流路跡である。幅3.0～6.5m・深さ0.6m以上ある。この流路跡から7世紀末の須恵器が出土した。

⑥古墳時代の遺構

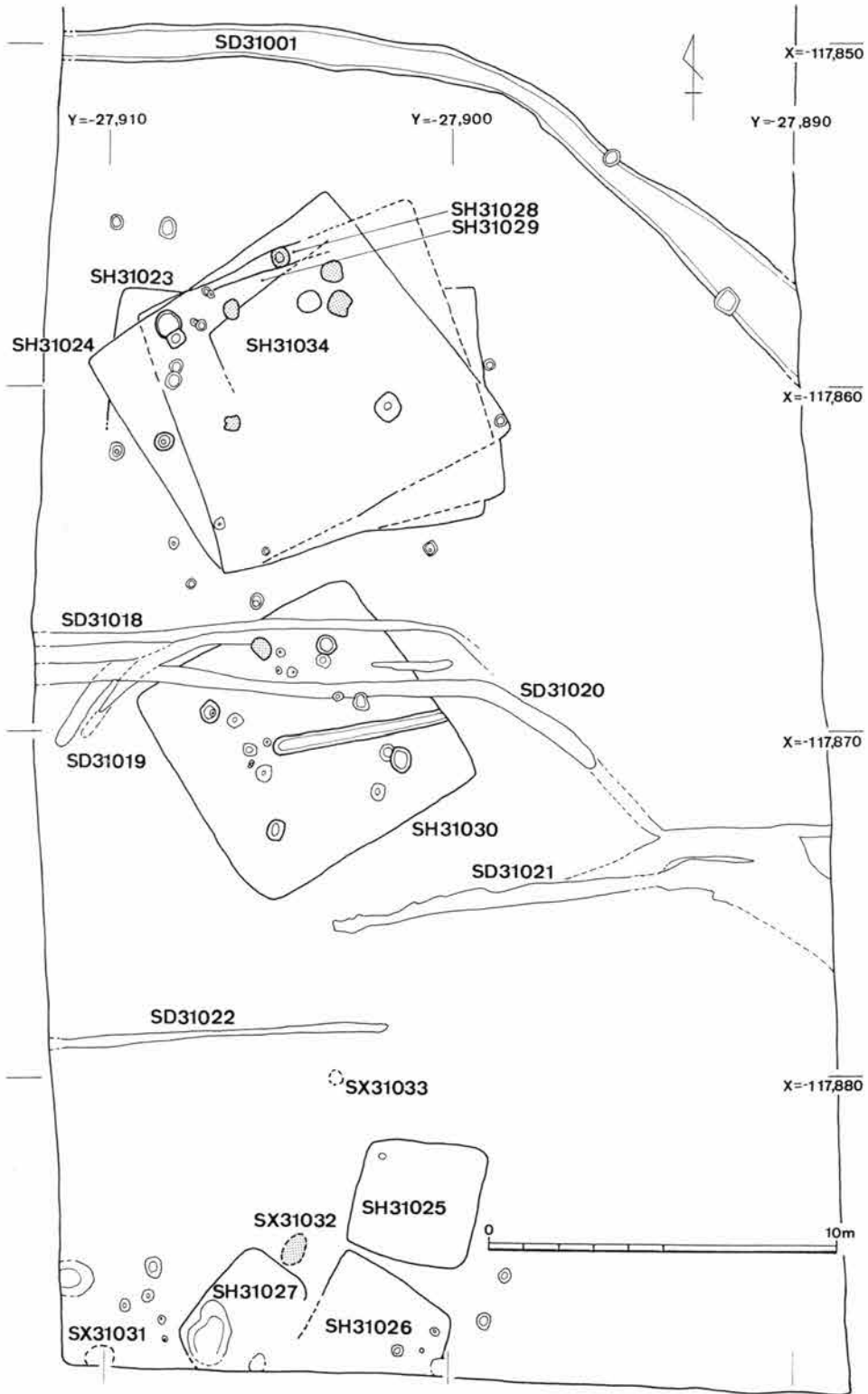
古墳時代の遺構と推定されるものには、住居跡群、集落を区画する溝や土坑・土器だまり、柱穴などがある。

溝S D31001 Bトレンチ北部の下層で検出した集落を区画する東西方向の溝である。トレンチ中央で弧を描くように南東方向に曲っている。西方で溝の幅1m前後・深さ0.4m前後を測り、円弧状に曲がるところでやや狭くなるが、東方では浅く幅広くなる。この溝から古墳時代後期の須恵器・土師器・紡錘車などが出土した。

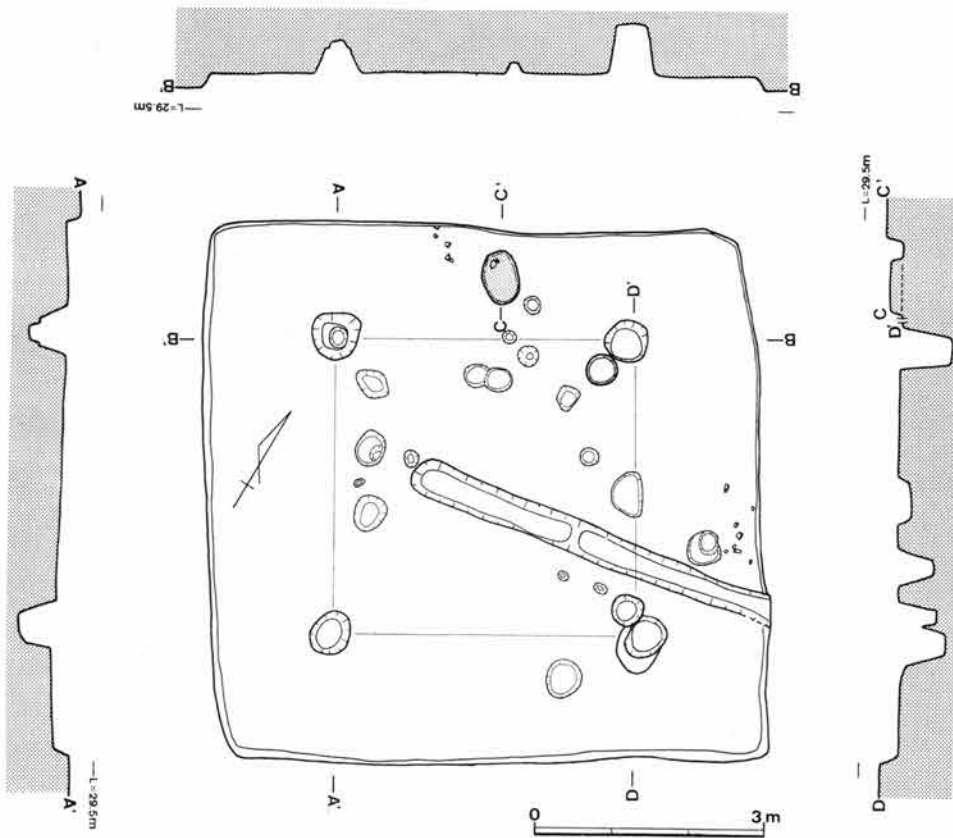
竪穴式住居跡S H31023・24・28・29・34 Bトレンチ北部の下層、溝S D31001の南で検出した住居跡群である。複雑に切り合った住居跡で、不明なところもあるが5棟を想定している。先後関係のわかるものでは、住居跡S H31023を切ってS H31028を造り、これらをきってS H31024が造られている。また、S H31028に伴うと考えられる焼土を切って、S H31029を造っている。住居跡の規模はS H31024を約8 m×9 m、S H31028を約8 m×8.5 mと推定復原している。遺構検出面からの深さは、S H31023で約5 cm、その他のものは10～15 cmを測る。住居跡群内で5か所の焼土を検出したが、住居との関係が明瞭なのは、S H31028のみである。

住居跡を検出する途中で、古墳時代後期を中心とする時期の須恵器・土師器等が出土したが、住居跡との関係は不明な点が多い。また、出土遺物のなかには小型の鞆羽口がみられる点が注目される。

竪穴式住居跡S H31030 上記の住居跡群の南で検出した。一辺7.0m前後の隅丸方形を呈し、北西の辺にカマドの痕跡と考えられる焼土がみられる。遺構検出面からの深さは15～20cmを測る。住居跡の中央付近から幅約40cm・深さ20～40cmの溝が東方向にのびる。この溝は住居の外にはのびない。住居跡内に主柱穴4か所のほか、柱穴及び柱穴状のものが、その一つから滑石製勾玉が出土している。また、その他、土師器・須恵器の細片も出土した。



第12図 Bトレンチ下層遺構平面図(住居跡ほか)



第13図 竪穴式住居跡（S H31030）実測図

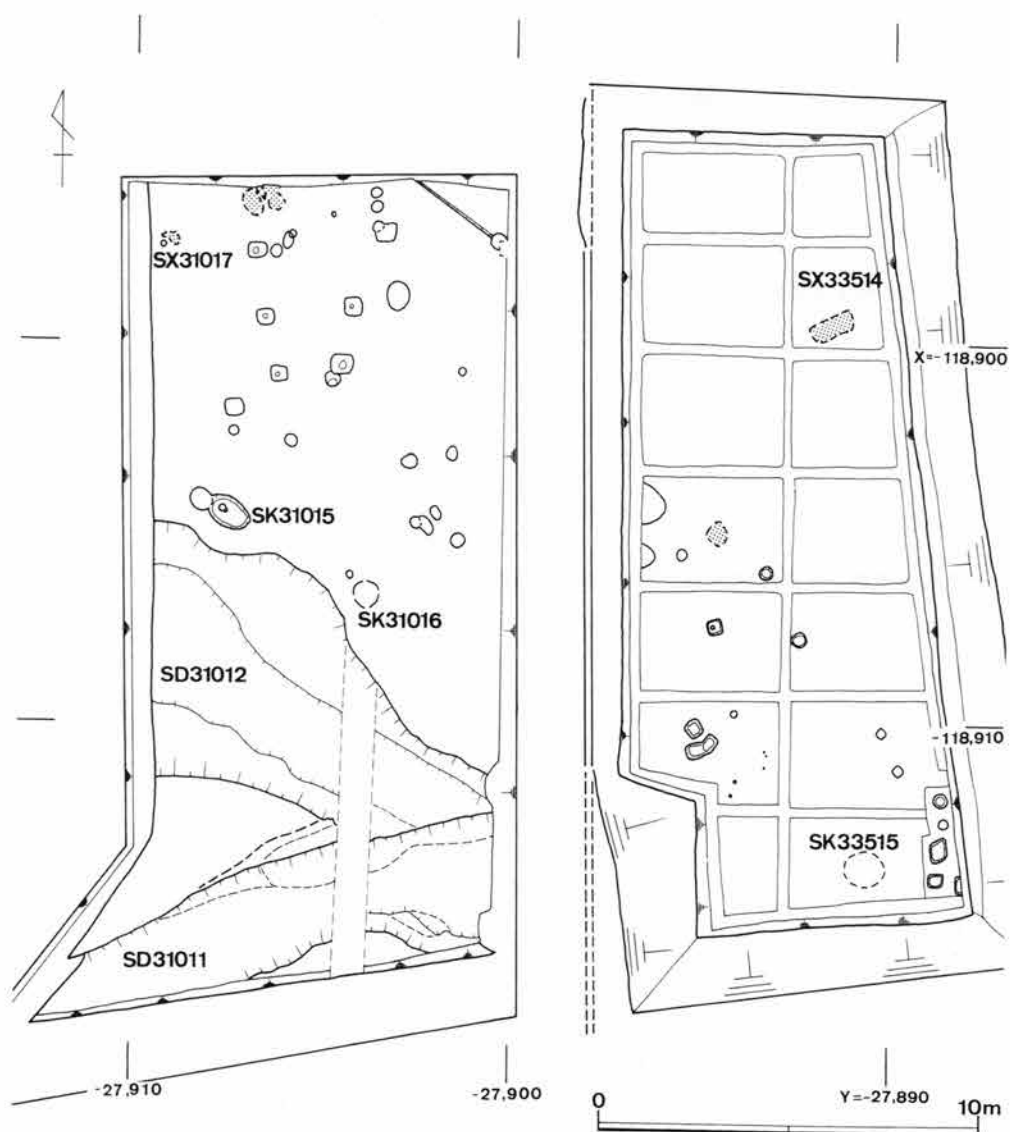
竪穴式住居跡 S H31025・26・27 Bトレンチの南端で検出した住居跡群である。住居跡 S H31025は、隅丸方形を呈し、一辺3～3.5m、検出面からの深さ15cm前後を測る。住居跡内から土師器の高杯等が出土した。住居跡 S H31026は北東の一辺と両隅からのびる各辺の一部分のみ検出された。S H31026は北東の一辺が約3.5m、検出面からの深さ10cm前後を測る。中から土師器・須恵器の破片が出土した。住居跡 S H31027は北西の一辺と北東辺の一部が検出された。北西の一辺が約3.2m、検出面からの深さ5～15cmを測る。S H31026との関係は不明である。なお、S H31027の北東で焼土層の広がり（S X31032）を検出し、その上面には土師器の高杯等が散布していた。

土坑 S K31015 Dトレンチ中央部で検出した楕円形の土坑である。長径1.2m以上・短径0.8m、検出面からの深さ20cm前後を削る。古墳時代後期の須恵器の壺が底部を上にして出土した。

土坑 S K31016 S K31015の東南で検出した土坑である。土坑の規模は不明であるが、なかから古墳時代後期の須恵器の壺が出土した。

上記の遺構以外に土器が集中するところや、焼土層の広がりがあり、各々に S X 31031・S K 33515 及び S X 31017・33514 と遺構番号を付した。S X 31031 では土師器の甕等が出土した。S K 33515 では約 1.4m の範囲に土器が散布し、その中央部分には集中するところがある。S X 31017 では焼土層の中に、土師器の高杯が据えられていた。S X 33514 でも焼土層の中に、須恵器の高杯が置かれていた。その状況から S X 31017・S X 33514 は住居跡のカマドかそれに類するものと考えられる。なお、アミの部分焼土を表わす。

また、上記の遺構以外に、D・G トレンチでは古墳時代と考えられる柱穴群を検出し、



第14図 D・G トレンチ下層遺構平面図

建物跡等が推定されるが、柱穴相互の関係は不明である。

⑦弥生時代の遺構

弥生時代の遺構には、方形に巡る溝があり、この溝で区画された範囲を墓と推定した。このうち弥生土器が出土する溝は1か所であるが、これと同様の溝が3か所発見された。

方形周溝墓1を巡る溝 S D28507 Aトレンチで検出した方形に巡る溝である。西辺を除く三辺の溝を検出した。そのうち東辺は幅約1m、検出面からの深さ40~50cmを測る。北辺の北東隅はやや狭いが、この西側で広がり若干の凹みがみられ、そこに弥生土器(壺)が散乱していた。これらのことから、この場所に埋葬施設があった可能性が高い。また、東辺の溝からも弥生土器の底部が出土した。

以上のことから、四方に溝を巡らせた弥生時代中期の方形周溝墓で、一辺の長さ10m前後と推定される。これを方形周溝墓1とした。中心部の埋葬施設は未検出である。すでに削平されたものと考えられる。溝の東南隅からのびる溝状の凹み S D28515(黒褐色土の埋土)は、遺物を含まないことから、遺構でない可能性が高い。

方形周溝墓2を巡る溝 S D28503 S D28507の東で検出した方形に巡る溝である。一辺の長さ10~11mを測る。溝の幅は南辺で2m前後、西及び北辺で約1mを測る。西南隅が最も深く約70cmを測り、北及び東に向かって浅くなる。溝の上面に後世の遺物がわずかに見られる程度で、それ以外に遺物は出土していない。

溝の方向が S D28507 とほぼ平行するところから、弥生時代の方形周溝墓と推定される。これを方形周溝墓2とした。

方形周溝墓3を巡る溝 S D28504 S D28503の北で検出した「L」字状に曲がる溝である。溝の幅40~70cm・深さ10cm前後を測る。上記の溝との関係から弥生時代の方形周溝墓と推定される。これを方形周溝墓3とした。

方形周溝墓の区画溝のほかは、顕著な弥生時代に属する遺構はみられないが、後世の遺物に混じって弥生土器が出土する。このうち、弥生土器が少量出土した場所を S X31033 とした。

B. 井ノ内地区

井ノ内(G S N)地区は、E 2・Fトレンチの北端が最も高く、ここから南に向って緩やかに下る。耕作土、床土の下に中世遺物包含層が薄く堆積し、その下はおおむね粘砂土層、砂層、砂礫層が堆積し全体がかつて流路であったことを窺わせる。これらの堆積層を掘り込んだ中世~長岡京期の遺構があり、平安時代~長岡京期の北から南方向の流路跡がみられる。また、E 1・Fトレンチ南端では、自然流路 S D28509の埋土を確認した。



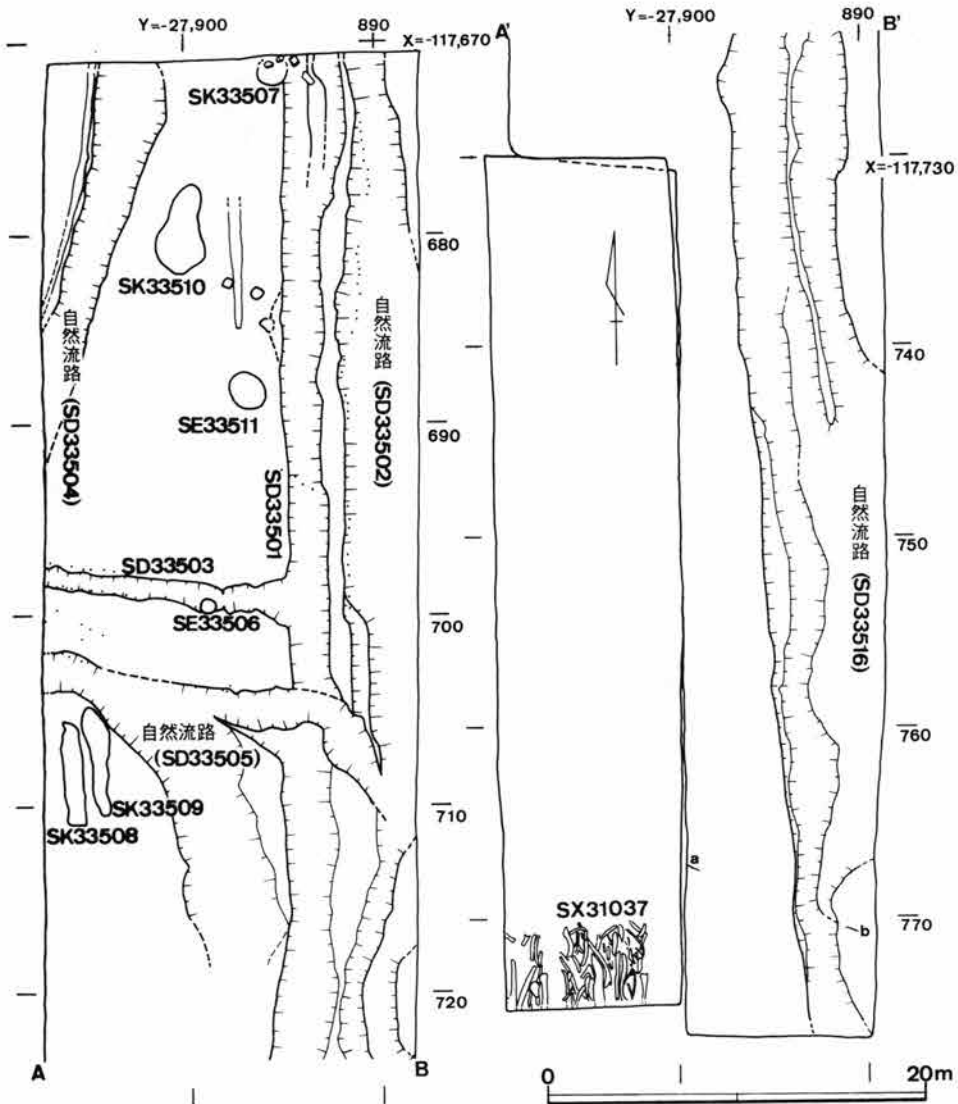
第15図 Aトレンチ下層遺構平面図(方形周溝墓)

①近世の遺跡

近世井戸 S E33501 Fトレンチの北部で直径約2mの近世の井戸を検出した。検出面から約0.9mまで素掘りで、これより下に底をぬいた桶を三段に積み重ねてあった。最下層までの深さは3m余りを測る。井戸上層から18世紀代の土器(染め付け)が出土した。

②中世の遺構

中世の遺構には、E2・Fトレンチ北部で検出した水田耕作関係の南北方向の素掘り溝がある。この溝は幅30～50cm・深さ5～10cmを測る。その他、瓦器が出土する土坑等がある。



第16図 E1・E2・Fトレンチ遺構平面図

土坑 S K33508・09 E2トレンチで検出した南北方向に平行した土坑である。S K33508は南北が約5m・東西0.9m・深さ10~20cmを測る。S K33509もほぼ同規模で若干浅い。瓦器、土師器、須恵器、緑釉陶器の破片が出土した。

土坑 S K33510 E2トレンチ北部で検出した瓢箪形土坑である。南北約2.7m, 東西の最大幅1.5m・深さ約10cmを測る。瓦器・土師器等の細片が出土した。

③平安時代の遺構

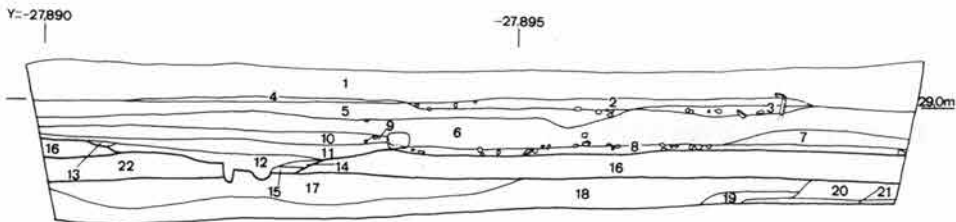
平安時代の遺構には、北方から南方に流れた流路跡、長岡京期の遺構を切る井戸、土坑がある。井戸には、時期がわかる遺物はないが、切り合いから平安時代と判断した。

自然流路 S D33502 Fトレンチで検出した北から南に流れた流路跡である。途中で西方からの流路等と合流する。この合流する地点(X=-117,710.000付近)から南を、新たに流路 S D33516と呼称する。流路 S D33502の北端での幅は2m余り、最大幅は4m以上あり、深さ10~40cmを測る。流路の西側には杭が打ち込まれていた。合流点より北では平安時代(10世紀代)の須恵器・緑釉陶器等が出土した。

自然流路 S D33504 E2トレンチ北部で検出した北から南方に流れた流路跡である。流路 S D33504の北端での幅は約3m, 最大幅は3.5m, 深さ10~30cmを測る。流路内から和同開珎、刀子、緑釉陶器等が出土した。

自然流路 S D33505 E2トレンチ中央部で検出した、西方から東方及び南東方向に流れる流路跡である。一部は長岡京の大路側溝 S D33501を横断後、S D33502等と合流する。流路から長岡京期の土器などが出土した。堆積した砂礫層の上面で隆平永寶を採取した。

自然流路 S D335116 前述のとおり、流路 S D33502と05の合流点から南(流路が錯綜した長岡京の大路側溝 S D33501の上層をも含む)を自然流路 S D33516と呼称する。ここでは流路が複雑にからみ合い、流路 S D33502・05及び大路側溝 S D33501の区別ができない。



第17図 Fトレンチ南壁土層断面図

1. 淡褐色土(アゼ) 2. 茶褐色土 3. 暗黄褐色土 4. 暗黄褐色砂層 5. 灰褐色土
 6. 暗灰褐色土 7. 暗灰褐色土(6より淡い) 8. 暗灰褐色粘砂土 9. 暗灰褐色砂層
 10. 灰色砂礫層 11. 灰色砂礫層(シルト混) 12. 淡青灰色砂礫層 13. 灰色砂層
 14. 灰色粘砂層 15. 灰色粘質土 16. 黒褐色粘質土 17. 淡青灰色シルト層 18. 淡青灰色粘質土
 19. 灰色砂礫層 20. 青灰色砂礫層 21. 灰色粘土 22. 暗灰色粘質土
 16・22. 流路 S D28509を埋めたときの土 10・11・12. S D33516の堆積層

また、Fトレンチ南壁断面では、堆積した砂礫層はおおむね3層に分けることができる。流路の底には凹凸がみられる。砂礫層には長岡京期～平安時代の遺物が含まれる。

井戸 S E33506 Fトレンチで検出した溝 S D33503を切って造られた素掘りの井戸である。掘形は直径約80cmの円形で、検出面からの深さ約1.2mを測る。井戸の底に曲物等は置かれていないが、湧水層まで到達していることから井戸と推定している。須恵器の杯Bの破片が出土した。

土坑 S K33506 Fトレンチ北端で検出した側溝 S D33501に接した土坑である。直径約1.3m、検出面からの深さ約0.6mを測る。土坑の上層で獣骨、長岡京期の土器等が出土した。

④長岡京期の遺構

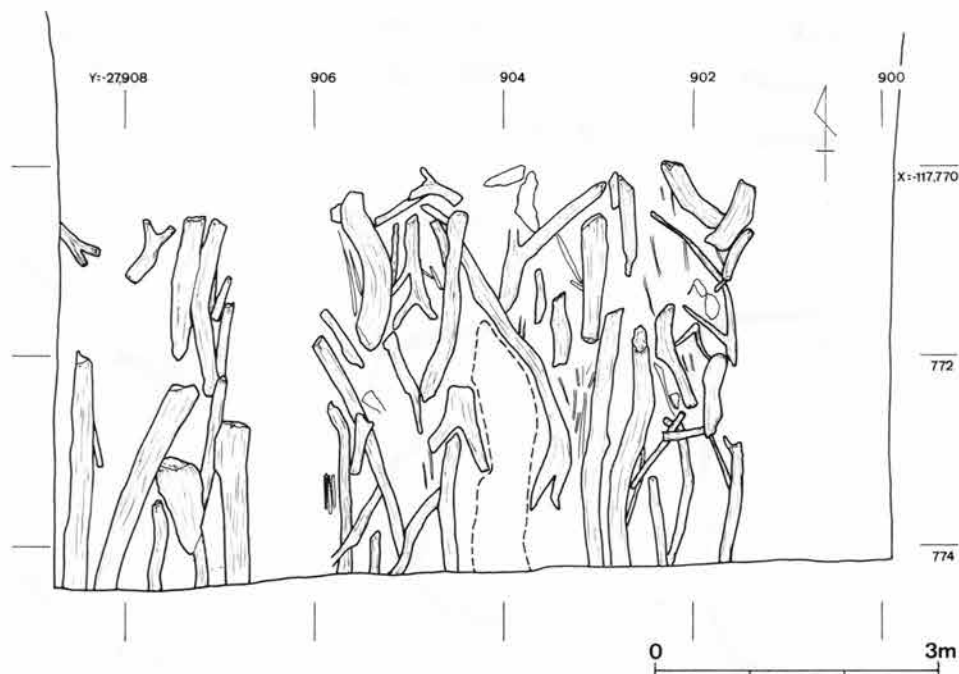
長岡京期の遺構には、西二坊大路の東側溝と推定される溝と、これに直交する溝、及び自然流路を埋めたときの丸太敷きの遺構がある。

溝 S D33501 Fトレンチで検出した南北方向の素掘り溝である。溝幅は1.6～2.0m・深さ20～40cmを測る。この溝が流路 S D33505と交差する地点から南では分断され、溝の痕跡さえ明瞭ではない。溝の北端で幅広くなったところがあり、大きな石が流れ込んでいた。石の大きいものは32～67kgある。これは、一度に多量の水が流れた跡と推定される。溝の堆積層は下層の砂礫層と、上層の砂礫を含む粘砂土・粘質土とがある。堆積層から長岡京期の土器などが出土した。

この溝の中心の国土座標は、 $X = -117,680.000$ のとき $Y = -27,893.950$ 、 $X = -117,700.000$ のとき $Y = -27,893.800$ となる。この座標値から溝 S D33501を西二坊大路東側溝と推定した。

溝 S D33503 E2・Fトレンチで検出した S D33501に直交する東西方向の溝である。溝幅1～1.4m・深さ20～30cmを測り、S D33501に結合する部分はやや広くなる。この溝の西部で、両側に約50cm間隔に杭の打ち込まれた場所があり、溝を通過するための橋状施設と考えることも可能である。溝の中から木簡・墨書土器・長岡京期の土器等が出土した。

丸太敷き路盤改良遺構 S X31037 E1トレンチの南端で検出した丸太敷きの遺構である。自然流路 S D28509を途中まで埋めた後、直径10～40cmの丸太材を南北方向に並べ、その間に小枝を敷き、上面を砂礫と粘土で突き固める。南北約4m・東西7mの範囲で確認し、西及び南にのびると推測される。その北端はほぼ一直線に揃う。また、東にのびないことが、Fトレンチの調査で確かめられた。これは、西方の段丘面と流路 S D28509との段差が大きい場所、地盤が最も難弱な部分にのみ施工されている。路盤の改良にはよく使われる方法であるが、長岡京ではこれが初めての例である。



第18図 丸太敷き路盤改良遺構(S X 31037) 実測図

この S X 31037 の北端の国土座標は $Y = -27,902.000$ のとき $X = -117,770.000$ である。また、検出した範囲での南端の国土座標は $Y = -27,908.000$ のとき $X = -117,774.400$ である。二条条間大路南側溝 S D 28502 の中心から、S X 31037 の北端までは約 30m を測る。

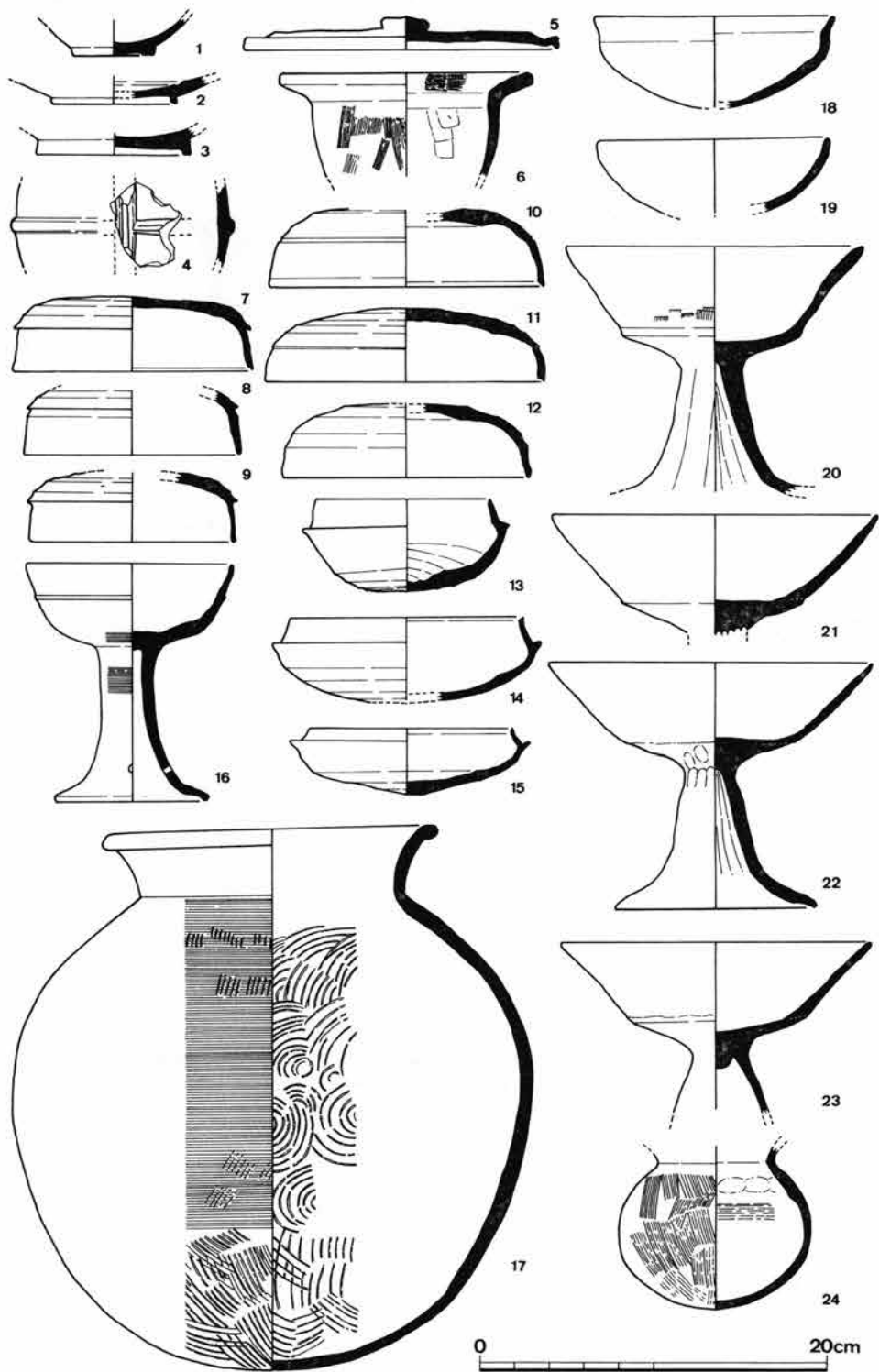
このような路盤改良が、流路 S D 28509 を埋め立てた他の場所でみられないこと、二条条間大路南側溝との距離から推測すれば、S X 31037 の上層に二条条間大路北側溝を想定することも可能であろう(実際には遺構として検出していない)。

自然流路 S D 28509 を埋め立てた黒褐色土層は、F トレンチ西壁で南端から約 9m まで (a 地点) 確認した。この a 地点と流路東側の b 地点を結んだ線の南が、黒褐色土層の範囲となる。E 1 トレンチ西壁では、a と b の延長線より北方で黒褐色土層を確認した。

F トレンチの南部で土層を確認するために断ち割り作業を実施したが、顕著な遺物包含層を確認するには至らなかった。流路を検出した粘砂土層から土師器 1 片と、埋没した立ち木を確認したにとどまった。E 1 トレンチ・E 2 トレンチ南部では、一部に黒灰色土・黒褐色土があり、古墳時代前期の土器が含まれる。粘砂土層の凹み等に堆積したものと考えられる。

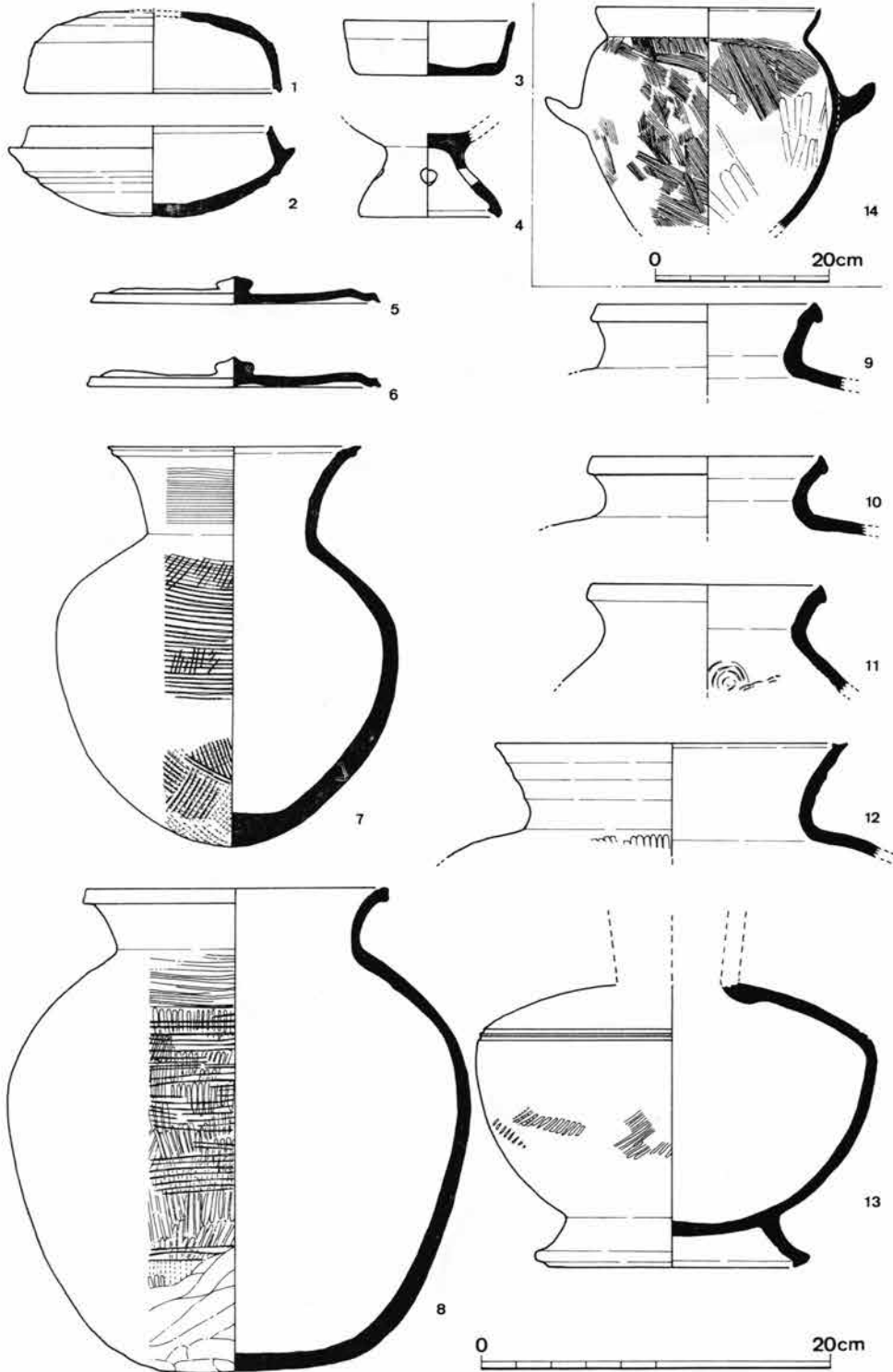
4. 出土遺物

この調査で出土した遺物には、近代から弥生時代に至る各時代のものがあり、なかでも、



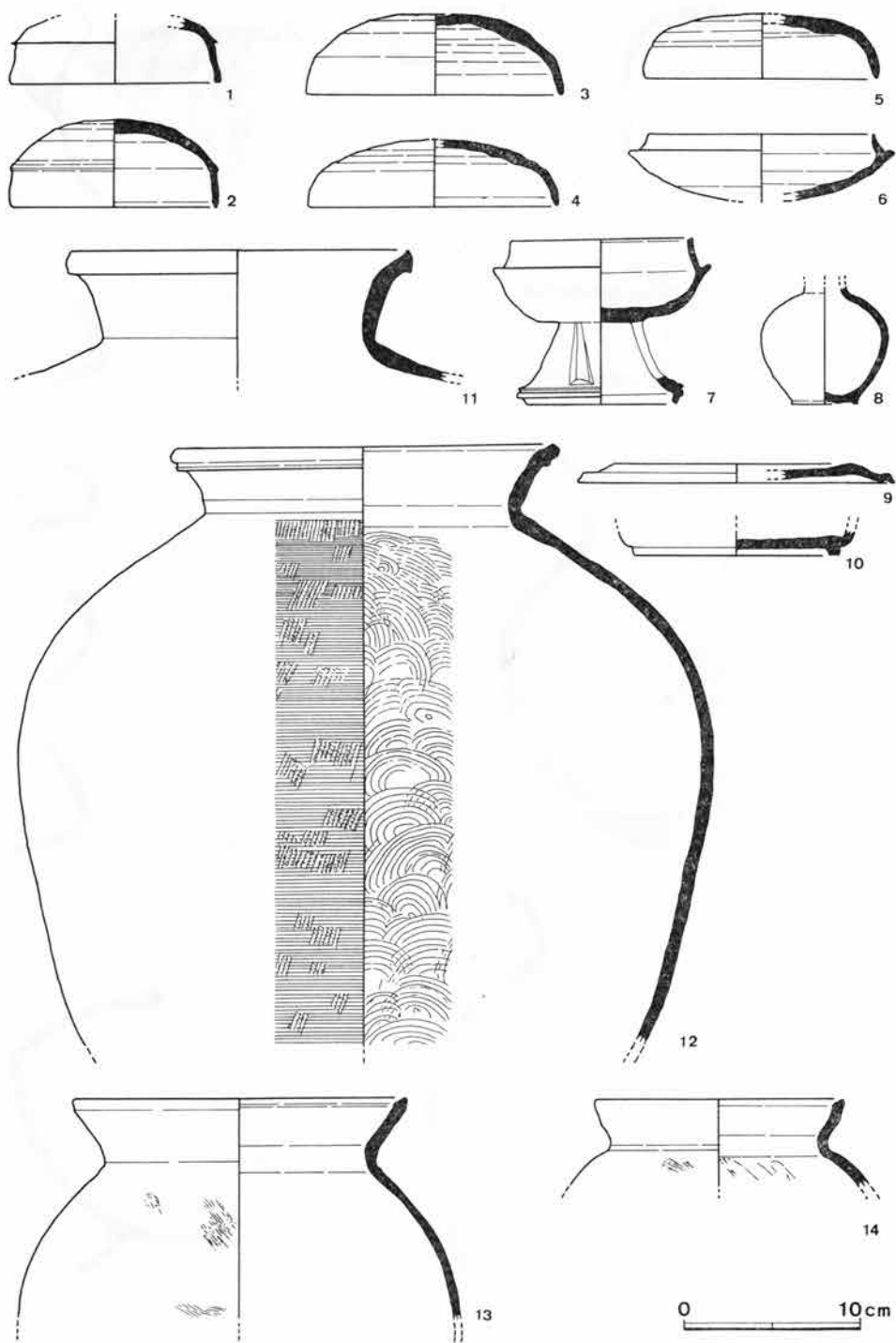
第19図 A・Bトレンチ出土遺物実測図

1. 中世溝出土 5・6. S D28501出土 10・11・17. S D31001出土 23・24. S H31025出土
1~17. 須恵器 18~24. 土師器



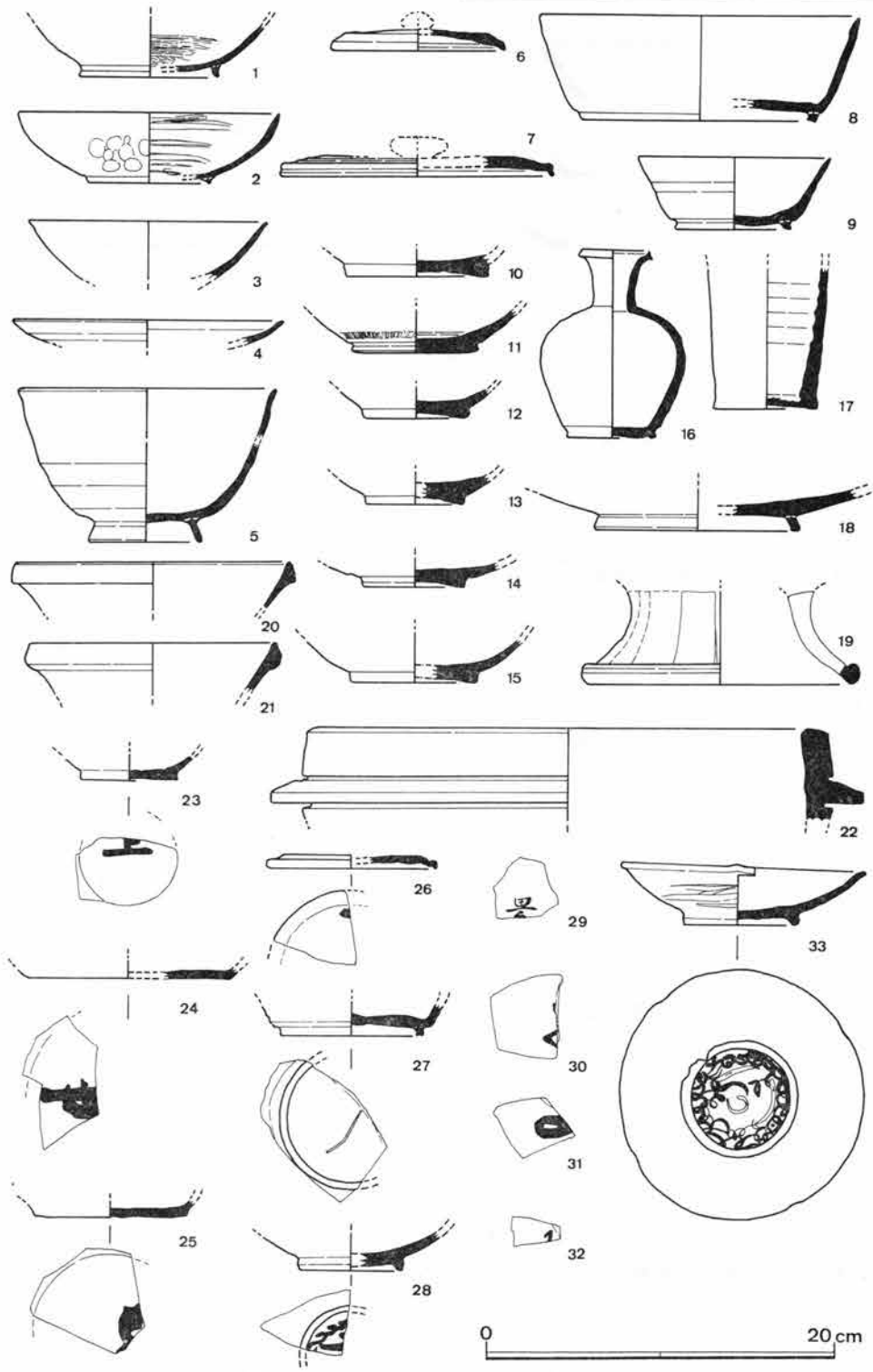
第20図 Dトレンチ出土遺物実測図

3・13. S D31012出土 7. S K31015出土 8. S K31016出土 9~11. S D31011出土
5・6. S X31010上面出土 1~13. 須恵器 14. 土師器



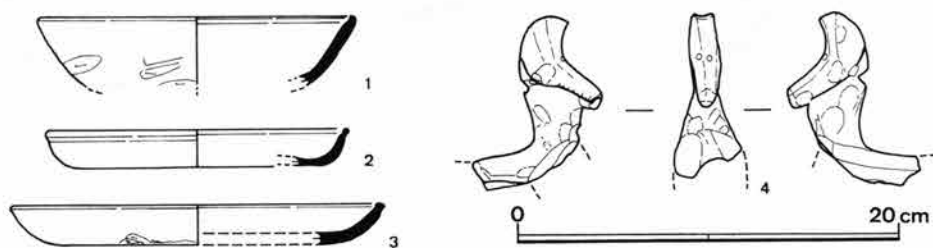
第21図 Gトレンチ出土遺物実測図

7. S X33514出土 3・12. S K33515出土 他はいずれも暗褐色土層・黒褐色土層より出土
1~12. 須恵器 13・14. 土師器



第22図 E 2・F トレンチ出土遺物実測図

1. S D33502出土 10. S D33504出土 3~9・11~19・23~27・30・31. S D33516出土
29. S D33505出土 2・20~22・28・32・33. 包含層出土



第23図 S E 31035出土遺物実測図

古墳時代後期と奈良時代から長岡京期のものが多い。遺物の種類も土器の他に、木簡・墨書土器・木製品・金属器・銭貨・瓦類などさまざまなものがある。ここでは、木簡・墨書土器等を含む良好な資料(S D 28509)及び長岡京期の遺物を中心に記述する。その他の土器は各トレンチ、遺構ごとに述べる。

①土器

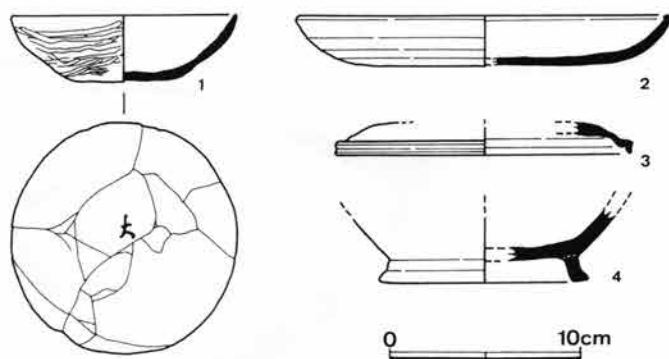
A・Bトレンチ出土の土器(第19図) 中世素掘り溝5から白磁碗の低部(1)が瓦器片とともに出土し、時期は13世紀前後と推定される。暗褐色土層等から出土するものに緑釉陶器の段皿(2)、碗の底部(3)、四足壺の体部(4)などがある。長岡京の西二坊大路東側溝S D 28501から須恵器の蓋(5)、土師器の甕(6)が出土している。集落を区画する溝S D 31001からは須恵器の杯蓋(10・11)、甕(17)が出土している。ほぼ陶邑編年のⅡ型式3段階(中村浩編年^(注6))に相当する。住居跡S H 31030の上層から須恵器の無蓋高杯(16)が出土している。住居跡群S H 31024・28・29・34の焼土層周辺から土師器の高杯(20・21・22)が、検出途中の上層からは須恵器の杯身(15)がそれぞれ出土している。また、住居跡S H 31025から土師器の高杯(23)、甕(24)が出土しているが、須恵器は出土しなかった。黒褐色土層から須恵器の杯身(13・15)、杯蓋(7・8・9・12)、土師器の杯(18・19)などが出土している。

Dトレンチ出土の土器(第20図) 平安時代の自然流路S D 31011から須恵器の甕(9・10・11)が出土している。轍群S X 31010の上面からは長岡京期前後の須恵器の蓋(5・6)が出土している。流路跡S D 31012から須恵器杯(3)、長頸壺の体部(13)が出土した。時期は7世紀末頃と推定される。暗褐色土層・黒褐色土層からは古墳時代後期の須恵器の杯蓋(1)、杯身(2)、土師器の把手付甕(14)などが出土している。また、黒褐色土層には弥生土器も含まれる。

Gトレンチ出土の土器(第21図) 暗褐色土層・黒褐色土層から古墳時代後期の須恵器の杯蓋(1・2・4・5)、杯身(6)、甕(11)や、それと同時期の土師器(13・14)、長岡京期頃の蓋(9)、杯B(10)、壺M(8)が出土している。遺構に伴うものには、焼土層の集積S X 33514で須恵器の有蓋高杯(7)が、土器だまりS K 33515で須恵器の杯蓋(3)・甕(12)などが

出土している。

E 2・F トレンチ出土の土器(第22図) トレンチ北部の遺物包含層から瓦器碗(2)、白磁碗(20・21)、施釉陶器の素地の底部に墨書したもの(28)、須恵器に墨書したもの(32)や、滑石製の石鍋(22)など



第24図 S D33503出土遺物実測図

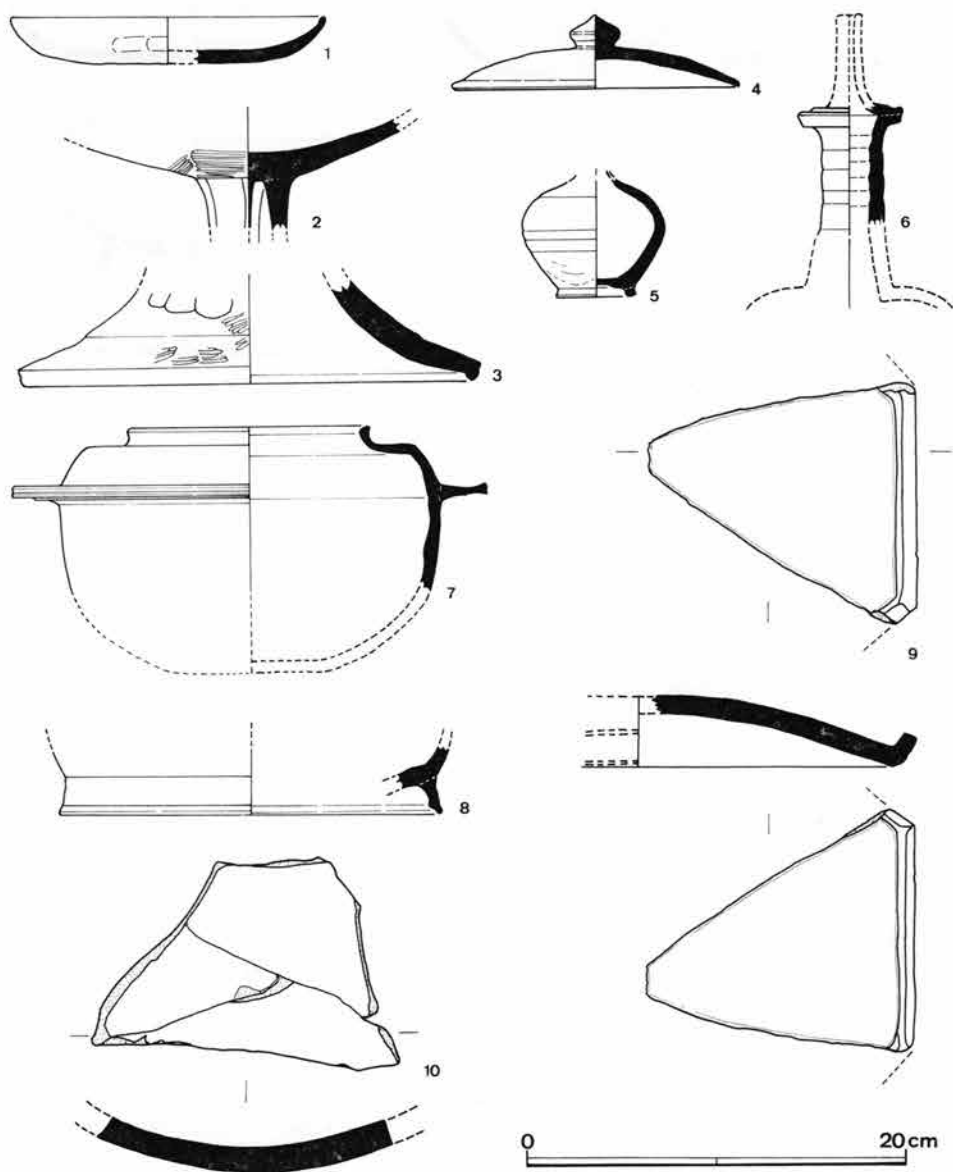
1・2. 土師器 3・4. 須恵器

が出土している。南部の流路 S D33516 の上層にあたる遺物包含層からも、施釉陶器の素地の底部に文様を墨書した碗(33)が出土した。流路 S D33502 から黒色土器の碗(1)、須恵器の碗の底部に墨書したもの(23)や緑釉陶器などが出土している。流路 S D33505 から墨書土器(29)が出土した。流路 S D33504 から緑釉陶器(10)が出土した。合流し錯綜する流路 S D33516 からは、長岡京期頃の須恵器の蓋(6・7)、杯 B(8・9)、壺 M(16)、壺 G(17)、円面硯の脚部(19)をはじめ、施釉陶器の素地(11~15)、緑釉陶器の皿(18)・灰釉陶器の碗(5)、墨書土器(24・25・26・30・31)及び須恵器の底部に線刻した土器(27)などが出土した。11の口縁部下端には「トビカンナ」と呼ばれる刻み目がみられる。

井戸 S E31035 出土の土器(第23図) 石敷き溝から土師器の杯(1)、皿(3)が、井戸枠内から土師器の皿(2)と土馬(4)が出土した。1の口縁部外面の下半部にヘラ削りし、上半は横ナデを施す。2の底部外面はヘラ削りを行う。3の口縁部外面の下端から底部にかけてヘラ削りを行う。少ない資料しかないが、土師器の調整からみて長岡京期より古い様相を示すと言える。これらの土器を長岡京期以前のものと判断した。

西二坊大路東側溝に直交する溝 S D33503 出土の土器(第24図) この溝から、土師器の碗 C(1)、皿 A(2)、須恵器の蓋(3)、壺または鉢の底部(4)などが出土している。1は口縁外面に荒いミガキを施し、底部に「大」と墨書される。2は口縁外面にヘラ削りを行う。土師器の調整、須恵器蓋の特徴からみて長岡京期のものと言える。

西二坊大路東側溝 S D33501 出土の遺物(第25図) この溝から、土師器の皿(1)・高杯(2・3)、須恵器の蓋(4)、壺 M(5)、灰釉陶器浄瓶の頸部(6)、緑釉陶器の羽釜(7)、火舎(8)、陶硯(9)、須恵器の体部を転用した硯(10)などが出土している。土師器高杯(2・3)は、若干大きく新しい様相が見られる。陶硯(9)は海と陸の明瞭な区別がみられない。裏面に自然釉がかかる立派なものである。裏面に脚の痕跡がなく、風字硯の硯頭部かと推定され

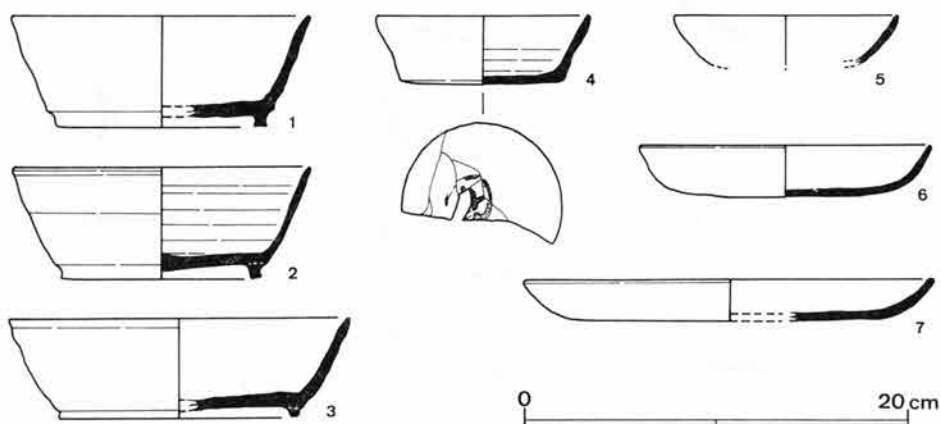


第25図 溝(S D33501)出土遺物実測図

1~3. 土師器 4・5. 須恵器 6. 灰釉陶器 7・8. 緑釉陶器 9. 陶硯 10. 転用硯

るが、わずかに残る角隅部分が稜をもち、その角度が130度前後を測ることから宝珠硯・多角硯の可能性もある。残存部が直線となるため、宝珠硯より多角硯の可能性がより高い。緑釉陶器の羽釜(7)、火舎(8)は軟質陶器で、浄瓶の出土例が平城宮V期にあることから、これらの遺物はおおむね長岡京期と言える。

溝状遺構 S D33513出土の土器(第26図) この遺構から須恵器の杯B(1・2・3), 杯A



第26図 溝状遺構 (S D33513) 出土遺物実測図

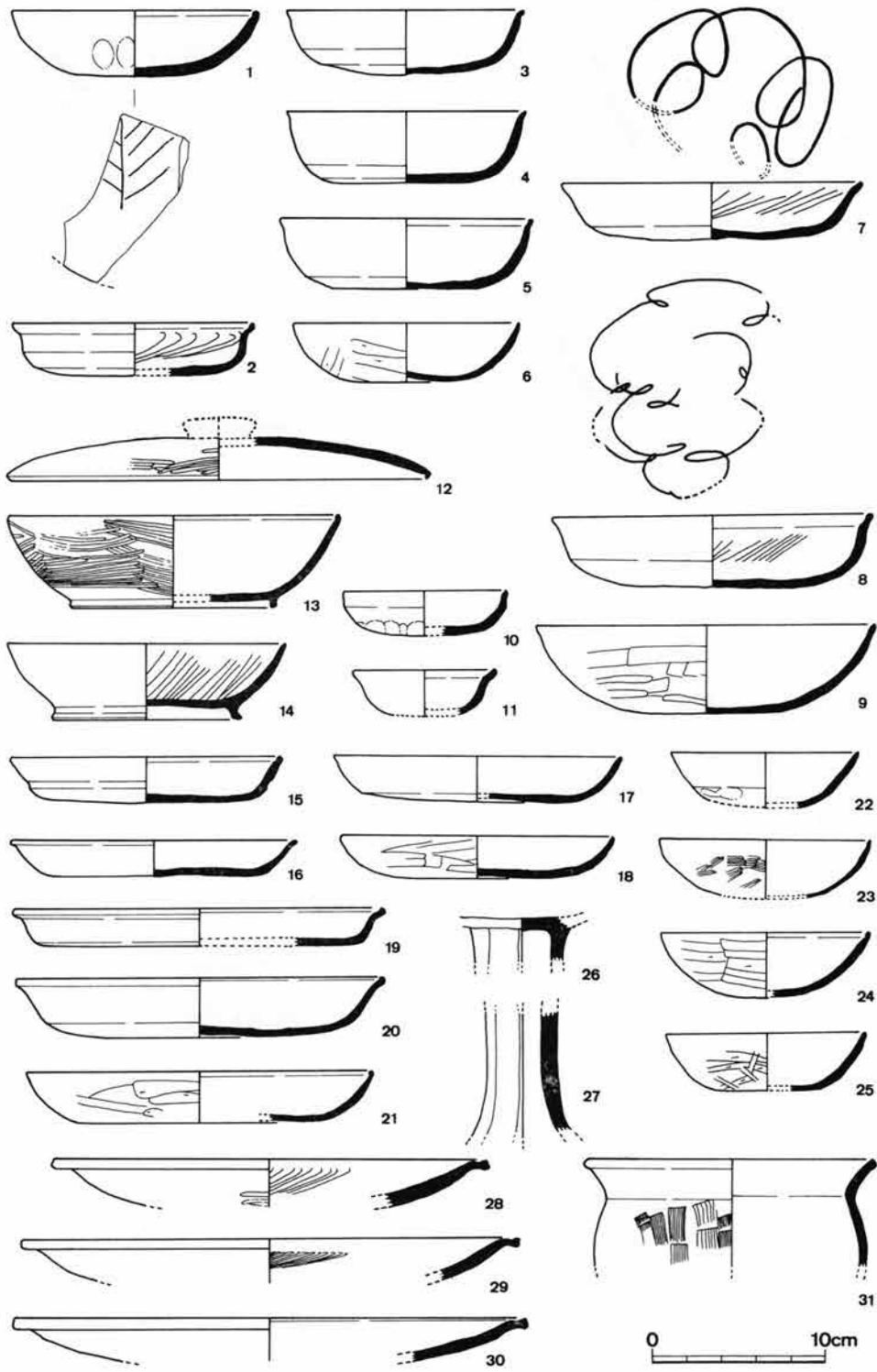
1~4. 須恵器 5~7. 土師器

(4), 土師器の杯(5), 皿(6・7)が出土している。遺存状況が悪く土師器の外表面調整は明瞭でないが、皿(7)の口縁外面に横ナデが認められる。また、須恵器の形態も長岡京期より古い様相を示す。

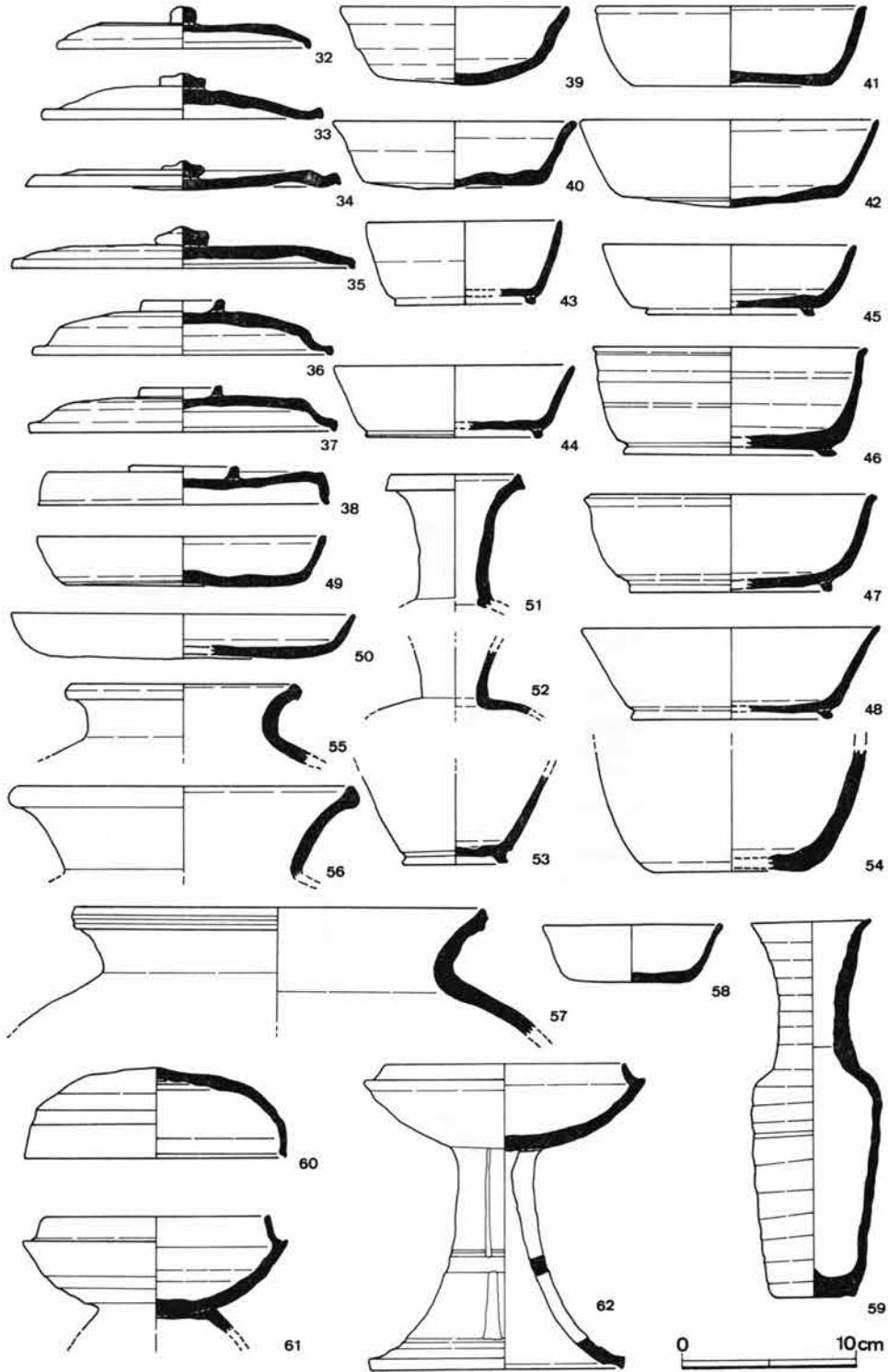
流路跡 S D28509 出土の土器(第27・28図) ここからは木簡、墨書土器、木製品、自然遺物など各種の遺物が出土したが、ここでは主要な土器について記述する。

土器の出土する範囲と堆積層から、井戸 S E31035 周辺、井戸より北方、側溝 S D28502 周辺と、およそ3地区に分けられる。井戸より北方で出土する土師器には、杯A(9)、皿A(20・21)、椀A(22・24)、高杯(30)、甕(31)がある。境界付近からは杯A(6)、皿A(18)、椀C(23)が出土している。これらは、一部を除いて口縁部外面にヘラ削りを行い、おおむね長岡京期の土器の特徴が窺える。この地は、すべて井戸 S E31035 の周辺から出土している。杯Aに口縁部外面を横ナデし、底部に荒いヘラ削りを行い、内面に暗文を施すもの(2・7・8)や、底部に木の葉痕が残るもの(1)がある。皿Aも口縁部外面を横ナデ、底部にヘラ削りを行う(15~17・19)。また、内面に暗文を施す杯B(14)、皿C(10・11)、外面を荒く削る椀A(25)、蓋(12)、高杯(26~29)等がある。杯A、皿Aの形態や調整の特徴からみて、長岡京期以前の8世紀中頃の土器と推定される。平城宮^(注7)Ⅲ期に最も近い。

井戸 S E31035 の周辺から出土した須恵器には、宝珠つまみの付く蓋(32~35)、環状つまみの付く蓋(36・37)、環状つまみの付く薬壺の蓋(38)、杯A(39~42)、杯B(43~48)、壺L(51・52)、壺の底部(53・54)、甕の口縁部(55・57)がある。井戸より北方からは、須恵器の甕(56)などが出土している。また、その下層から須恵器の杯蓋(60)、高杯(61・62)などが出土している。側溝 S E28502 周辺から、須恵器の杯A(58)、壺G(59)が出土して



第27図 流路跡 (S D28509) 出土遺物実測図 (1)
1~31. 土師器

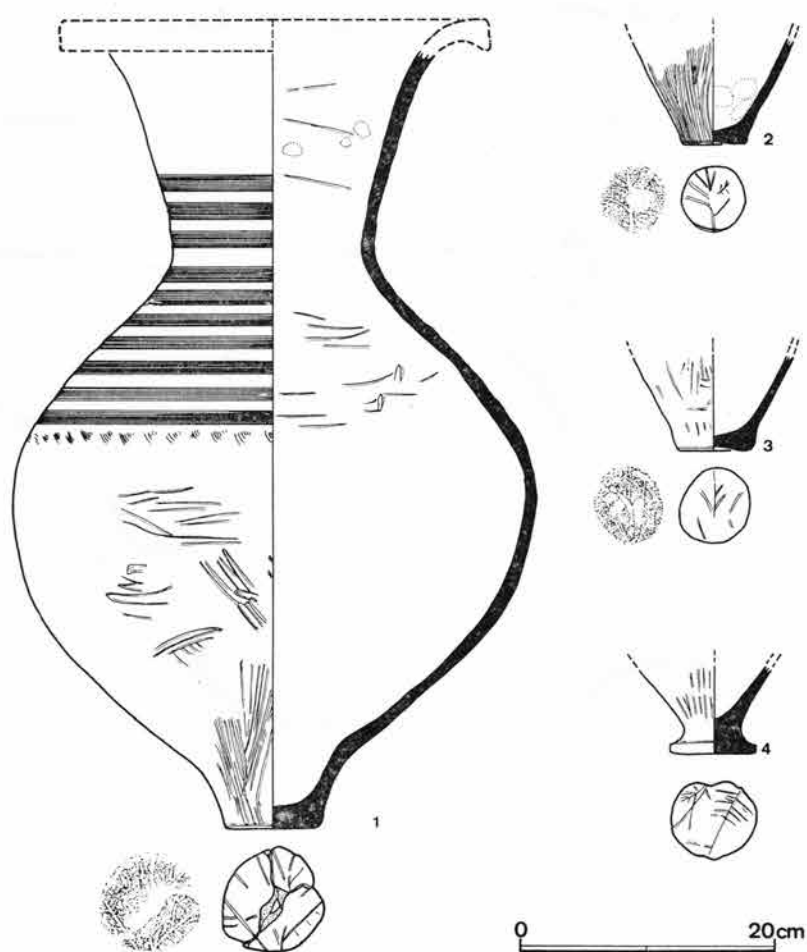


第28図 流路跡（S D28509）出土遺物実測図（2）
32～62. 須恵器

いる。S E 31035の周辺から出土する須恵器の特徴からも、8世紀中頃～後半の時期を推定することができる。S D 28502の周辺から出土するものは、おおむね長岡京期と考えられる。下層のものは、古墳時代後期(陶邑編年Ⅱ型式2・3段階)の時期を推定することができる。

井戸周辺から出土する土師器・須恵器は、ともに同じような傾向を示す。この流路跡S D 28509から出土する土器の特徴からも、はじめに井戸の周辺部分を埋めたてて、その後北方及び側溝S D 28502周辺を埋め立てたことが窺える。製塩土器も多数あるが、今回は割愛した。

溝S D 28507出土の土器ほか(第29図) 方形周溝墓1の区画溝から弥生土器が出土した。壺(1)は北辺の埋葬施設が想定される場所で、割れた状態で見つかったものを、図面上で



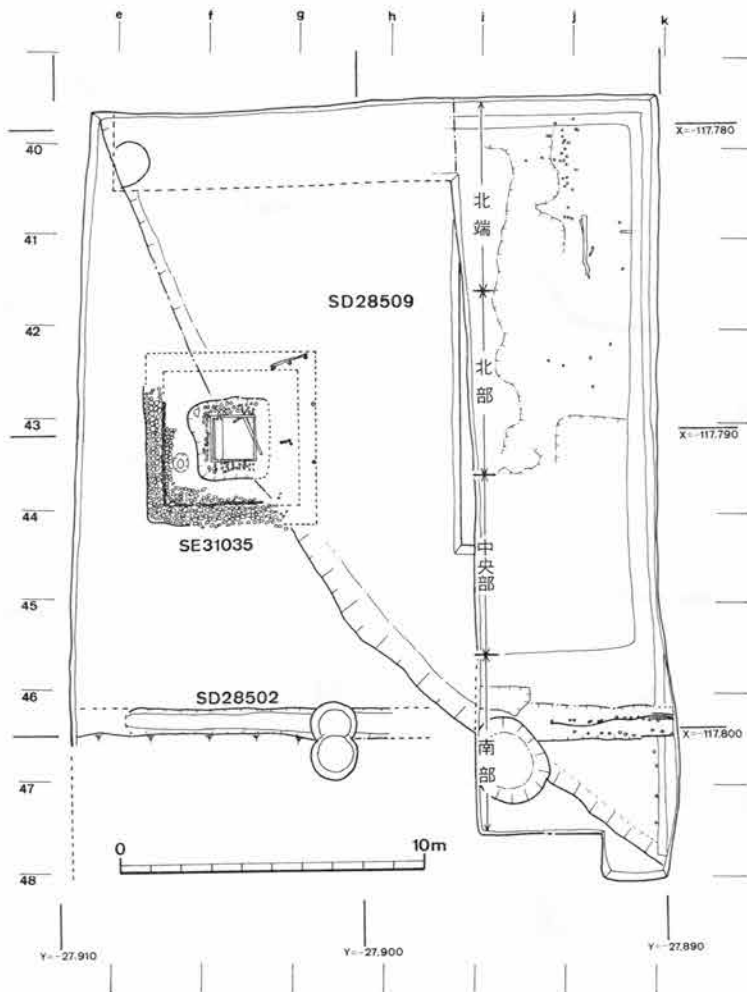
第29図 弥生土器実測図

1～3. S D 28507出土 4. 包含層出土

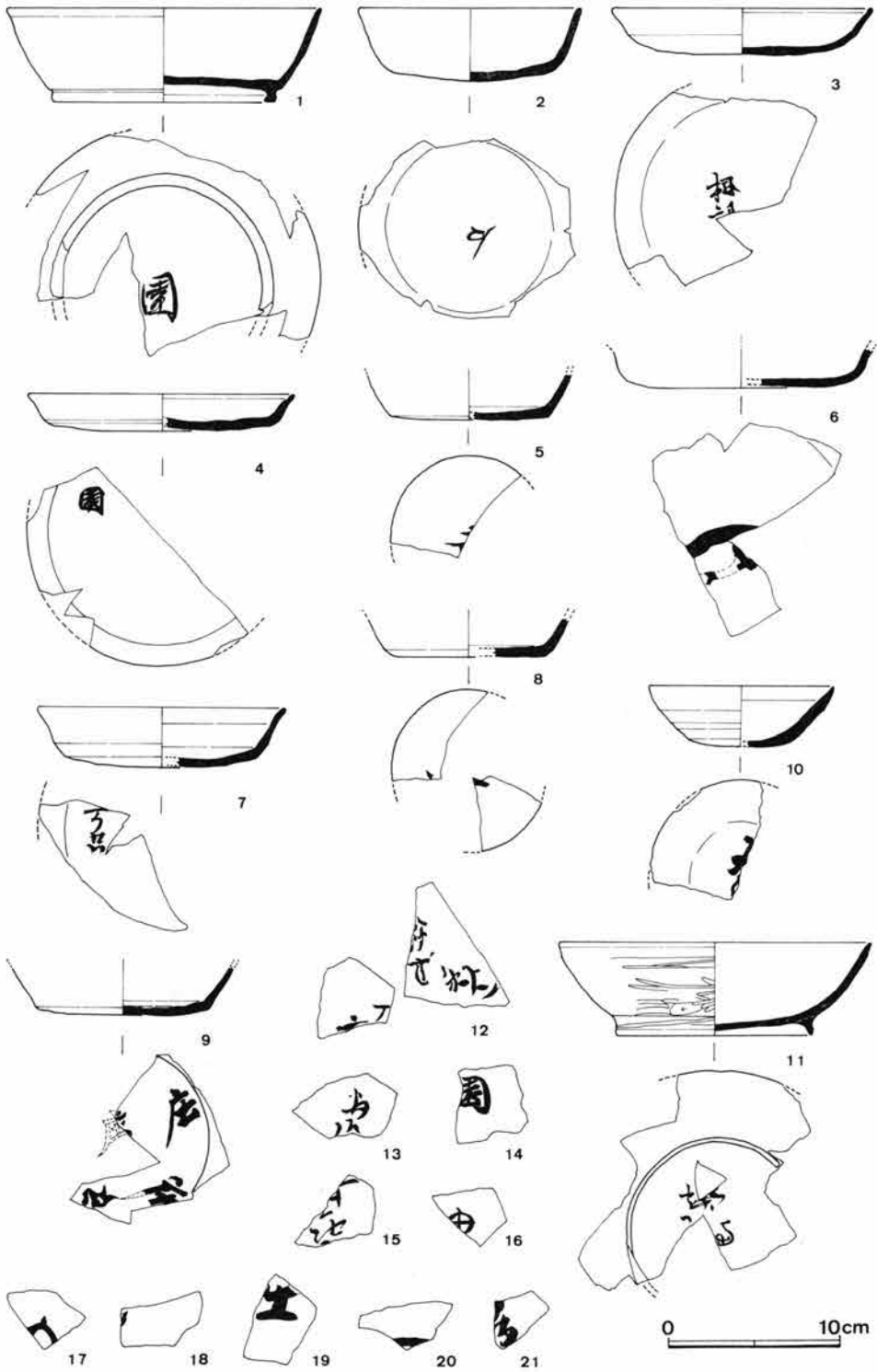
復原した。外面には、頸部下半から体部上半にかけて櫛描直線文を10条水平に描き、その下に扇形文を施す。体部下半にはミガキが、体部下端に刷毛目が見られる。底部には木の葉痕が認められる。2・3も底に木の葉痕が認められ、壺の底部と推定される。4はSD 28507に近接した黒褐色土層から出土した。鉢の底部と推定される。これらの土器は、畿内第Ⅱ様式の後期に相当するものである。^(注8)

②墨書土器

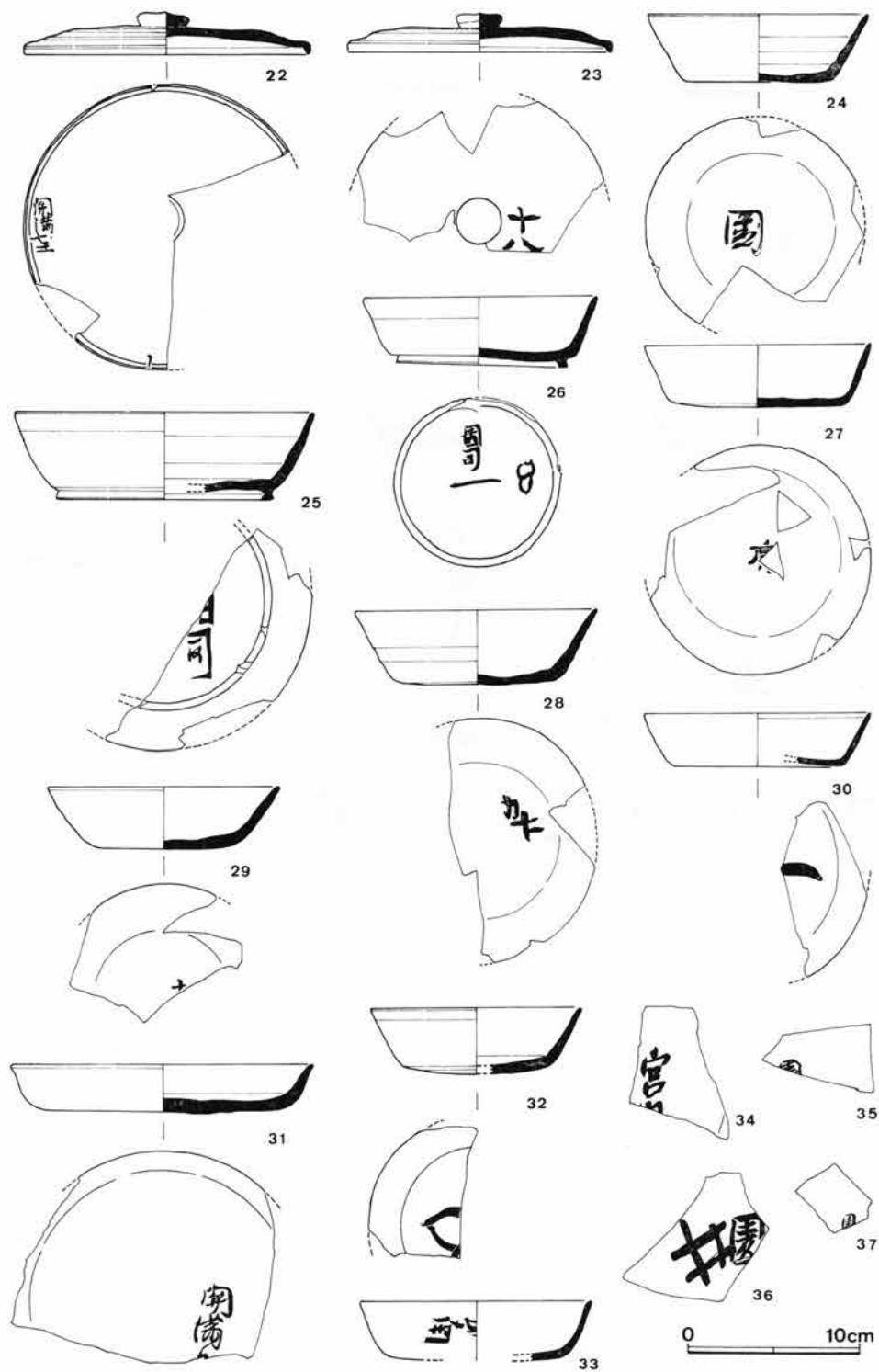
墨書土器(第31・32・33・34図) SD28509を中心として多量の墨書土器(線刻土器を含む)が出土している。第285・310次調査の国土座標に誤差があったが、あえて当初の地区割りのままの図面(第30図)も掲載した。第31図は第285次調査, 第32~34図は第310次調



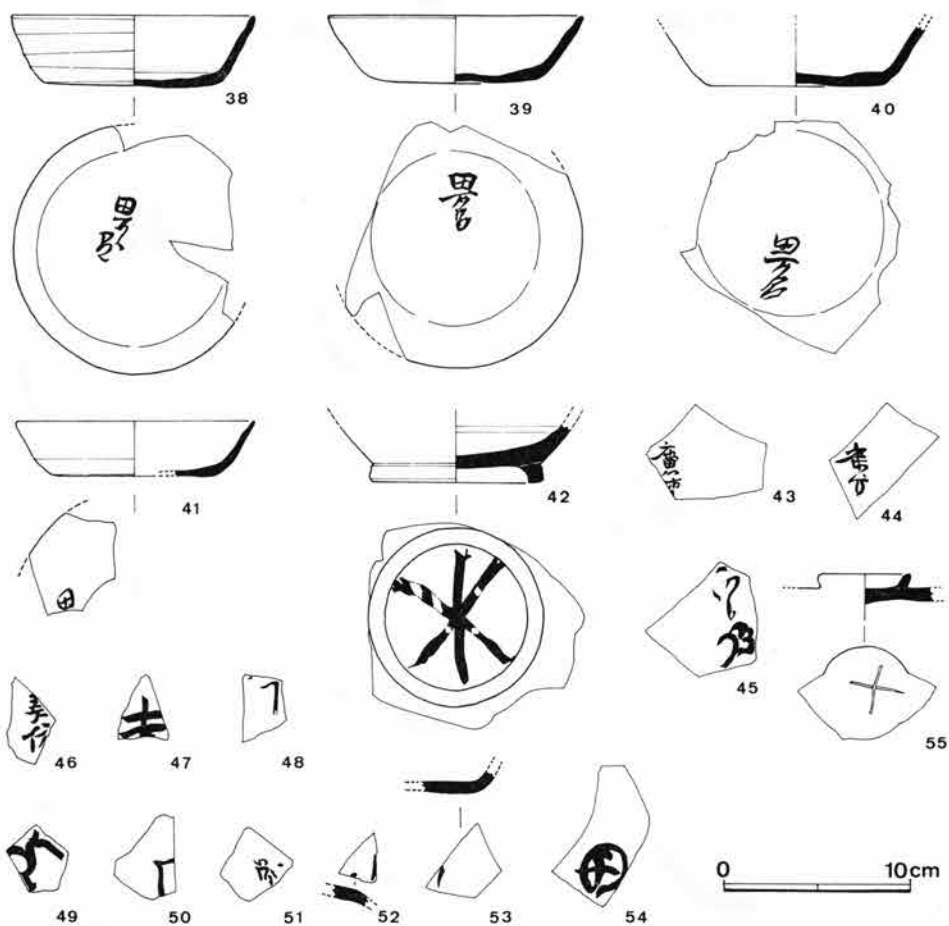
第30図 S D28509周辺割り付け図



第31図 墨書土器実測図(1)



第32図 墨書土器実測図(2)



第33図 墨書土器実測図(3) 一線刻土器含む一

査で出土したものを図示した。

墨書土器のうち、文字を確定できるものはあまり多くないが、主要なものを中心に記すことにする。文字が「園」と推定されるものに、1・4・14・24・35・36・37・63がある。26は「園司」、60・61は「園宅」と推定される。62は61と同種類と推定される。このうち1と14・24・36、4と35・37及び26が比較的似ている。「田万呂」及びその一部と推定されるものに、7・38・39・40・41・68・69・70がある。これらは筆使いから、同一人によるものと現在考えている。この他に、「相□」(3)、「庄 庄 庄 □」(9)、「十八」(23)、「開満呈」(22・31)、「□南」(33)、「宮□」(34)、「廣万呂」(43)、「大」カ(58)、「□領」(64)、「□女」(65)、「友」(66)などの文字がみられる。また、習書と考えられるもの(12・13・15)、記号または文様と考えられるもの(16・17・20・32・54・56・59ほか)もある。96は人面墨書土器の一部とも考えられる。

線刻土器には須恵器蓋の内面に「+」(55)と、ヘラ状の工具などで線刻したものなどがある。

墨書土器は、井戸 S E 31035 の周辺から集中して出土している。ここでは、S D 28509 出土の土器のところで述べたように、長岡京期以前の土器が集中する範囲である。これらの墨



第34図 墨書土器実測図(4)

書土器もその一群の中に含まれ、同一時期と言える。また、「田万呂」の一部と推定されるものが、流路SD33505から出土しており(第22図29)、もとの使用された場所を推定するのに重要な資料である。

③木簡^(注9)

- (1) 「^カ代^カ伍^カ直^カ銭
右□□□□□□□
六月十五日「山道」」 型式 011
353×46×7
- (2) ×観世□ □ 型式 081
(202)×30×4
- (3) 「^カ葦^カ床
□□麻呂二斗二升」 型式 051
168×20×4
- (4) • 「御司召 上加□園依 上加□虫万呂 秦得万呂 加□乙人 型式 011
右三人等為流入送召件人宜承知齋」
• 「□□ □□□□□□□□□□又^{民カ}不□□
□□ □□□□□□□□□□月□日□□」
352×33×4
- (5) • 「御司召田邊郷長里正一^{野カ}人□^カ苺丁一人又□□□依不」
• 「□召知状令^{忘カ}急^カ向□□勿^カ怠^カ□
大領 八月廿二日□」 型式 011
(428)×34×7
- (6) >丹波國氷上郡^{葛カ}□^{黒カ}原郷米五斗□米 □ 型式 081
(177)×18×6
- (7) ×若取人者右^{衛カ}□士佐藤原家部請 型式 051
(662)×62×10
- (8) 祭科□ 型式 059
(93)×16×4

(9) (檜扇)

- ① ・従七位下勲十等
 ・×上六人P連真□
- ② ・□□□定□
 ・従六位上勲九等葛^{野カ}□臣氣右万呂
- ③ ・□□□
 ・ □□ □ □ □

型式 061

(10) 山代四合

型式 081

(66)×20×4

- (11) ×□麻×
 □□□

型式 081

(93)×28×7

- (12) □ □

型式 065

(102)×18×4

- (13) □ □^{福カ}
 為 □□□

型式 081

(174)×38×7

- (14) □ □

型式 011

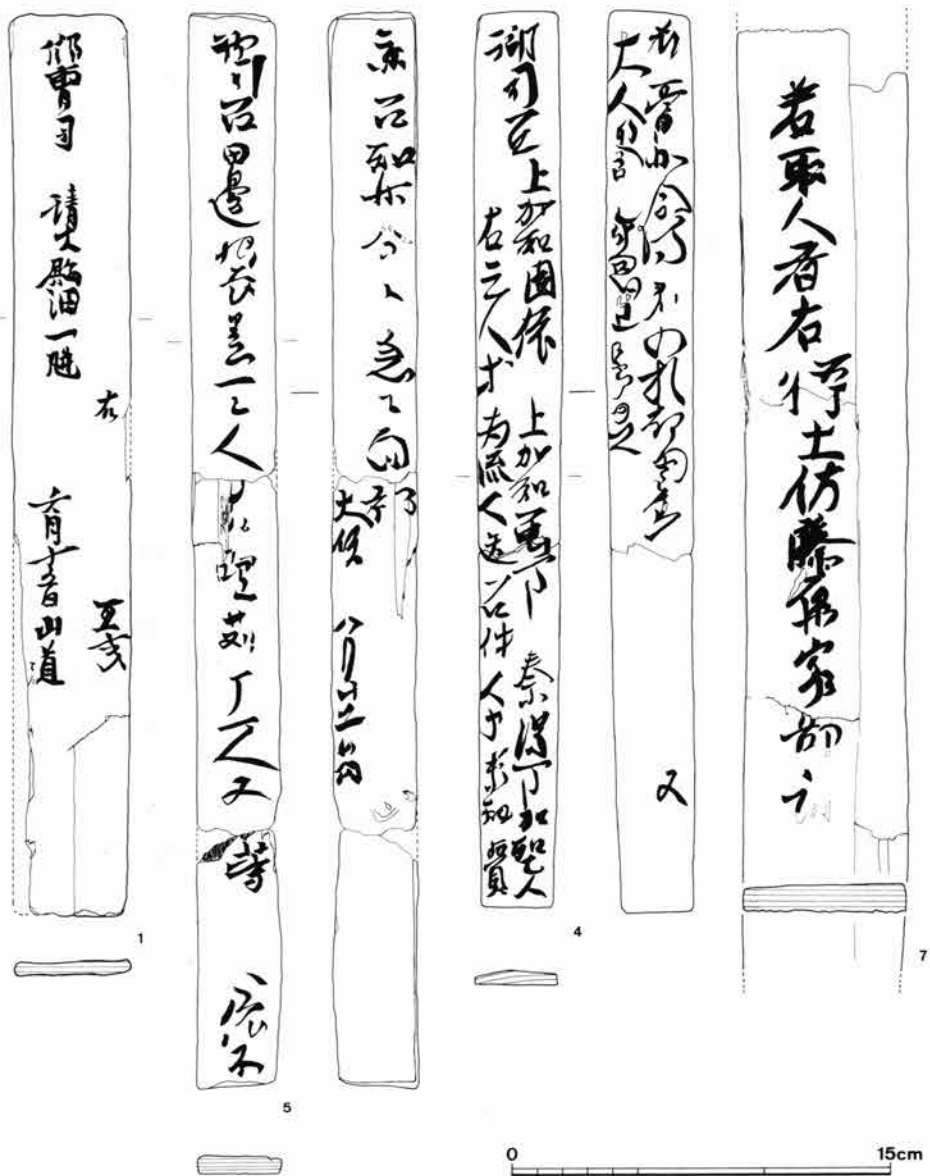
259×20×3

- (15) ・□□□×
 ・□ □ □

型式不詳

(61)×34×3

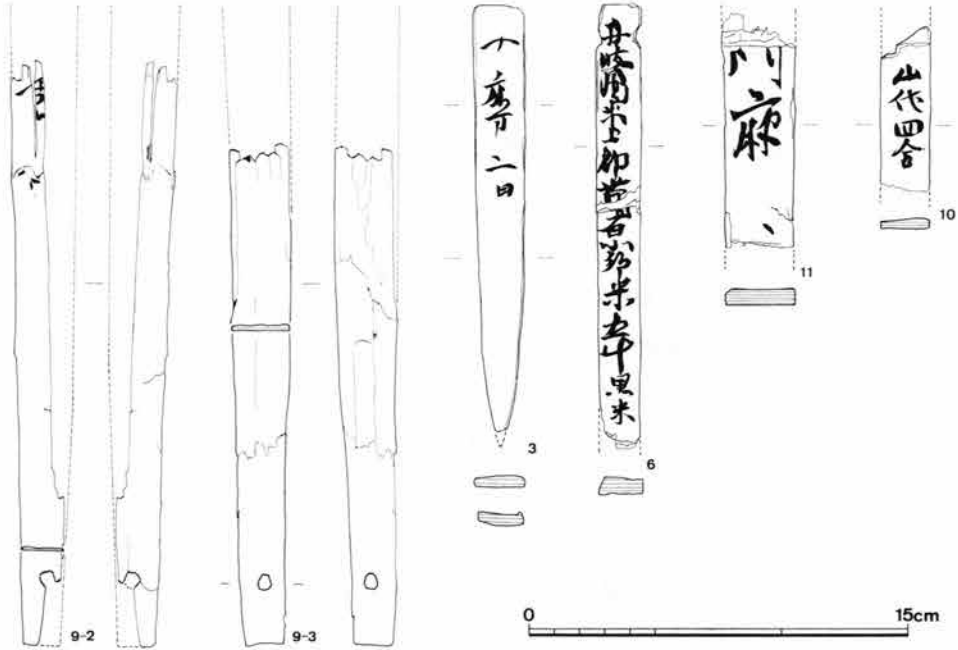
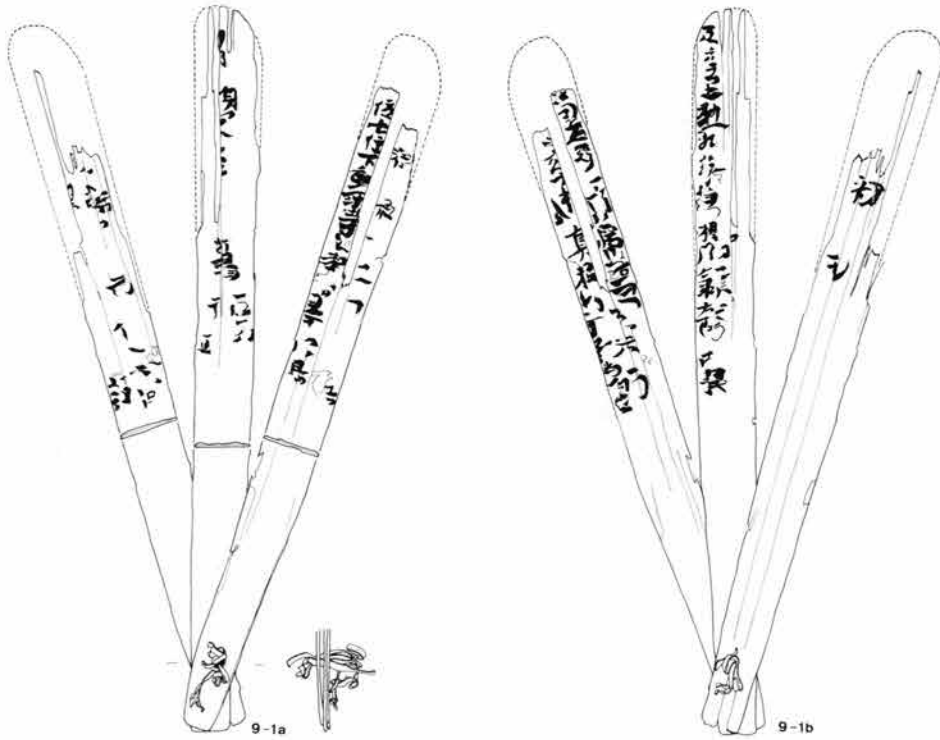
1に見える「御」は、旁が邑であるが、偏がぎょうにんべんで、『五体字類』では、趙孟頫のものに出てくるので(但し、元代)、「御」と判断される。「曹」は、唐代のものに「曹」とするだけでなく、その他、墨書土器でも同様の例があるので、ほぼ「曹」と見てよからう。「請」は、ごんべんがくずれ、第二画が長いが、「請」と判断できる。



第35図 木簡実測図(1)

二行書きの部分で、第一行目は、「右」で始まるが、次の五文字についてはほとんど判読できない。文意からも、請求文書に対価として「直銭」と読むことには躊躇する。次行の「六月十五日」は確実で、自署と思われる「山道」は、別筆と見られる。なお、日時の上には年号も何も書かれていないので、この木簡が書かれた時期は特定できない。

なお、「山道」以外の書風については、写経用の書体、いわゆる写経体で、8世紀の古



第36図 木簡実測図(2)

文書類には一般的に見られる。これは、唐代の書法の影響があるかもしれないが、智永の「千字文」が典型で、光明皇后の「楽毅論」（正倉院御物）などもその範疇にいられてよい。

木簡の発見場所は、西二坊大路と二条条間大路の交差点であるが、元来、どこで廃棄されたかは明らかではない。しかし、発見場所からそう遠くないところとすれば、この木簡は、どのように移動して廃棄されたとみられるのであろうか。

第一は、木簡の廃棄されたところが「御曹司」である場合である。この時には「山道」は、「御曹司」の下級官人と解釈され、木簡は「油一瓶」といっしょに「御曹司」に再び戻ってきて、一定期間保管された後、廃棄されたと考えることができる。「山道」の自署は、文書作成時のサインか、油とともに「御曹司」にやってきたときの「受け取り」としてのサインかの、両方の可能性がある。

第二は廃棄された場所が請求先の官司である場合である。この場合、木簡は「油一瓶」と引き換えにわたされて、しばらく保管後、廃棄されたとみられる。この時も、「山道」が「御曹司」の下級官人とすれば、文書作成時の自署となり、請求先の下級官人とすれば、「油一瓶」を出したという意味での自署とも解釈できる。

いずれも、可能性としては考えられるが、後述のように、「御曹司」以外にも「御司」と書く木簡が2点出土していることからみて、廃棄場所は「御曹司」とみる方がよかろう。

ところで、「御曹司」が「油一瓶」を請求した先がどこかがはっきりしない。「油」が灯油とすれば、延喜陰陽寮式に灯油は「諸司」に請求することになっており、各官司に保管されていたようにも見える。新嘗祭の時の「料理所燈油四升」は、大膳職が用意することになっている。また、「油」の単位も「瓶」となっており、灯油とすれば、延喜式では「升」「合」で統一されていて、表記法が異なっている。

2は、上下が欠損しており、詳しく読むことができないが、「観世」と読める。観世の語は、『呂氏春秋』の一篇として見えるだけでなく、仏教の用語としての「観世音」の略とも見られる。仏教用語の「観世音」であるならば、観世音菩薩のことになる。また、『呂氏春秋』の一篇としての観世であれば、篇目などの目録類のメモに用いた可能性がある。いずれにせよ、習書木簡の可能性はある。裏面に文字は書かれていなかった。

3は、どこからか送られてきた物品に付けられていた「貢進物付札」の形態をとる。祭祀遺物の中の斎串も同様の形態をとるものがあるが、数字の一部が判読できるので、「貢進物付札」ととる方がよかろう。

一字目は、「臺」の異体字「臺」にも読めるが、詳しくはわからない。二字目は、「麻」とも読めるが、まだれの中の木が一つしかないように見えるので、「床」と判読した。裏面には文字は書かれていなかった。

4 は、「御司」からの召文である。表面には四名が列挙してあり、流人をどこかへ移送するために召喚された人の人名であろう。宛所は書かれていない。これは、「御司」所属の人間(白丁か?)を召すためのものであるため、四名を宛所とみるべきかもしれない。裏面にも文字が書かれているが、墨が薄くなりほとんど判読できない。わずかに、「□月」が見え、この召文の出された月日の書かれていたことがわかるが、年次の部分が判読できないので、いつの時点かは特定できない。ところで、この木簡には四名の名前が書かれているにもかかわらず、本文には「右三人」とあって、内容的に矛盾している。筆の走り方から見れば、最後の四人目の名前は、最後まで文章を書いた後に付け足しとしてやや小さく書かれている。急いで書いたようで、本文を「四名」に直すのを忘れたようである。

5 も 4 と同じく「御司」からの召文で、田辺郷長と里正、それと「□菟丁」一人を召喚している。「依不」「勿怠ク□」など、日本語的な表記があり、この木簡が比較的下級の官司で作成されたことを窺わせる。

この木簡で注意される点としては、第一に郷長・里正の官名が見えることである。郷長・里正の官名は、国郡郷里制が施行されていたときのもので、岸俊男の研究によってその期間が明らかにされている。^(注10) 国郡郷里制は、それまでの国郡郷里制に代わって、霊亀元(715)年に出された別式(霊亀元年式とよばれる『出雲国風土記』)により施行された。しかし、天平12(740)年の末頃か13(741)年の初め頃に廃止され、国郡郷制になったと言われている。したがって、この木簡の書かれた年代は、715～741年の間に限定できることになる。伴出した土器の年代等を考える上で、重要な指標になると思われる。

第二に、この召文が「大領」から出されている点である。大領は、郡司の長官であり、8世紀前半の段階では、古くからの国造などの在地首長層が就任し、律令に見える以外でも調や贄などの税物貢進をはじめとする在地とのつながりの深い職務を果たしていた。その大領が「御司」の召喚を取り次いだか、郡司層が「御司」の管理権を持っていたかのいずれかとみられる。したがって、「御司」が在地と深いつながりをもつだけでなく、4の木簡にもみられるように流人などの通送にもあたるなど、中央とも連がりを持っていた官司であることが推定される。「御司」の管理・運営・性格といったことを推定する資料ともなる。また、田辺郷長であるが、『和名抄』によれば、摂津国住吉郡・伊勢国度会郡・丹後国加佐郡・美作国苦西郡・日向国宮崎郡にしかみえない。この田辺を地名ととれば、これらの国々のうちのどれかか、あるいは、8世紀には存在したが、『和名抄』編集の段階にはなくなった山背国乙訓郡の地名かのいずれかとも考えられる。しかし、この田辺を氏名とも見れなくもないため、国郡名を記載していない以上、田辺郷を郷名とすれば、どこに存在したかはにわかには決め難い。ただ、4にも「御司」がみえ、1にも「御曹司」

がある以上、乙訓郡に「御司」が存在した可能性の方が高いとすべきであろう。

6には、上部に両側から切り込みがあり、付札木簡の形態をとる。墨は頭部のところから書かれ、書体も行書風になる。下端が欠損しているため、詳しい型式はわからない。

この木簡で注意されるのは、「□原郷」の部分である。『和名抄』によれば、氷上郡には「原」の字が二文字目にくるのは「井原郷」しかない。この木簡は「原」の上の文字のところで二つに折れているため、正確に文字は判読できない。しかし、草かんむりが見えるため、決して「井」にはならず、草かんむりを持った当て字かもしれない。ただ、この文字の下半部で「勾」と読めるので、あるいは「葛」とすることも可能かもしれない。そうすると、「葛原郷」となり、『和名抄』には見えない郷となり、8世紀に存在し、『和名抄』の成立する10世紀にはすでになくなった郷名となる。いずれとも決めたいが、ここでは「葛原郷」の可能性もあることを指摘しておきたい。

7の木簡は、上端部が折れ、何が書かれていたのか全くわからない。下部は尖っており、形態からすれば告知札の可能性が高い。文章も、最後に「請」がきているので、「～に請へ」とか「～を請く」と読めそうで、和風漢文で書かれていたことがわかる。「若取人者」は、「もし取る人は」と読め、かつ上端部は欠損しているため、この上には何らかの文章があったと推定される。現存しないので、何とも言えないが「告知」などで始まる文章があった可能性が高い。文章の後半部では、「右□土佐」が「右」で始まる文章か、官職名のいずれかと思われる。赤外線写真などで確認すると、「土佐」が確実に上、「□」も行がまえの部分の確認できたので「右衛士佐」とみるのがよさそうである。

なお、「佐」は「𠂔」のようになっていて、通常のくずしとは異なっている。しかし、墨書の用例ではないが、へら書き文字の中に同様の例があることがわかった^(註11)ので、「佐」と判断した。また、最後の文字は「請」と判読したが、その下には文字がないため、この文字で文章が完結しているようである。

8は、上部も下部も欠損しているため、木簡の種別は全くわからない。わずかに「祭料」の文字が見えるので、在地の祭りか、または長岡京期の宮中で行われた年中行事の際の祭料とかかわるのかもしれない。「祭料」の下にも一文字あるが、全く判読できなかった。

9の木簡は、檜扇に書かれたもので、木簡としてどのような用途に用いられたかは定かではない。檜扇自体は、3枚を重ねるように手元のところに穴を穿ち、桜の皮で止める。長さ自体は、28.5cmで、最大幅が2.5cm、厚さが1～2mmとかなり薄いものであった。

文字は、表裏面ともに書かれており、「従七位下」・「従六位下」などの位置や「勲十等」などの勲等が見える。そのため、人名が書かれていたことは確実であるが、今のところ、

「六人部連真□」・「葛□臣氣右万呂」の名まえしか確認できていない。その他のところも、名まえが書かれていたとしたら、何かの歴名であるのかもしれない。

ところで、この人名であるが、六人部氏はこの乙訓郡の在地首長層に属する氏族名で、後世には向日神社の代々の神官であった。六人部氏が向日神社の神官になったのがいつの時点か不明でかなり時代の下がる可能性があり、少なくとも 8 世紀の木簡にその名が見えるので、氏族としての存在だけは確認できる。また、「葛□臣」は、二字目がつぶれているため詳しくはわからないが、葛野臣の可能性もある。これが葛野臣でよいとすれば、これも乙訓郡の氏族名であるため、この木簡が何らかの目的のために作成されたことを窺わせる。まず、位階・勲等があること、名まえが氏族名+カバネ+名前の順で記述されていること、檜扇の一枚の表面・裏面に人名が記されている可能性があること、などが特徴としてあげられる。いずれも、位階・勲等のあることを考えると、乙訓郡内での位階・勲等を帯びる者を中心として、何かの目的のために作成した歴名とみるのがよからう。

檜扇に文字の書かれた例は、このほかにも、長岡京跡左京第204次調査で出土したものにもある。このような例からすれば、檜扇に文字を書いて、何かの覚え書きや儀式のときのメモ書きに使用したことは、結構存在したのかもしれない。

10は、上端・下端とも欠損しているため、全体の形状は不明であるが、「四合」と何らかの単位が見えるため、荷札か付札の可能性が高い。そうであるならば、「山代」は「□□山代」という人名にならう。詳しくは不明としておくほかはない。

11も、上端・下端とも大きく欠損しているため、全体の形状、内容についても全く知ることができない。わずかに、「麻」が判読できる程度で、その上の文字は、門がまえか闕いがまえの一部と思われる墨痕が確認できるが、文字と認識することはできなかった。

12・14は、形状が比較的はっきりしているにもかかわらず、墨痕がかすかに残る程度で、文字は全く判読できない。用途は不明である。

13も、両端が欠損しているため、形状・用途は全くわからない。ただ上部の文字が二行書きになっているようである。

15は、形状が不明で、三字目が「仮」にも読めるが、墨痕が薄いため正確には判読できない。

その他、削り屑が 3 点あるが、うち一点のみ「郡？」とも読める文字があるが、邑の部分欠損しているため、「郡」と確定することはできない。他の 2 点は全く判読できない。

なお、出土地点は、2・4・5・9が井戸 S E 31035 の周辺部で、3・15が井戸の北部、1・6～8・12～14が側溝 S D 28502 周辺部の流路跡 S D 28509 から出土した。また、10・11は F トレンチ検出の大路を横断する溝 S D 33503 から出土した。

④瓦 類

瓦類は各トレンチで平瓦・丸瓦等が出土するが、ここでは軒先瓦について記す。

a. 軒丸瓦(第37図)

1は長岡京期の溝S D33503の上層から出土した単弁蓮華文軒丸瓦である。単弁の周囲を輪郭線で縁どり、その弁端は尖り、弁間には厚みのある間弁を配する。低い周縁に二重の圏線を巡らせる。内区を圏線で区画するが、中房は不明である。胎土は緻密で灰色に焼け締まる。これと似た瓦が宝菩提院廃寺で採集されている。^(注12)

2は流路跡S D28509の上層から出土した重圏文軒丸瓦である。圏線を三重に巡らせ、第三圏線と外縁の間隔が狭い。胎土に小粒の石や赤褐色の粒子を含み、断面は灰色、外面は淡黒灰色を呈する。平城京6011型式に類似する。^(注13)

3は近世野井戸1の下層から出土した、平城京6227型式の複弁蓮華文軒丸瓦である。胎土に砂礫を含むが焼成は良好である。

4はBトレンチの北端で荒掘り中に出土した。周縁部のみで型式などは不明である。

5は流路跡S D28509の埋土である黒褐色土層の上層から出土した。中房が1+6と推定され、複弁の一部が残ることから平城宮6284系と考えられる。

6は流路跡S D28509の上層から出土した。瓦当面は摩滅して不明瞭であるが平城宮6282系と考えられる。

7は重機掘削中に流路跡S D28509の上層から出土した。複弁蓮華文軒丸瓦で外区に二重圏線が巡る瓦当文様から平城宮6227系と考えられる。

8は流路跡S D28509の埋土である黒褐色土層の上面から出土した。胎土に小粒の石や黒色の粒子を含み、焼成は良好で断面は灰色、外面は黒灰色を呈する。平城宮6311AまたはB型式の複弁蓮華文軒丸瓦である。

9もS D28509の黒褐色土層の上面から出土した。胎土は砂質で小粒の礫や赤褐色粒子を含み、焼成は良好で断面は淡灰色、外面は黒灰色～淡黒灰色を呈する。長岡宮式7133Ec型式の単弁蓮華文軒丸瓦で、長岡京市の谷田瓦窯^(注14)で造られたものと同範である。

b. 軒平瓦(第38図)

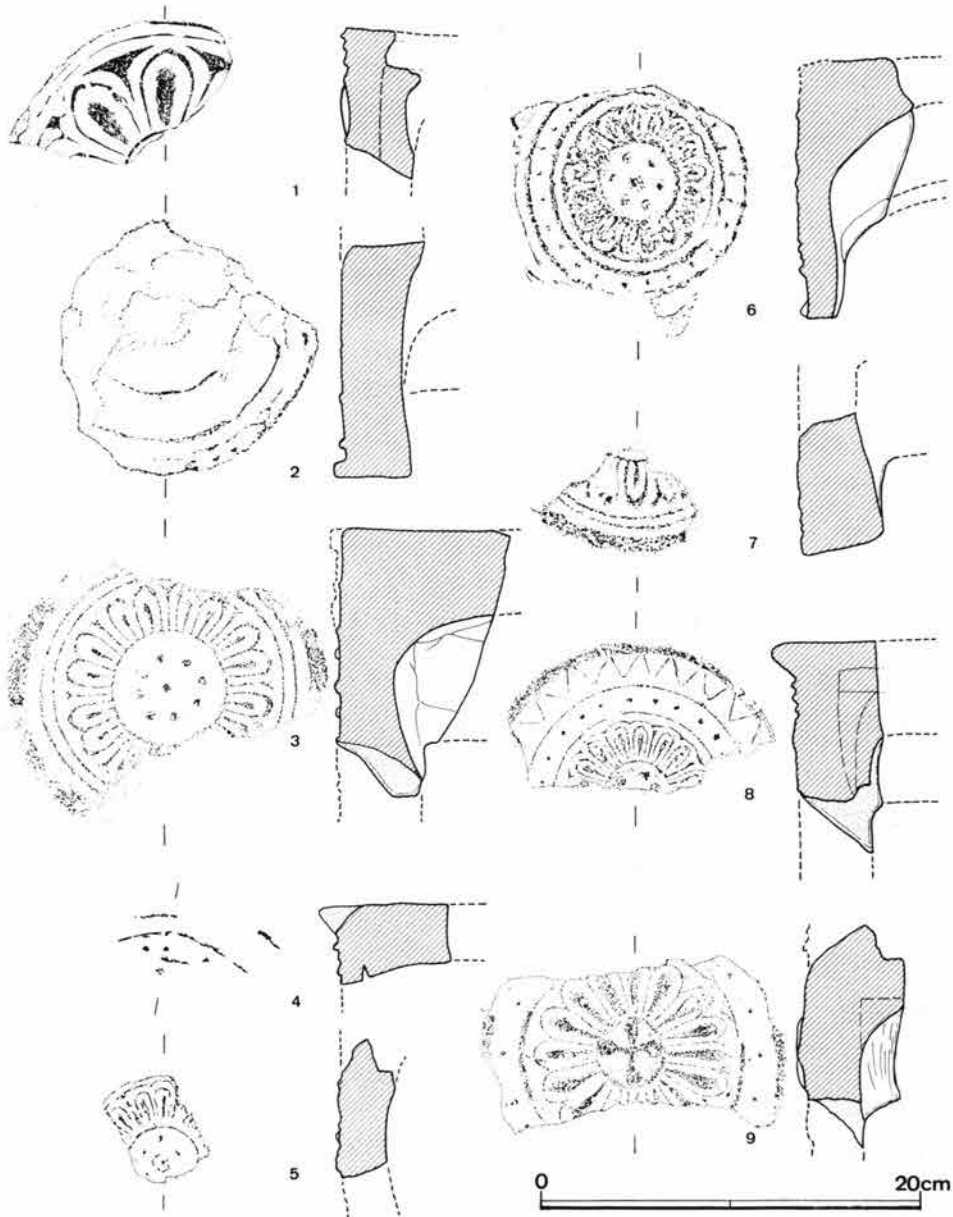
1はFトレンチ南側で流路跡S D28509の埋土である黒褐色土層の上層から出土した。胎土に、石英等の小礫を含み、焼成は良好で断面は灰色、外面は暗灰色を呈する。平城宮6675A型式の均整唐草文軒平瓦である。

2はBトレンチ南端で暗褐色土層の上面から、3はDトレンチ南端で平安時代の流路跡S D31011上層から出土した。2はわずかに小礫を含み精緻な胎土である。焼成がやや甘く、断面は淡灰色、外面は淡黒灰色を呈する。3は礫を含む砂質の胎土である。2・3は

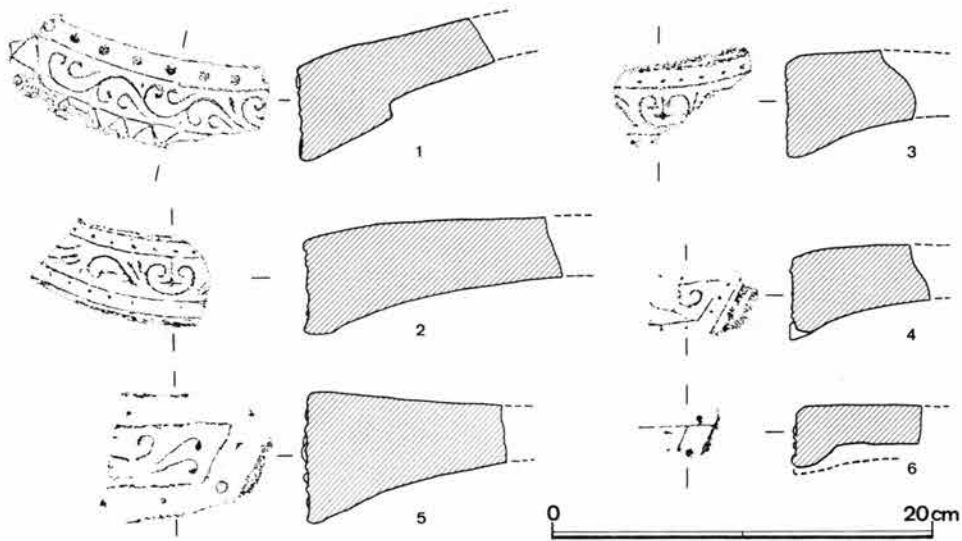
同範瓦と推定される。中心飾りが平城宮6682か6685に似ている。

4は、Aトレンチ北端で流路跡S D28509の砂礫層から出土したが、これは、平安時代の流路跡S D33516の堆積層と考えられる。胎土に石英等の小礫を含み、焼成がやや甘く、断面は黄灰色、外面は淡黄灰色を呈する。平城宮6691型式に似ている。

5は、Fトレンチで平安時代の流路跡S D33516から出土した。胎土に石英、チャート



第37図 軒丸瓦実測図・拓影



第38図 軒平瓦実測図・拓影

等の小礫を含みやや砂質で、断面は灰色、外面は黒灰色を呈する。

6は西二坊大路東側溝S D33501から出土した。胎土に石英、チャート等の小礫を含み、断面は淡黄色、外面は淡黒灰色を呈する。胎区に内区からのびる境界線がある。

⑤ 銭貨

銭貨は、第335次調査(E2・Fトレンチ)で合計6枚出土した(中国銭及び寛永通寶を含む)。各々の出土遺構・層位、法量は付表2のとおりである。皇朝銭の分類は奈良国立文化財研究所編『平城宮発掘調査報告VI』^(註15)に準じた。

開元通寶 1は全体に錆がうすく付着し、銭文がやや不明瞭である。輪郭の一部を欠損するが、元の鋳上がりは良好であったと推定される。621年初鋳の中国銭(唐)である。

和同開珎 2は全体に錆が付着し、銭文の特徴が明瞭でないが、開を隸書体の「開」につくる。背面内郭の外縁は四隅が丸く、和同開珎Eと推定される。3は青錆(緑青)等が付着しやや遺存状態が悪い。鋳上がりが悪いためか、内郭の孔が曲がり「同」字の第一・二画の下端の間隔が狭くなる。開を「開」につくる。

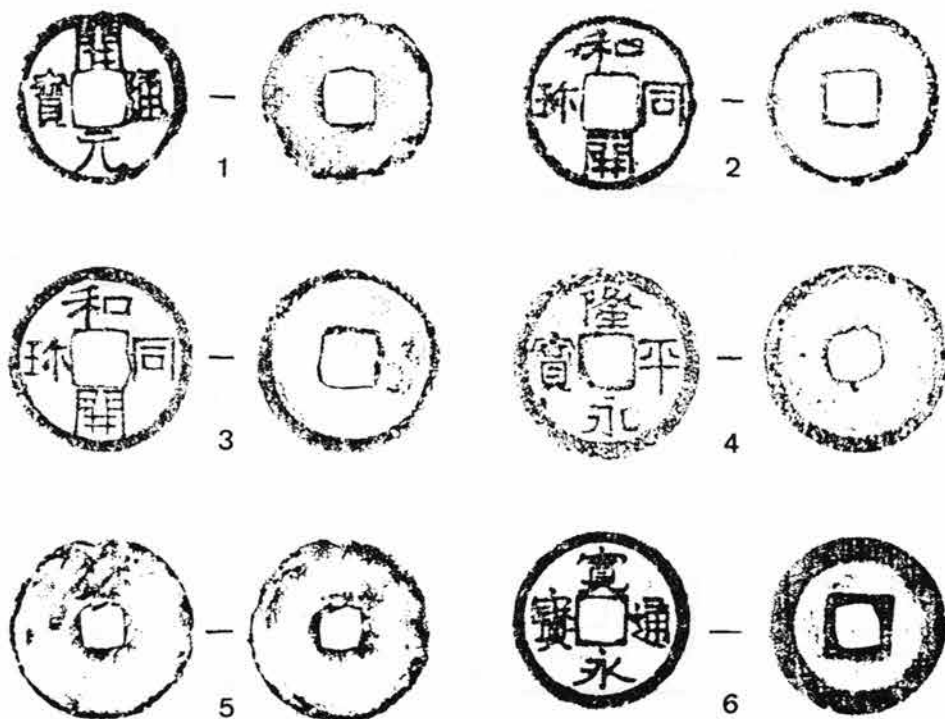
隆平永寶 4は全体に錆が付着し、銭文の特徴が明瞭でない。永寶の2字が他に比べて小字であることから、隆平永寶Bと考えられる。

不明銭 5は表面が摩滅し、全体に錆が付着しているため、銭文は不明である。

寛永通寶 6は錆が全体にうすく付着し、風化が進み銭文は不明瞭である。背面は、内郭の外縁がやや幅広く、無文である。

付表1 第335次出土銭貨一覧表(外径以下の単位はmm)

| 番号 | 銭貨名 | 出土遺構ほか | 重さ(g) | 外 径 | 外郭内径 | 内郭外径 | 内郭内径 | 外郭幅 | 厚 さ |
|----|------|----------|-------|---------|---------|--------|------|------|------|
| 1 | 開元通寶 | 包含層 | 2.67 | (23.23) | 19.47 | 7.7 | 6.67 | 1.34 | 0.82 |
| 2 | 和同開珎 | S D33516 | 2.06 | 23.87 | 21 | (7.85) | 6.57 | 1.2 | 0.48 |
| 3 | 和同開珎 | S D33501 | 2.68 | 24.92 | 21.2 | 7.47 | 6.82 | 1.38 | 0.51 |
| 4 | 隆平永寶 | S D33505 | 2.15 | 25.4 | 21.25 | 7.82 | 6.45 | 1.5 | 0.75 |
| 5 | (不明) | 包含層 | 2.01 | 24.6 | (21.75) | — | 5.32 | 0.92 | 0.72 |
| 6 | 寛永通寶 | 包含層 | 3.46 | 24.30 | 20.55 | 7.17 | 5.8 | 0.91 | 0.91 |



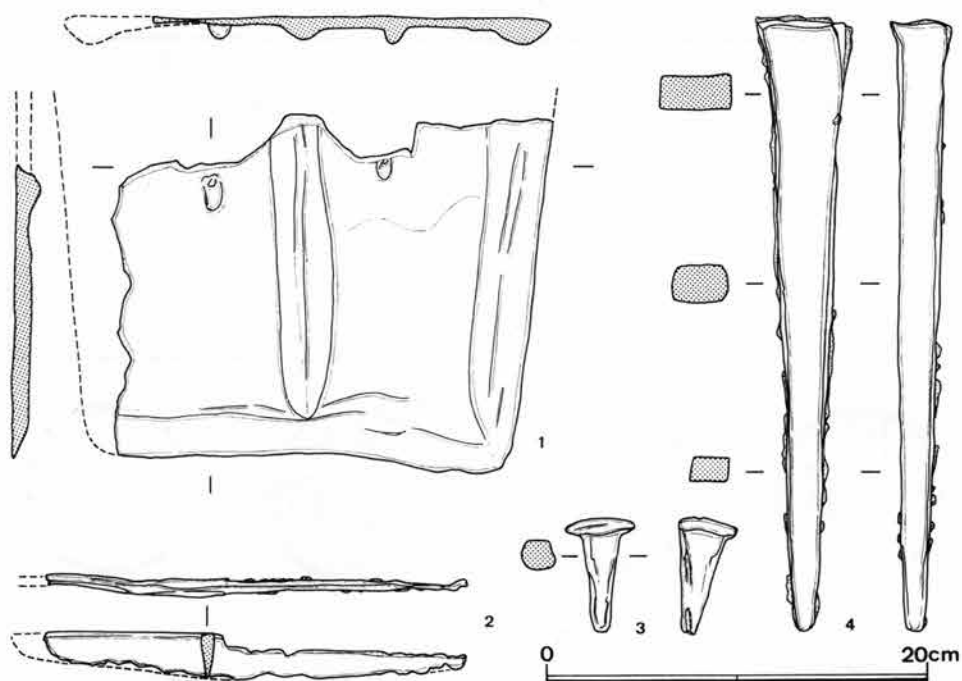
第39図 銭貨拓影

⑥金属器

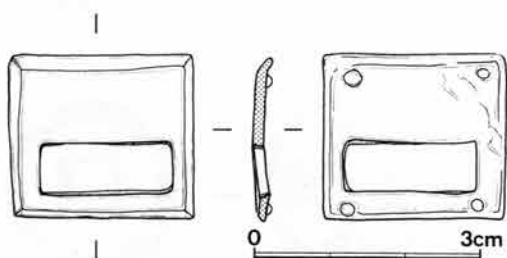
a. 鉄製品(第40図)

用途不明鉄器(1) 平安時代の流路跡S D33516から出土した。片側が欠損するが、両縁と中央が幅広く盛り上がり、その間に突起が付く。先端は摩滅しているが若干尖っている。残存長9.3cm・残存幅11.8cmを測る。鋤のような農具かと推定される。

刀子(2) 平安時代の流路跡S D 33504から出土した。平造り角棟の刀子である。残存長12.2cm、最大の厚さ3.5mmを測る。



第40図 鉄製品実測図
1. 用途不明鉄器 2. 刀子 3. 釘



第41図 銅製品実測図 帯金具(巡方)

鉄釘(3・4) 3は二条条間大路南側溝S D28502から出土した。円形に近い頭部の中央に脚が付くが、脚の先端を欠く。残存長3.0cm・頭部径1.8cm×1.4cmを測る。4は流路跡S D33516から出土した。断面長方形の脚で、頭部は造らない。全長16.05cm・最大幅2.6cm・重さ128.47gの大型釘である。

b. 銅製品(第41図)

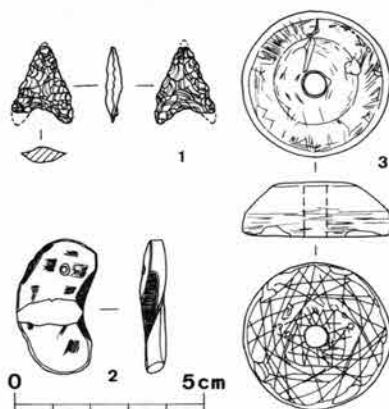
帯金具(1) 流路跡S D28509から出土した鍔帯の巡方である。四隅に鍔足を鑄出すが、鍔は4足とも付け根から折損する。縦21.2mm×横24.7mm・高さ2.4~2.7mm・厚さ1.5mm前後を測り、重さ4.42gである。表面に黒漆がみられる。

⑦石製品(第42図)

石鏃(1) Dトレンチの暗褐色土層から出土した凹基無茎式の石鏃である。残存長20.5mm・最大幅16mm・厚さ4.2mmを測り、重さ1.01gである。石材にチャートを用いる。

勾玉(2) 竪穴式住居跡 S H31030の柱穴(?)の一つから出土した滑石製の勾玉である。長径 30.5mm・短径17.3mm・厚さ6mm前後・孔径 1.8mmを測り、重さ7.86gである。

紡錘車(3) 集落を区画する溝 S D31001から出土した滑石製の紡錘車である。頂部径 22.5mm・高さ39mm・底部径14.3mm・孔径6.5mmを測り、重さ33.9gである。底部に荒い線刻がみられる。側面はていねいに磨かれるが、表面に擦り痕がみられる。



第42図 石製品実測図

1. 石鎌 2. 勾玉 3. 紡錘車

⑧木器

以下に報告する木器の分類については、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録』近畿古代篇に準拠した。^(注16)

a. 祭祀具(第43図1～55)

祭祀具には、人形・斎串・剣形・刀形がある。

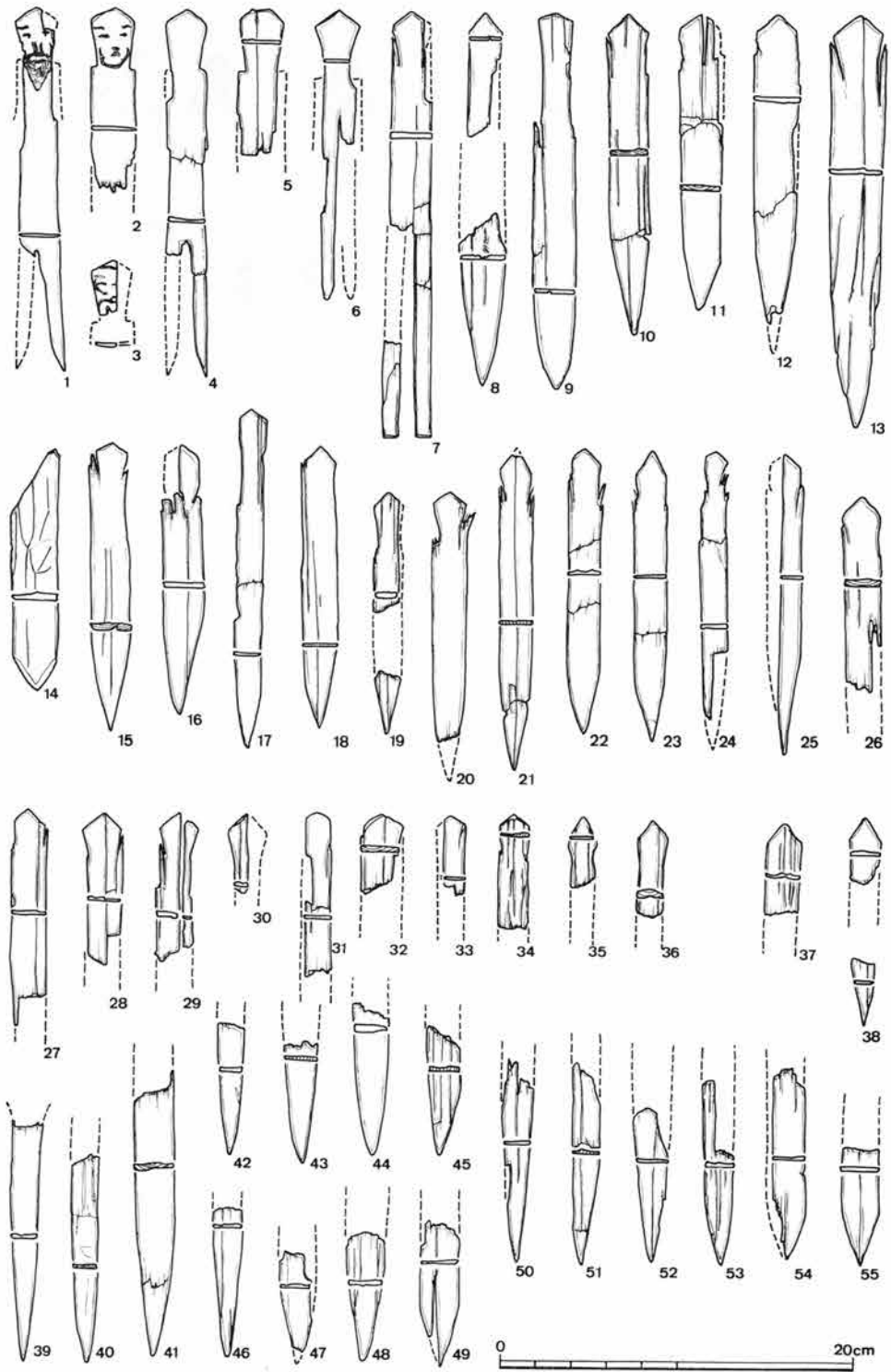
人形(第43図1～5) 男性の顔を描いたもの(1～3)と確認できないもの(5・6)がある。いずれの製品も破損しており、全体の形状は窺えない。男性の顔には眉・目・鼻・口の他に顎髭と鼻髭を描いたものと、顎髭だけを表現したものがある。成形は、頭部を山形に削りだすもの(1～4)と、頭部を台形にかたどるもの(5)があり、頭部はいずれも上部側面から大きく切り込みを入れ、肩部で木目に直角に切り欠いて首を表現している(AⅡ型式)。腕は、残存していないが、足の成形には「V」字形に切り欠く1(AⅡa型式)と「コ」字形に切り込みを入れて折取る4(AⅡb型式)がある。

斎串(第43図6～55) 破損品が多く、全体の形状を窺うことのできるものは少ない。出土した斎串は、細長い板状の先端を圭頭状にして下端を剣先状につくるC型式で、細部が確認できるもので、上端近くの側面左右1か所に切り込みをいれるⅢ式(7～13・25・26)と側面左右2か所に切り込みをいれるⅣ式(15・20～24)がある。14は、上端を1側面から鋭く斜めに切り落としており、A型式の可能性もあるが明らかではない。

剣形(第48図126) 刃部は表現していないが、剣身部と茎部・柄部を含む断片が1点出土している。剣先と柄尻を欠く。

刀形(第48図127) 柄を表現せず、刀身と茎を表現するB型式が1点出土している。柄部は別造りか。

陽物(第48図140) 男性の生殖器を形どったもの。棒状の柁目材を用い、先端を龟头状



第43図 木製品実測図 (1) 人形・齋串

に加工している。

b. 容器

木製皿(第44・45図56~79) 完形で出土したものはほとんどない。口径・器高の復原できるものでみると、法量が四群程度に分類できる。口径17~18cmで第一群のまとまりが見られ、器高は2.1cmを測る。次に口径20~22cmで器高1.1~2.0cmの第二群、口径22~25cmで器高1.8~2.3cmの第三群、口径30cmの1点がある。いずれの製品も針葉樹を用いるが、木取りはすべて柾目材を用いている。

曲物(第46・47図80~113) 底板もしくは蓋板と考えられる円板と側板が出土したが、完形で出土したものはない。円板には、木釘を木口に打ち込んだもの(80・81・83~85・88~96・98・103・105~107)と樺皮を円板の外周付近に通したもの(87・99・108)がある。そのいずれも認められないもの(82・86・97・100~102・104・109・110)もあるが、木釘や樺皮を観察できないものの中には細片が多いことを考慮しなければならない。また、円板の中央部に穴を穿っているもの(97・99)と円板の外周付近に穴を穿つもの(93)があるが、93は、樺皮を通した痕跡かもしれない。

今回出土した曲物円板を口径でみると、図示していないもので10cm前後の第Ⅰ群、15~21cmの第Ⅱ群、22~25cmの第Ⅲ群、30cm前後の第Ⅳ群、40cm前後の第Ⅴ群に分類することができる。第Ⅰ群は柄杓の可能性も考えられるが、細片のため判断できない。出土量では、第Ⅱ群がもっとも多く、つぎに第Ⅲ群で、第Ⅳ群と第Ⅴ群が同数出土している。

これらの円板は側板との接合方法により、釘結合の曲物は身、樺皮結合の曲物は蓋の可能性が考えられる。中央部に穴を穿つものの、機能についてはセイロの蓋や甕の蓋に使用したとも考えられるが、今回出土した資料では明らかでない。木取りは柾目材と板目材のいずれでもあるが、概して大型品に板目材を使用する傾向が認められる。

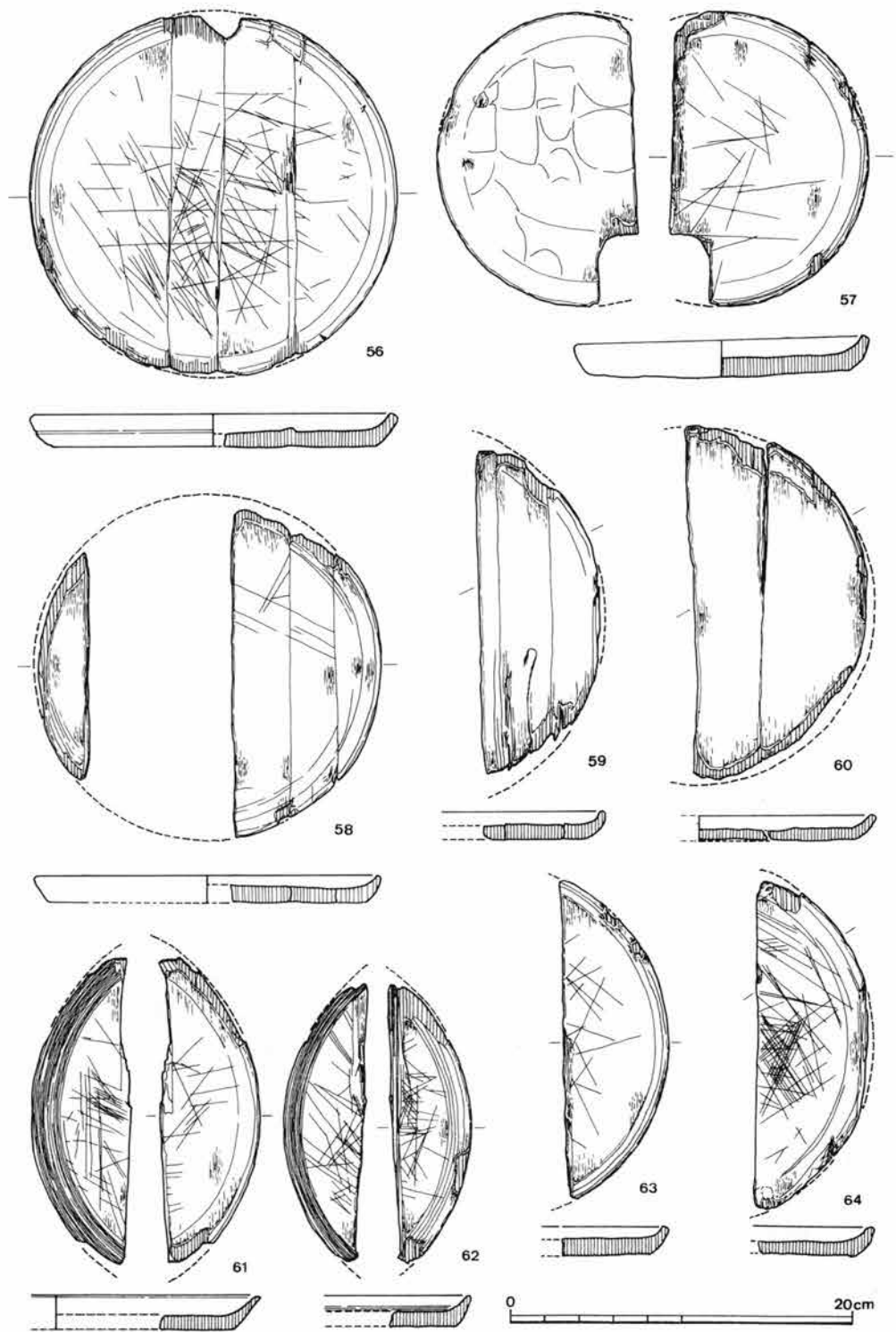
側板は3点出土している。接合部の観察できるもの(113)をみると、樺皮を1列3段綴じたところまでが残存しており、下段の外から木釘を打ち込み円板と接合する。内側のケビキは粗く、斜格子に施す。側板との接合方法により身の可能性が考えられる。

鉢(第48図141) 口径30cmを越える製品で、轆轤によって成形したのち、内外面に漆を施した漆器である。口縁端部は外反し丸くおさめる。下部の形状は欠損により不明。材は横木取りである。

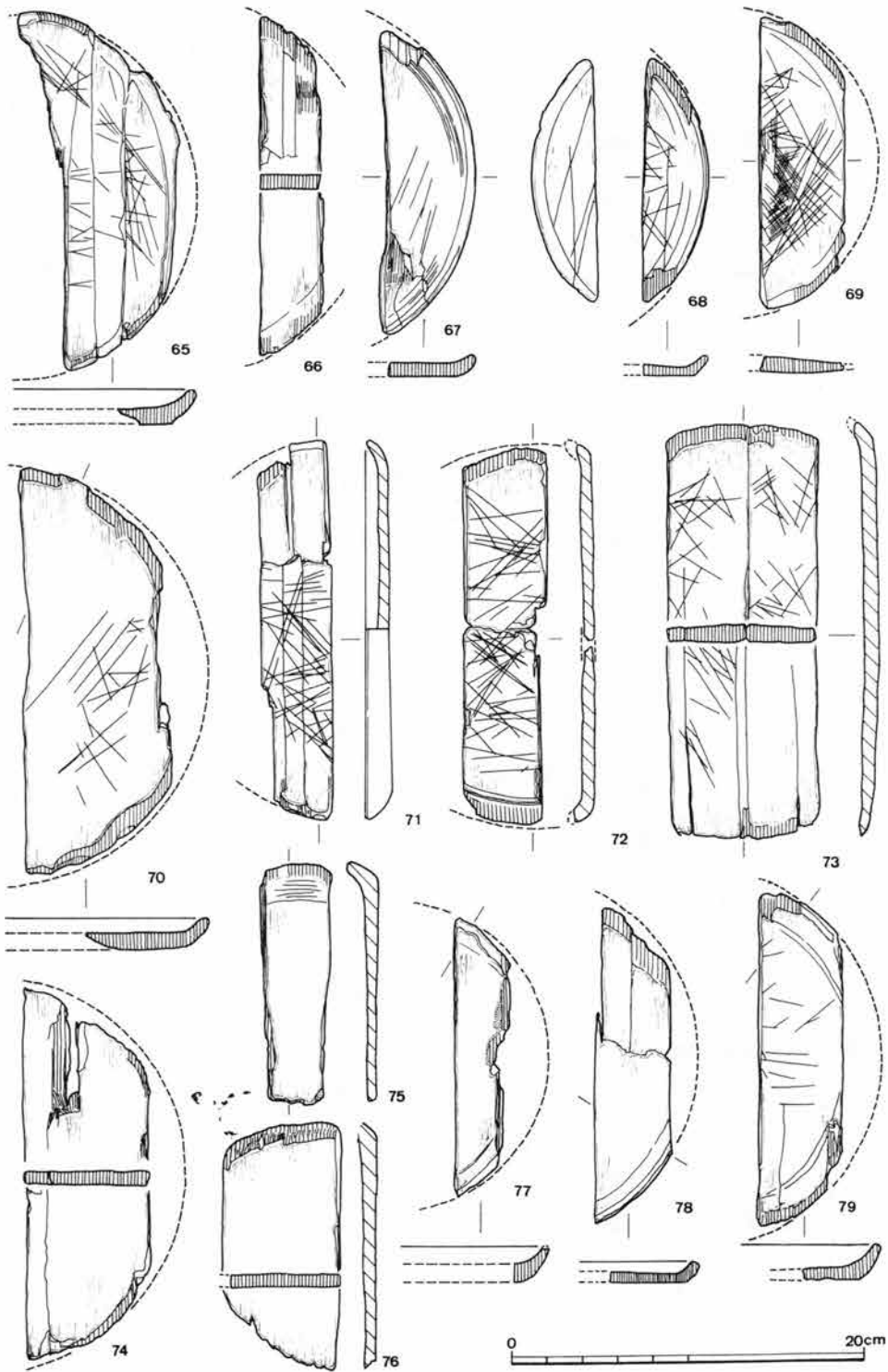
c. 紡織具

紡織具には、糸紡ぎに使用する糸車の部材である紡輪と糸巻がある。

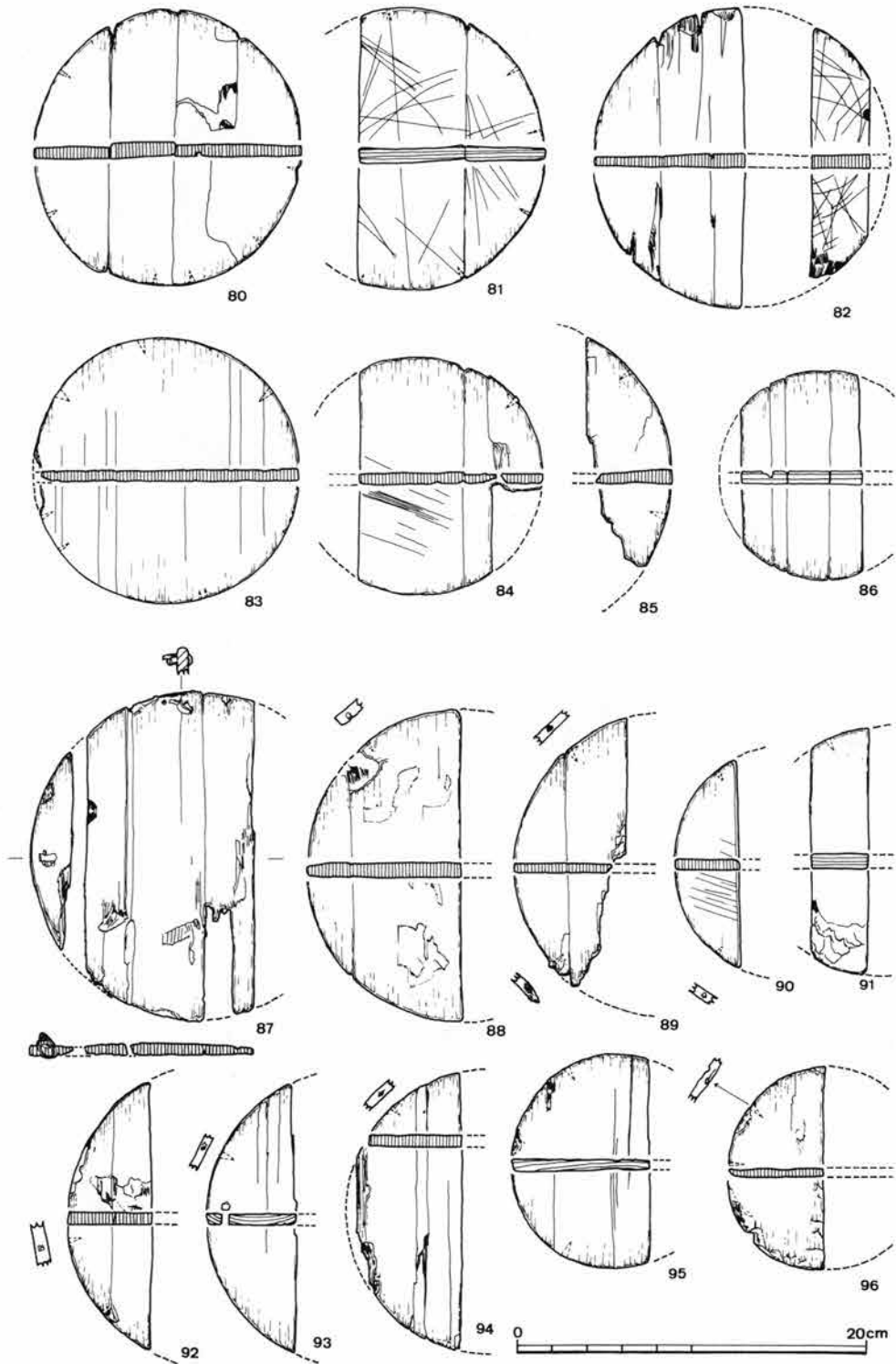
紡輪(第48図114~118) 径3.5~7.5cmの製品で、断面板状のもの(114~117)と台形のもの(118)がある。



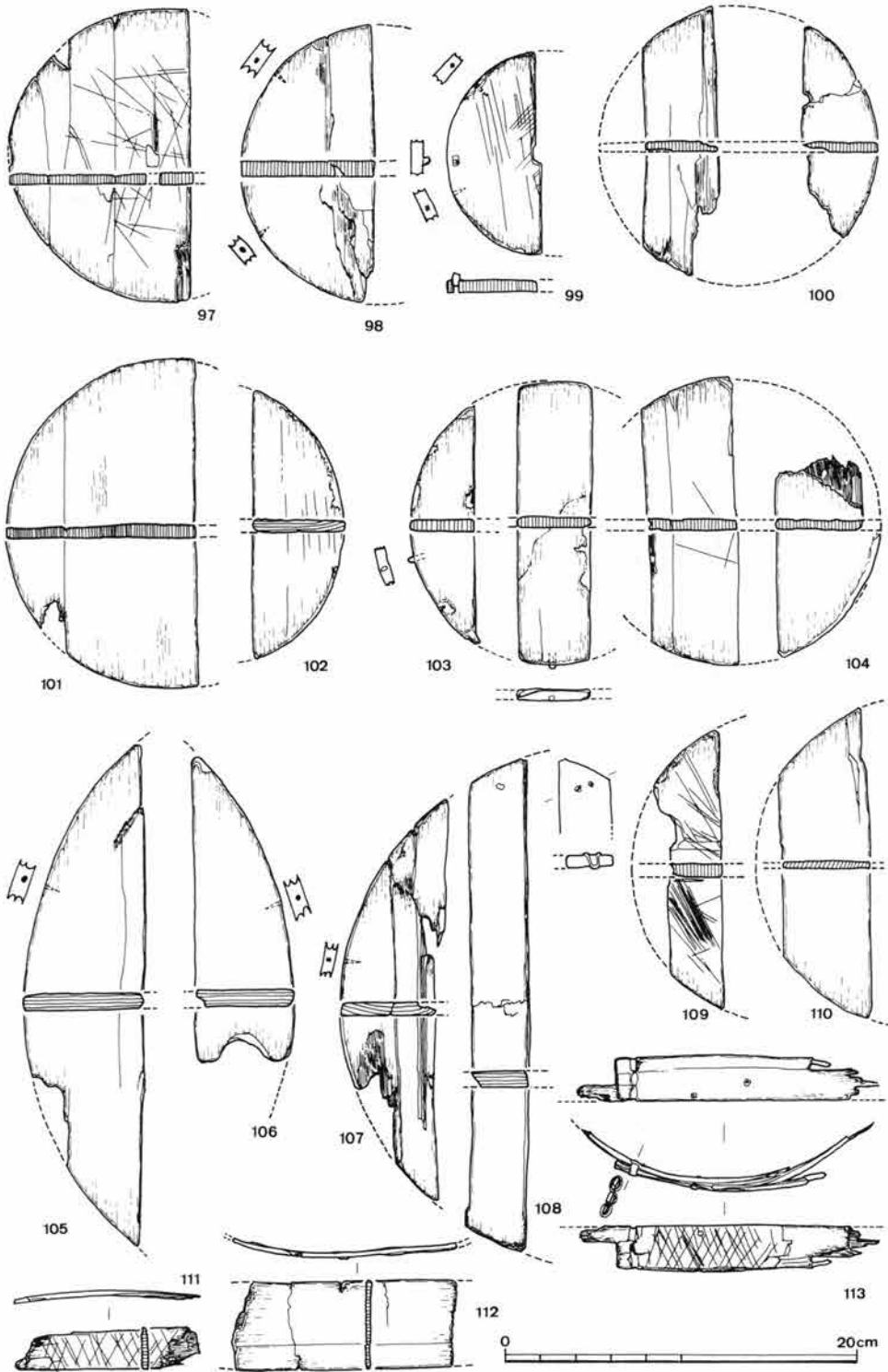
第44図 木製品実測図(2) 木製皿



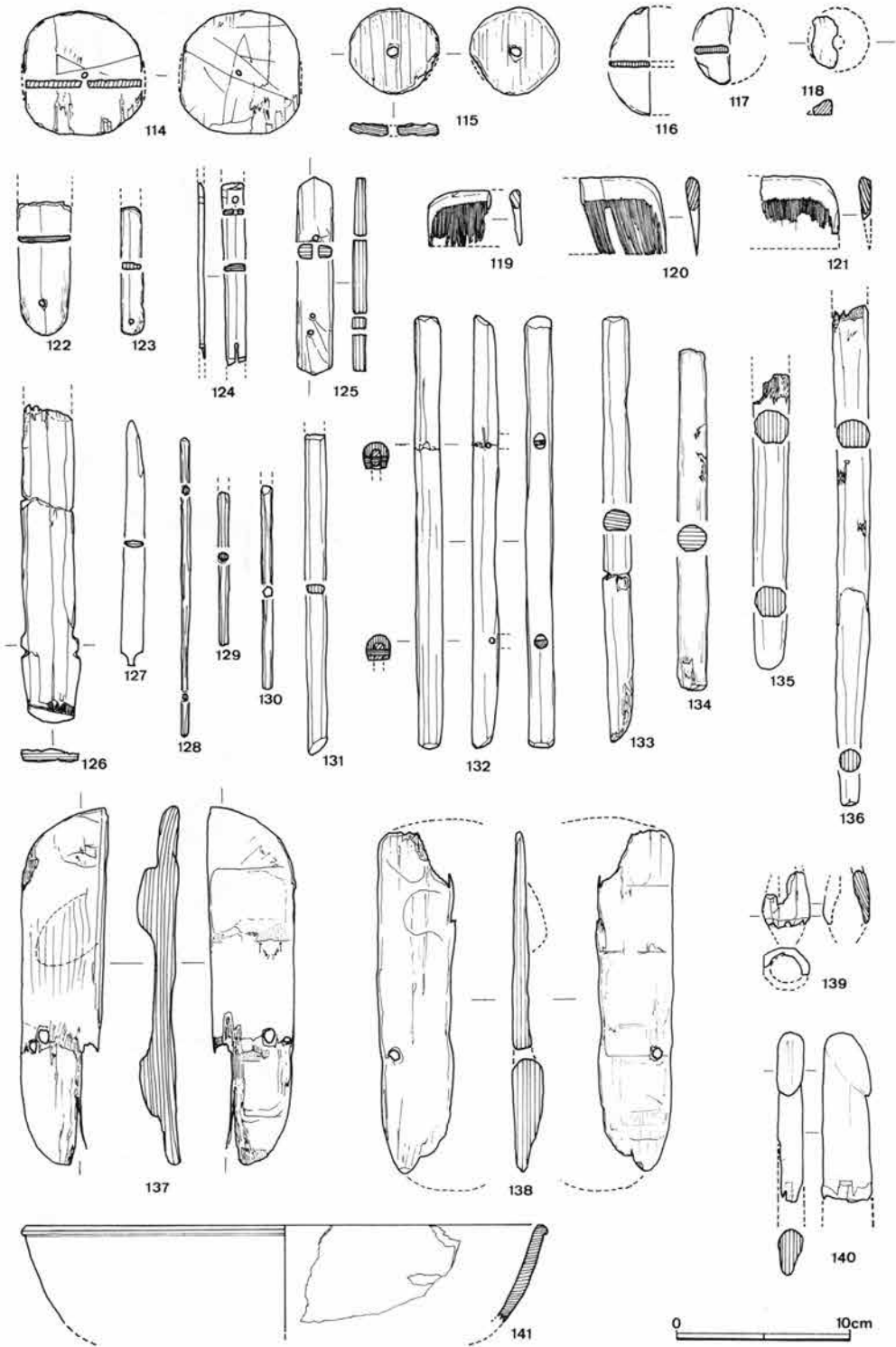
第45図 木製品実測図(3) 木製品



第46図 木製品実測図(4) 曲物底板ほか



第47図 木製品実測図(5) 曲物底板・曲物側板



第48図 木製品実測図(6) 鳴箭・櫛・剣形・下駄ほか

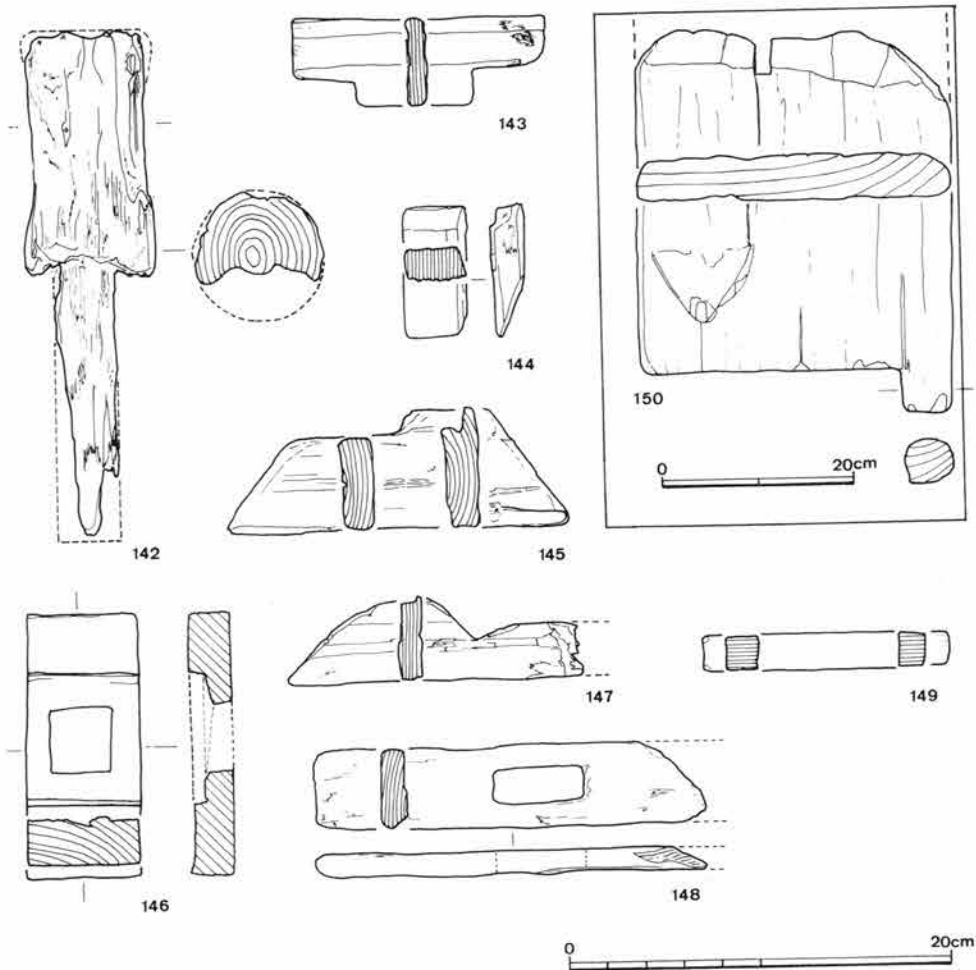
糸巻(第48図132) 梓木1本が出土した。背面を丸く仕上げ、腹面の両端から内より2か所にホゾ穴をあける。ホゾ穴に残る横木の凸ホゾには、梓木の側面から目釘止めを施す。

d. 服飾具

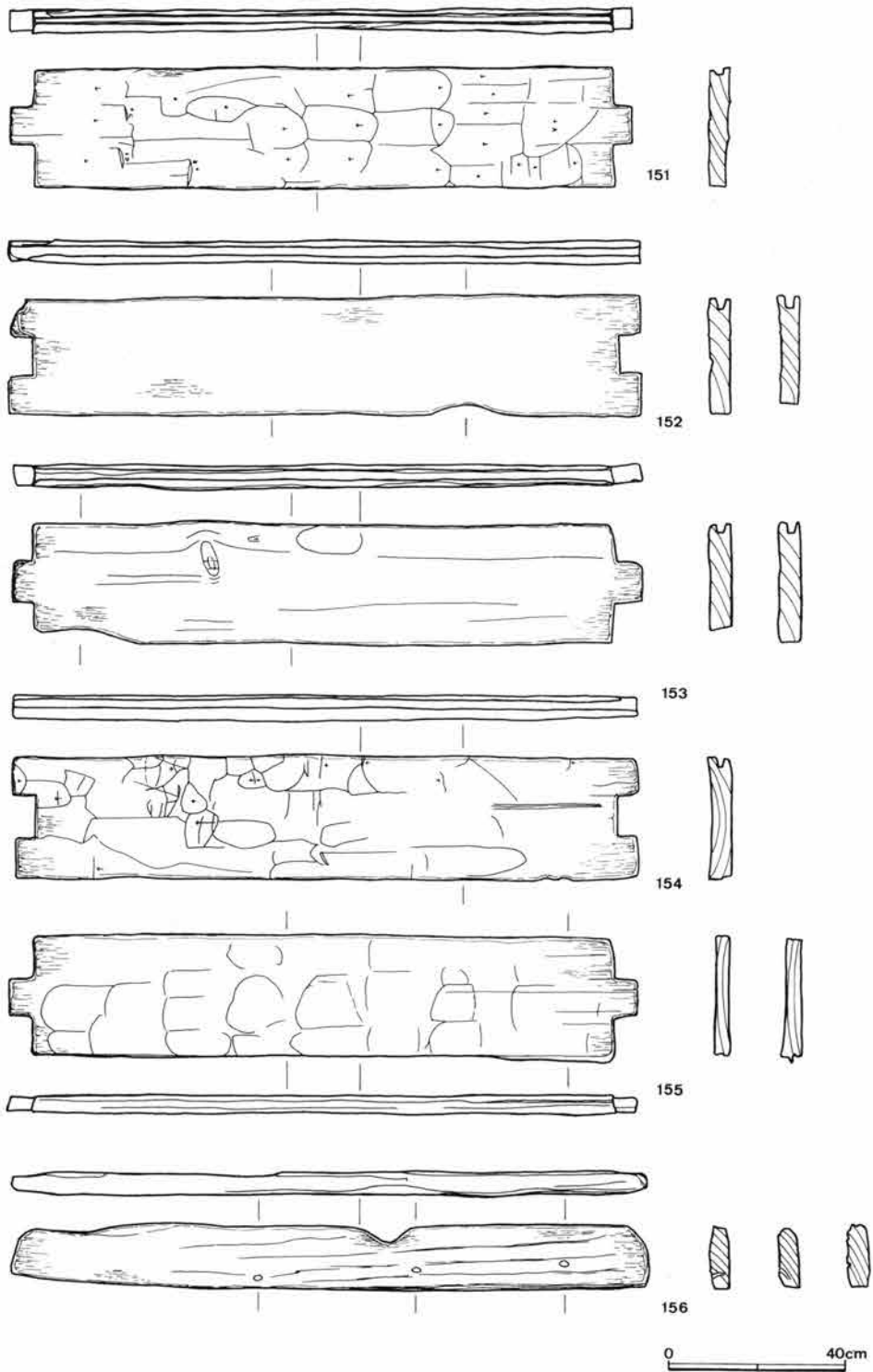
櫛(第48図119~121) 横櫛が3点出土している。長方形で、肩部に丸みを持たせるAⅡ型式のもので、歯部の長さにより大小2種類がある。

檜扇(第48図122・123, 第36図9-1) 出土した檜扇は、3枚を重ね、手元のところに穴を穿ち、桜の皮の綴じ紐で綴じ合わせている。長さは、28.5cmほどであり、最大幅が2.5cm、厚さが1~2mmを測る。先端部は丸く削りだし、尻は細く平に仕上げている。

下駄(第48図137・138) 2点出土している。台と歯を1木でつくる連歯下駄である。



第49図 木製品実測図(7) キヌタ・戸びらほか



第50図 木製品実測図(8) 井戸棒

e. 武器

鳴鏑(第48図139) 断片が出土している。復原すると、8面体に面とりしてあり、八目鳴鏑になる。内部は中空で、側面の穴は確認できない。

f. 食事具

箸(第48図128~130) 全長の分かるもので17.4cmを測る。破損品については、火切棒の可能性もある。

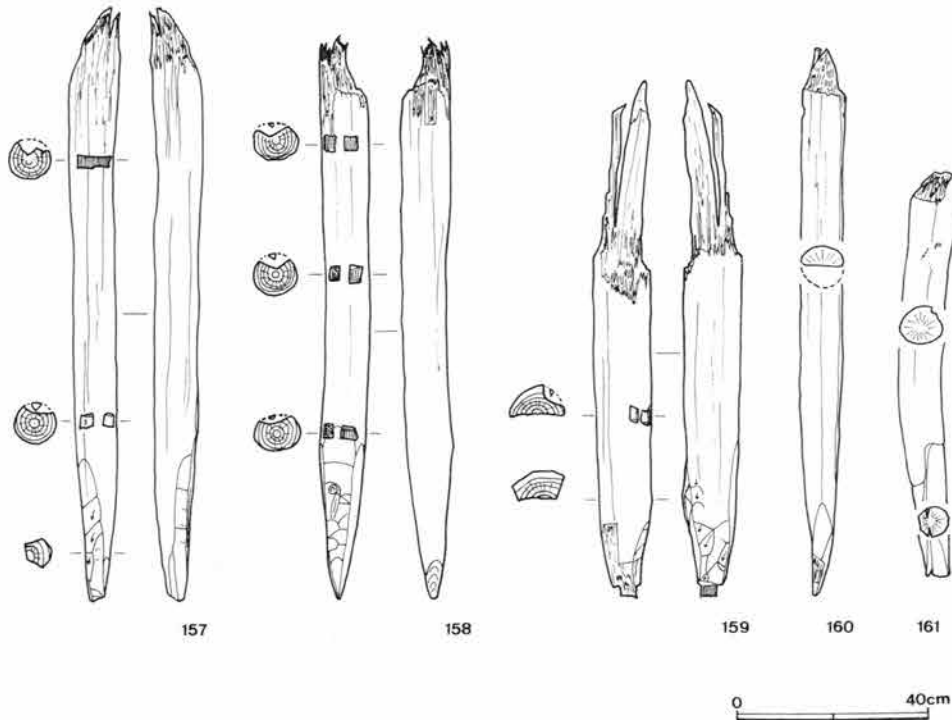
g. 農具

横槌(第49図142) ^{きぬた}心持材を使用し、円柱形の身と棒状の柄からなる。身の中央部は使用のためかすり減っている。

h. 建築部材

扉(第49図150) 軸の径5.4cm・幅33.1cmを測り、厚さ約5cmの扉である。上部は二次的に切断され、全体の形状は不明である。破断面の中央には縦長の穴を穿つ。

井戸杵(第50図151~156) 井戸に据え置かれた状態で最下段の1段分が出土し、2段目の1枚が倒れた状態で出土した。156は、井戸底の高さ調整のために据え置かれていた。井戸杵は、3段のホゾ組によるが、釘などによる止めは行っていない。特徴的なこととし



第51図 木製品実測図(9) S D28502の側板を止めた杭

ては、1段目と2段目の接合部にもホゾ組を用いていることが上げられ、非常にていねいに造られた井戸といえる。

i. その他の部財

側溝 S D28502護岸杭(第51図157~161) いずれも心持材を用いており、先端部を粗く加工する。上端は欠損しており全長は不明。158・159には筏を組んだときの孔が見られる。

⑨その他

流路跡 S D28509から、自然遺物として、獣骨類、貝の遺体、各種の種子(桃・梅・栗ほか)などが出土している。
(石尾政信・土橋 誠・戸原和人)

5. ま と め

調査対象地は、長岡京市井ノ内から今里にかけて南北方向に走る段丘の東側に形成された扇状地形で、調査地中央部より南は弥生時代以降には安定した場所であったと推定される。その後、若干の砂礫層の堆積や小規模な河川の氾濫が確認される。中央より北部は、古墳時代まで西山から小畑川に流れ込む善峰川の旧河道の一部であったと推測される。その旧河道の先端が扇状地形の一部を抉りとった場所が、小さな崖を形成し地形変換線として認められる。この地形変換線が、調査地のほぼ中央部を北西から南東方向に走る。この場所から、今里車塚古墳の葦石を採集した可能性が考えられる。

①今里遺跡について

地形変換線の南、Aトレンチの下層で検出した方形周溝墓は、今里遺跡の一部と考えられる。狭い調査地ではあるが、これより北では長岡京期以前の顕著な遺構がみられないことから、この地形変換線を今里遺跡の北限とすることが適当であろう。

古墳時代後期では、住居跡群の北で東西方向の溝 S D31001が検出され、北方に同時期の遺構がなく、この溝から紡錘車などが出土することから、S D31001が集落を区画する溝と推定される。また、北部の住居跡群は同じ場所に何度も建て替えている。

奈良時代には、地形変換線に沿った崖面に流路 S D28509の一部を埋め立て、井戸 S E 31035を造る。この井戸は、長岡京の造営に伴い、S D28509とともに(少なくとも路面に相当する場所は)埋められている。井戸 S E 31035を造るために埋め立てた土から、木簡・墨書土器をはじめ大量の遺物が出土したことは、これまで記したとおりである。特に木簡等の文字資料は注目される。また、井戸の南方約40mで検出した南廂が付く掘立柱建物跡 S B28511と同時期の可能性が高く、長岡京遷都以前のようすを窺える貴重な資料である。

長岡京市教育委員会等と相談した後、これら奈良時代の遺構を、地名をとって更ノ町遺跡^(注17)と呼称する。この遺跡は、周辺の調査、地形などから西及び西北に広がると推測できる。

②長岡京期の遺構について

今里地区では、西二坊大路東側溝 S D28501 を総延長 98m にわたって検出し、真南北に通ることを確認した。路面上で縦断する轍(長岡京期)に切られた横断する轍群が検出され、この轍群が西二坊大路東側溝によって分断されていることが判明した。また、この轍群は乙訓郡条里に一致することも注目される。西二坊大路と二条条間大路の交差点では、西二坊大路を二条条間大路の南側溝が横断することから二条条間大路が優先的に通された可能性が高い。ただ、地形が東方に下がるため即断はできない。

井ノ内地区では、西二坊大路東側溝 S D33501 とこれに直交する溝 S D33505、流路跡 S D28509 を埋め立てるとき丸太を敷き並べた路盤改良遺構を検出した。この路盤改良遺構は長岡京では初例である。S D33501 から出土した緑釉陶器、浄瓶、硯などの高級品や転用硯などから、この周辺に高級役人(貴族)等の存在が推定される。このことは、北西約 200m の長岡第十小学校建設のとき(右京第 25 次調査)発見された大邸宅跡との関連も注目される。また、東側溝 S D33501 洪水(砂礫)堆積や流路跡 S D33516 などの砂礫堆積から、長岡京期から平安時代に幾度か洪水にあったことを窺わせる資料である。

(石尾 政信)

③文字資料について

ここでは、木簡の記された時期と、4 に記された流人をめぐらる問題にしばって考える。

木簡の年代 今回の調査で出土した木簡には、いずれも年紀がないため、詳しい年次は不明と言わざるをえない。しかし、石敷き井戸の周辺部で出土した木簡については、若干の推定が可能である。まず、第一に伴出土器がいずれも長岡京期よりも一時代古い様相を示している。第二に、5 に「郷長」・「里正」とあって、確実に 8 世紀前半におさまる木簡が存在する。第三に、これまで出土している同種類の長岡京木簡と比較して、やや大きく、書体もくずれている。このような特徴から考えて、井戸周辺部で出土した木簡は、おおむね 8 世紀前半から中頃のものともみることができる。この木簡は、2・4・5・9 であるが、1 も S D28502 側板の北側で出土したため、これもこちらのグループに含められる。したがって、合計 5 点が 8 世紀前半から中頃の木簡の可能性があるとと言える。

次に S D28502 周辺で出土した木簡には、6 のような荷札、7 のような告知札状木簡もある。特に、7 が告知札とすれば、出土地が西二坊大路と二条条間大路の交差点で、告知札の立っていた地点としてふさわしい場所と言える。そのように考えてよいとすれば、これらの木簡は、長岡京期の木簡となる。

井戸の北方から出土したものには 3・15 があり、荷札もあって、長岡京期と考えられる。以上のように、長岡京跡右京第 285・310 次調査出土の木簡は、8 世紀前半から中頃の時

期と8世紀末の長岡京期の大きく2時期にわかれることが判明した。このことは、8世紀前半から、この地域に乙訓郡の中でも何か機能をもった官司が存在した可能性を示す。

流人と園司 4に見える流人と御司の関係はどのようなものであろうか。4は、流人の移送のための召喚状であるが、流人とは流罪を犯した罪人のことである。律では流罪を死罪の次に重い罰則で、五刑でも重い方に入っている。配所への移送は、令の規定によれば、四季ごとに四度に分けて行われることになっており、配所の決定も刑部省で予定して、太政官の裁決を経て決定することになる。移送にあたっては、良人ならば内印、^(注18) 賤民ならば外印を押した太政官符が出されてから行われ、罪人に対する裁量権は太政官にあった。しかも、移送に際しては、流人の妻妾・家口は同行する規定になっていた。移送時までは、刑部省や各国衙に収監される規定があるので、律令の条文による限り、刑部省や国衙には罪人を収容する施設があったものと推定される。

流人の移送には、専使が任命されて移送にあたるが、それとは別に「防援」を加える規定もある。また、護送には通過する近辺にある軍団の小毅もあたることになっていた。

この木簡は、流人を移送するために、必要となった人物を召喚するものであるが、四季のいくつかの時点で移送を許可する旨の太政官符が出された上で、それをうけて最後の段階で作成されたとみられる。『延喜式』の記述によれば、「凡流移罪人者、省申官通請左右兵衛、為部領、即授省符、路次差加防援、令達前所(下略)。」とある。すなわち、流人を移送するにあたり、刑部省が太政官に申告してから、左右兵衛府に専使を出すよう請願することになっている。この『延喜式』に書かれたものすべてが8世紀初めから存在したとは言えないが、ほぼ、同じような規定があったとすれば、この木簡は、専使を召喚するために出された可能性がある。そうすると、宛所は書かれていないが、左右兵衛府に対するという意味で、「御司」を刑部省か囚獄司とみ、そこから出されたという解釈になる。

しかし、この想定は無理である。専使を召すための命令は、『延喜式』に明記されている以上、公印を押した公文書で提出されるべき内容である。木簡で単に人を召すときは、その官司に所属する下級官人を召す例が多く、他の官司にわたるときは、木簡を用いても「移」の様式で正式に伝達される必要がある。^(注19) また、それに加えて、「御司」の表記が刑部省や囚獄司とするとまったくあわないことがあげられる。「御」のつくものは、8世紀の史料では天皇に関する事項、物品などにしか用いないため、刑部省関係の官司としてしまうと、「司」という官司をあらわすことばに「御」をかぶせることの意味が明らかにならない。むしろ、8世紀でも私的には「御」を用いてその宅地の家族を表現した例もある。『長屋王家木簡一』に、「若翁御物」と書いたものがあり、長屋王の子弟をさす可能性がある。

しかし「御」は、公的には天皇に関わるものにはしか用いられていないため、4のような公的性格をもつ召喚状に「御」がつく官司を刑部省関係のものともみることができない。

それでは、「御司」をどのように比定すればよからうか。「御司」の木簡は2点あり、いずれも井戸周辺からの出土で、その辺りでは墨書土器が多数出土した。この墨書土器には、人名・官司名が記されている。官司名及びそれに準ずる名称には、「園司」・「園宅」・「園」がある。このうち、園宅の宅は、ヤケと読み、建物を示す名称とみられる。^(注20)そのため、園司と園宅は同義で、その他の園も園司の省略形である可能性が高い。

園司は、律令の規定にない官司名で、実態はよくわからない点が多い。中央の宮内省には被官として園池司が存在し、全国の園・苑・池の管理、供御料の生産などを職掌としていた。墨書土器に見える園司も、この園池司に属する官司かもしれない。そうであるならば、園司は、地方にあって、園池などを管轄する官司ということになる。

地方の園や御園とよばれるものになると、その実態はまったくといっていいほどわかっていない。『令集解』園池司条所引の古記によれば、「別記云、園戸三百戸、径年一番役百五十戸、爲品部、免雜徭」とあって、中央の園池司には300戸の園戸が付属しており、年に150戸ずつ交替で上番していたことがわかる。地方にはどの程度の人間が勤務していたかは定かではない。地方の園は、『延喜式』卷三十九内膳司のところに、「園地卅九町五段二百歩」として、京北園・奈良園・奈癸園・羽束志園・泉園・平城園が見えている。また、同じ『延喜式』卷三十九内膳司の園神祭十四座の中に、京北園・長岡園・山科園・羽束志園・奈癸園が見え、また供御月料のところに山城国乙訓園と相楽郡鹿鷲園が見える。これらは、10世紀の史料であるが、山城国と大和国を中心に分布している。

この『延喜式』の記述によれば、地方の園はいくらか推定が可能である。まず、供御月料のところで、箸竹450株のうち、乙訓園が90株、鹿鷲園が160株を毎月中央に送ることになっている。10世紀にはこのような供御月料の一部を負担して、中央の内膳司へ送ることになっていた。同じ『延喜式』卷三十九内膳司には、「川船一艘、長三文、在與等津」とあって、これは、同じ『延喜式』の記載によれば、「右漕奈良、奈癸等園供御雜菜」を目的に置かれたものである。これらのことから、園は朝廷の一種の供御料を負担するために設けられたと考えてよからう。

ところで、山城国乙訓郡及びその周辺部に限れば、『延喜式』には羽束志園・長岡園・乙訓園と、比較的多くの園が置かれた地域といえる。『延喜式』の記述によると、このうち、長岡園には「園神三座」が祭られ、神階は六位であったことが記載されている。ただ、これらの園は『延喜式』に見えるだけなので、8世紀の段階に乙訓郡に園があったとは必ずしもいえない。しかし、木簡に伴出した墨書土器に園の存在を示す「園司」・「園宅」

が見えることから、この地域には長岡京遷都直前に朝廷の供御料を負担する園が存在し、それが10世紀の史料に見える乙訓園や長岡園へとつながっていった可能性がある。

このように考えると、召喚状を出した「御司」や請求状を出した「御曹司」は、この園司の可能性が高いのではあるまいか。8世紀では、公的には「御」が天皇に関する事項・事柄にしか用いられなかったことからすれば、朝廷の供御料を負担する園にふさわしい尊称といえよう。また、墨書土器の編年と木簡の推定年次・出土地点が一致することから、園司と「御司」・「御曹司」の同一性は充分考えられるといえよう。

以上のように、木簡に見える「御司」・「御曹司」を園司とすれば、流人の移送との関連をどう考えればよかろうか。先に引用した『延喜式』の記述では、移送の路順にあたる地域も、「路次差加防援」とあるように、「防援」を加えることになっていた。防援は、元来、警備を意味し、物部が衛士・兵士があたることになっている。園司が行ったのは、この防援に関わることではなかろうか。護送などの防援の中でも直接関わることは物部などが行ったのであろうが、手伝いなどの細かい雑用をこなすには、物部らだけでは数が少ないと思われる。木簡で召し出される4名は、園に勤務する白丁であるらしく、そのときにたまたま流人の移送になり、手伝いのためこれら4名が召されたとみるのがよかろう。

なお、園の管理についても不明な点が多い。ただ、4の木簡には「大領」の署名が見えることから、郡司クラスの在地首長層の影響下にあったことが推定される。当時の園の管理に郡司が関与したことは、注目すべき事実であり、地方における在地首長層の役割を考える上で、重要な史料と言えよう。

(土橋 誠)

注1 敬称省略、参加者名簿(補助員・整理員)

昭和62年度：池内宣裕・仕名野隆利・藤田 等・今石和美・太田明子・大松千尋・北岡理恵・幸田直子・西江由希・藤原ひとみ・村本香奈子・青山恵子

昭和63年度：石崎 章・稲葉隆宣・富田博之・鳥井口武・畑中英二・早佐古浩司・福富 仁・藤田 等・藤原知哉・前田暁宏・丸田晃弘・三澤繁忠・宮本純二・井上朋子・井上友子・北岡理恵・幸田直子・河野絹代・重松麻里子・高橋直子・乗木聡子・荒川仁佳子(旧姓平野)・藤原章子・三好ひとみ(旧姓藤原)・本田容子・峰 弥生・山崎公美・山本陽子・湯浅真珠・香西和子・小滝初代・二瓶潤子・野村江美子・藤澤みつ子・前田昭代・山中道代

平成元年度：赤池学博・古閑正浩・新開義夫・長谷川聡・水野 泰・前田暁宏・東 裕子・岩佐聖子・小田中里江・川相依子・北岡理恵・幸田直子・塚本映子・針尾有章子・三好ひとみ・谷澤真弓・山本紀子・香西和子・坂根 巧・新谷幸子・中島恵美子・山中道代・和田正子

平成2年度：中島恵美子・新谷幸子・林 秀子・小滝初代

付表2 木製品一覧表

| 図版 番号 | 登録 番号 | 長さ(直径) cm | 幅cm | 厚・高cm | 次数 | 遺構・層位 | 年月日 | 備考 |
|----------|----------|--------------|--------|-------|-------|-------------------|--------|------------|
| 1 | 163 | 20.8 | (2.15) | 0.2 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890911 | 人形・顔面に髷を描く |
| 2 | 164 | (10.6) | 2.5 | 0.2 | R 335 | S D28509上層礫層 | 890912 | 人形・顔面に髷を描く |
| 3 | 174 | (3.2) | (1.5) | 0.2 | R 335 | S D28509黒褐色土 | | 人形・顔面に髷を描く |
| 4 | 162 | 21.2 | 2.3 | 0.2 | R 335 | S D28509上層礫層 | 890912 | 人形 |
| 5 | 21 | (8.4) | 2.7 | 0.3 | R 310 | 40・41 l・g 暗灰褐色土 | 890228 | 人形 |
| 6 | 165 | 16.6 | 2.5 | 0.2 | R 335 | S D28509黒褐色土下層 | 890912 | 人形 |
| 7 | 150 | 24.5 | 2.8 | 0.35 | R 335 | S D28509上層礫層 | 891012 | 斎串 |
| 8 | 168 | (18.2) | 2.55 | 0.3 | R 335 | S D28509黒褐色砂礫混じり | 890906 | 斎串 |
| 9 | 26 | 21.6 | 2.5 | 0.25 | R 285 | S D28502 | 880203 | 斎串 |
| 10 | 6 | 19.5 | 2.3 | 0.4 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | 斎串 |
| 11 | 72 | 17 | 2.4 | 0.25 | R 310 | 45・46 h 黒褐色土 | 890225 | 斎串 |
| 12 | 151 | (17.7) | 2.55 | 0.3 | R 335 | S D28509黒褐色土下層 | 891012 | 斎串 |
| 13 | 14 | 23.7 | 2.95 | 0.3 | R 310 | 44 g・h 黒褐色土砂礫層 | 890218 | 斎串 |
| 14 | 20 | (13.8) | 2.65 | 0.45 | R 310 | 39 e・f 黒褐色土砂礫層 | 890301 | 斎串 |
| 15 | 10 | 16.6 | 2.3 | 0.4 | R 310 | 45・46 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 斎串 |
| 16 | 12 | 15.5 | 2.4 | 0.3 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890223 | 斎串 |
| 17 | 7 | 19.45 | 1.5 | 0.35 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | 斎串 |
| 18 | 73 | 16.3 | 2.15 | 0.15 | R 310 | 45・46 h 黒褐色土砂礫 | 890225 | 斎串 |
| 19 | 212 | (14.0) | 1.55 | 0.35 | R 335 | 45・46 i・j 黒褐色土砂礫 | 890920 | 斎串 |
| 20 | 208 | (14.3) | 2 | 0.15 | R 335 | S D28509砂礫 | 890825 | 斎串 |
| 21 | 166 | 18.05 | 1.9 | 0.25 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890912 | 斎串 |
| 22 | 167 | 16.5 | 1.85 | 0.25 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890911 | 斎串 |
| 23 | 215 | 16.7 | 1.85 | 0.2 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890921 | 斎串 |
| 24 | 169 | (15.4) | 1.55 | 0.3 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890912 | 斎串 |
| 25 | 182 | 17.2 | (1.2) | 0.2 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 890215 | 斎串 |
| 26 | 8 | (11.3) | 2.2 | 0.45 | R 310 | 43・44 h 黒灰色砂礫黒褐色土 | 890223 | 斎串 |
| 27 | 5 | (13.0) | 2 | 0.3 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | 斎串 |
| 28 | 209 | (8.9) | 2 | 0.25 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890920 | 斎串 |
| 29 | 221 | (8.7) | 1.4 | 0.3 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890901 | 斎串 |
| 30 | 214 | (4.65) | (1.1) | 0.35 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890825 | 斎串 |
| 31 | 220 | (9.6) | (1.5) | 0.22 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890901 | 斎串 |

| | | | | | | | | |
|----|-----|---------|--------|------|------|------------------|--------|----|
| 32 | 71 | (4.5) | (2.5) | 0.4 | R310 | 43・44 h 黒褐色土砂礫 | 890225 | 斎串 |
| 33 | 207 | (4.45) | (1.2) | 0.1 | R335 | S D28509砂礫 | 890825 | 斎串 |
| 34 | 22 | (6.6) | 1.7 | 0.3 | R310 | 42・43 g・h 黒褐色土 | 890220 | 斎串 |
| 35 | 74 | (4.5) | (2.5) | 0.4 | R310 | 45・46 h 黒褐色土砂礫 | 890225 | 斎串 |
| 36 | 100 | (5.5) | (1.45) | 0.4 | R310 | 42・43 g・h 砂礫 | 890218 | 斎串 |
| 37 | 218 | (5.35) | (1.95) | 0.3 | R335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890901 | 斎串 |
| 38 | 172 | (7.3) | 1.6 | 0.25 | R335 | S D28509黒褐色土 | 890911 | 斎串 |
| 39 | 170 | (13.9) | 1.65 | 0.3 | R335 | S D28509砂礫 | 890821 | 斎串 |
| 40 | 153 | (11.9) | 1.6 | 0.26 | R335 | S D28509黒褐色土 | 890912 | 斎串 |
| 41 | 75 | (17.0) | 2.25 | 0.48 | R310 | 45・46 h 黒褐色土砂礫 | 890225 | 斎串 |
| 42 | 217 | (7.5) | 1.6 | 0.35 | R335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890821 | 斎串 |
| 43 | 2 | (7.0) | (2.0) | 0.2 | R310 | 41 g・h 黒褐色土 | 890228 | 斎串 |
| 44 | 28 | (4.3) | 2.0 | 0.4 | R285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 斎串 |
| 45 | 24 | (7.4) | (1.9) | 0.3 | R310 | 45・46 h 砂礫 | 890218 | 斎串 |
| 46 | 211 | (8.5) | (1.7) | 0.2 | R335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890920 | 斎串 |
| 47 | 156 | (5.7) | (1.7) | 0.25 | R335 | S D28509黒褐色土 | 891012 | 斎串 |
| 48 | 18 | (7.2) | (1.7) | 0.24 | R310 | 44 g・h 黒褐色土 | 890218 | 斎串 |
| 49 | 173 | (8.3) | (2.2) | 0.25 | R335 | S D28509砂礫 | 890912 | 斎串 |
| 50 | 216 | (11.95) | (1.7) | 0.2 | R335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890821 | 斎串 |
| 51 | 23 | (11.8) | (1.6) | 0.25 | R310 | 40 e 黒褐色土・暗褐色土 | 890227 | 斎串 |
| 52 | 183 | (9.0) | (2.0) | 0.2 | R285 | S D28509黒褐色土 | 890215 | 斎串 |
| 53 | 3 | (10.5) | (1.65) | 0.35 | R310 | 44 g・h 黒褐色土砂礫 | 890328 | 斎串 |
| 54 | 210 | (11.0) | (1.85) | 0.25 | R310 | 45・46 i・j 黒褐色土砂礫 | 890920 | 斎串 |
| 55 | 13 | (6.7) | (2.1) | 0.25 | R310 | 45・46 f 黒褐色土砂礫 | 890223 | 斎串 |
| 56 | 80 | 径21.6 | | 1.85 | R310 | 41 g・h 黒褐色土 | 890228 | Ⅲ |
| 57 | 134 | 径17.4 | | 2.2 | R285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | Ⅲ |
| 58 | 198 | 径20.4 | | 1.6 | R335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890825 | Ⅲ |
| 59 | 42 | 径22.4 | | 1.6 | R310 | 42・43 h 砂礫 | 890220 | Ⅲ |
| 60 | 51 | 径21.6 | | 1.5 | R310 | 45・46 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | Ⅲ |
| 61 | 54 | 径24.0 | | 2 | R310 | 41 e・f 暗褐色土砂礫 | 890223 | Ⅲ |
| 62 | 49 | 径23.0 | | 1.8 | R310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | Ⅲ |
| 63 | 192 | 径21.2 | | 1.6 | R285 | S D28509黒褐色土 | 890215 | Ⅲ |
| 64 | 234 | 径22.6 | | 1.7 | R335 | S D28509黒褐色土 | 890911 | Ⅲ |

| | | | | | | | |
|----|-----|-------|------|-------|-------------------------|--------|------|
| 65 | 68 | 径21.2 | 2 | R 310 | 42・43 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | Ⅲ |
| 66 | 94 | 径21.6 | 1.6 | R 310 | 43・44 h 黒褐色土砂礫 | 890905 | Ⅲ |
| 67 | 106 | 径21.0 | 1.2 | R 285 | S D28509上層・暗灰(褐)色土 | 880203 | Ⅲ |
| 68 | 126 | 径20.0 | 1.2 | R 285 | S D28502 | 880208 | Ⅲ |
| 69 | 108 | 径18.0 | | R 285 | S D28509上層・暗灰(褐)色土 | 880203 | Ⅲ |
| 70 | 52 | 径24.0 | 1.8 | R 310 | 45・46 f 黒褐色土砂礫 | 890218 | Ⅲ |
| 71 | 191 | 径21.6 | 1.6 | R 310 | 45・46 h S D28509暗灰(褐)色土 | 890215 | Ⅲ |
| 72 | 53 | 径22.0 | | R 310 | 41 e・f 暗褐色土砂礫 | 890223 | Ⅲ |
| 73 | 65 | 径24.0 | 1.6 | R 310 | 45・46 f 黒褐色土砂礫 | 890220 | Ⅲ |
| 74 | 66 | 径22.4 | 0.85 | R 310 | 45・46 f 黒褐色土砂礫 | 890220 | Ⅲ |
| 75 | 93 | | 1.8 | R 310 | 43・44 h 黒褐色土砂礫 | 890905 | Ⅲ |
| 76 | 140 | | 0.6 | R 310 | 45・46 h 暗灰(褐)色土砂礫 | 890223 | Ⅲ |
| 77 | 58 | 径17.6 | 2.1 | R 310 | 45・46 f 黒褐色土砂礫 | 890227 | Ⅲ |
| 78 | 190 | 径21.2 | 1.2 | R 310 | 45・46 h S D28509暗灰(褐)色土 | 890215 | Ⅲ |
| 79 | 149 | 径22.0 | 2 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890824 | Ⅲ |
| 80 | 112 | 径16 | 0.85 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 曲物底板 |
| 81 | 115 | 径16 | 0.9 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 曲物底板 |
| 82 | 110 | 径17.2 | 0.75 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 曲物底板 |
| 83 | 185 | 径15.3 | 0.65 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890908 | 曲物底板 |
| 84 | 113 | 径13.8 | 0.7 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 曲物底板 |
| 85 | 184 | 径18.9 | 0.82 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 890215 | 曲物底板 |
| 86 | 129 | 径12.0 | 0.7 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 890208 | 曲物底板 |
| 87 | 40 | 径19.0 | 0.6 | R 310 | 42・43 g・h 黒褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 88 | 32 | 径18.0 | 0.85 | R 310 | 44 g・h 黒褐色土砂礫 | 890218 | 曲物底板 |
| 89 | 33 | 径17.6 | 0.55 | R 310 | 44 g・h 黒褐色土砂礫 | 890218 | 曲物底板 |
| 90 | 107 | 径13.6 | 0.6 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 曲物底板 |
| 91 | 121 | 径14.0 | 0.85 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 曲物底板 |
| 92 | 37 | 径18.1 | 0.7 | R 310 | 42・43 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 93 | 61 | 径17.4 | 0.65 | R 310 | 40 f 黒褐色土 | 890228 | 曲物底板 |
| 94 | 38 | 径16.7 | 0.65 | R 310 | 42・43 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 95 | 148 | 径12.4 | 0.7 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890824 | 曲物底板 |
| 96 | 36 | 径11.5 | 0.5 | R 310 | 42・43 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 97 | 45 | 径16.7 | 0.65 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | 曲物底板 |

| | | | | | | | | |
|-----|-------|---------|--------|------|-------|-------------------|--------|------|
| 98 | 81 | 径15.9 | | 9 | R 310 | 41 g・h 黒褐色土 | 890228 | 曲物底板 |
| 99 | 50 | 径11.6 | | 0.7 | R 310 | 4 g 暗褐色土 | 890328 | 曲物底板 |
| 100 | 123 | 径16.0 | | 0.6 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 曲物底板 |
| 101 | 228 | 径18.8 | | 0.8 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890920 | 曲物底板 |
| 102 | 235 | 径17.3 | | 0.75 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890920 | 曲物底板 |
| 103 | 34・59 | 径16.3 | | 0.8 | R 310 | 44・45・46 h 黒褐色土 | 890223 | 曲物底板 |
| 104 | 46・60 | 径16.3 | | 0.65 | R 310 | 44・45・46 h 黒褐色土 | 890222 | 曲物底板 |
| 105 | 118 | 径38.0 | | 0.95 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 曲物底板 |
| 106 | 119 | 径40.0 | | 1 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 曲物底板 |
| 107 | 67 | 径29.0 | | 0.75 | R 310 | 45・46 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 108 | 120 | 径30.2 | | 0.9 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 曲物底板 |
| 109 | 69 | 径18.0 | | 0.75 | R 310 | 45・46 h 黒褐色土砂礫 | 890225 | 曲物底板 |
| 110 | 62 | 径19.0 | | 0.4 | R 310 | 42 e・f 暗褐色土 | 890328 | 曲物底板 |
| 111 | 45 | (16.7) | | 0.65 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890222 | 曲物底板 |
| 112 | 186 | (12.75) | (5.15) | 0.35 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890908 | 曲物底板 |
| 113 | 98 | (23.4) | | 0.25 | R 310 | 42・43 h 暗褐色土砂礫 | 890220 | 曲物底板 |
| 114 | 1 | 径7.5 | | 0.5 | R 310 | 井戸石敷溝西側黒灰色土上層 | 890514 | 紡輪 |
| 115 | 225 | 径5.2 | | 0.7 | R 335 | S D28509黒褐色土砂礫 | 890920 | 紡輪 |
| 116 | 35 | 径6.4 | | 0.3 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890220 | 紡輪 |
| 117 | 48 | 径4.5 | | 0.45 | R 310 | 43 g h 暗褐色土砂礫 | 890218 | 紡輪 |
| 118 | 47 | 径3.5 | | 0.9 | R 310 | 45 h・46 h 黒褐色土 | 890227 | 紡輪 |
| 119 | 103 | (3.7) | (3.8) | 0.65 | R 310 | S E31035井戸木枠内 | 890314 | 横櫛 |
| 120 | 205 | (5.05) | (5.2) | 0.8 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890924 | 横櫛 |
| 121 | 206 | (4.55) | (4.6) | 0.7 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890911 | 横櫛 |
| 122 | 43 | (7.7) | (3.1) | 0.38 | R 310 | 45 h・46 h 黒褐色土 | 890220 | 檜扇力 |
| 123 | 44 | (7.35) | 1.25 | 0.4 | R 310 | 44 h 黒褐色土 | 890227 | 檜扇力 |
| 124 | 175 | (10.2) | (1.3) | 0.35 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 891013 | 札 |
| 125 | 111 | 11.4 | 2.1 | 0.8 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 不明 |
| 126 | 141 | (18.2) | (3.45) | 0.65 | R 310 | S D28509暗褐色土 黒褐色土 | 890223 | 剣型 |
| 127 | 213 | 14.35 | 1.25 | 0.35 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890825 | 刀型 |
| 128 | 30 | 17.4 | 0.5 | 0.4 | R 310 | 45 h・46 h 砂礫 | 890218 | 箸 |
| 129 | 194 | (8.9) | 0.6 | 0.55 | R 335 | S D28509砂礫 | 890825 | 箸 |
| 130 | 31 | (11.9) | 0.6 | 0.7 | R 310 | 45 h・46 h 砂礫 | 890218 | 箸 |

| | | | | | | | | |
|-----|-----|---------|-------|-------|-------|-----------------|--------|-----|
| 131 | 229 | 18.75 | 1.2 | 0.55 | R 335 | S D28509黒褐色砂礫 | 890920 | 棒状 |
| 132 | 76 | 25.3 | 1.5 | 0.15 | R 310 | 45 h・46 h 黒褐色砂礫 | 890225 | 糸車 |
| 133 | 199 | (24.95) | 1.6 | 0.12 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 890825 | 棒状 |
| 134 | 233 | 19.9 | 1.6 | 1.7 | R 335 | S D28509黒褐色砂礫 | 890920 | 棒状 |
| 135 | 143 | (17.2) | 2 | 1.9 | R 285 | 黒灰色砂礫 | 880208 | 不明 |
| 136 | 99 | (29.2) | 2 | 1.7 | R 285 | S D28509黒褐色土 | | 不明 |
| 137 | 238 | (20.7) | (4.9) | 2.3 | R 335 | S D28509黒褐色砂礫 | 891024 | 下駄 |
| 138 | 249 | (19.9) | (4.5) | 1.9 | R 335 | 流路跡 S D33516砂礫 | 891221 | 下駄 |
| 139 | 204 | (3.2) | 径 2.6 | | R 335 | S D28509砂礫 | 890912 | 鳴鏑 |
| 140 | 102 | (9.9) | 1.5 | 0.165 | R 310 | 44 g 黒褐色土 | 890325 | 陽物形 |
| 141 | 227 | 径30.9 | | 5.75 | R 335 | S D28509黒褐色砂礫 | 890920 | 鉢 |
| 142 | 77 | (26.4) | 径6.0 | | R 310 | 45 h・46 h 黒褐色砂礫 | 890225 | キヌタ |
| 143 | 109 | 13.5 | (4.7) | 1 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880208 | 部材 |
| 144 | 124 | 6.95 | 3.4 | 0.175 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880209 | 部材 |
| 145 | 161 | (18.1) | (6.2) | 0.19 | R 335 | S D28509黒褐色土 | 891012 | 部材 |
| 146 | 114 | 13.9 | 6.1 | 0.85 | R 285 | S D28509黒褐色土 | 880210 | 部材 |
| 147 | 236 | 15.9 | 4.55 | 0.13 | R 335 | S D28502の北 黒褐色土 | 890912 | 部材 |
| 148 | 250 | (21) | 4.3 | 1.4 | R 285 | S D28509黒褐色土 | | 部材 |
| 149 | 139 | (13.0) | 1.95 | 0.17 | R 310 | S D28509黒褐色土 | 890228 | 部材 |
| 150 | 244 | 40.75 | 33.1 | 4.8 | R 310 | S D28509下層黒灰色砂礫 | 890223 | 扉 |
| 151 | 245 | 142.5 | 27.6 | 5.1 | R 310 | S E31035 | | 井戸枠 |
| 152 | 246 | 144 | 27.7 | 4.9 | R 310 | S E31035 | | 井戸枠 |
| 153 | 247 | 143.7 | 27.3 | 4.9 | R 310 | S E31035 | | 井戸枠 |
| 154 | 248 | 142.5 | 27.8 | 5.4 | R 310 | S E31035 | | 井戸枠 |
| 155 | 249 | 133.3 | 27.8 | 4 | R 310 | S E31035 | | 井戸枠 |
| 156 | 250 | 144 | 14.8 | 5 | R 310 | S E31035 | | 井戸材 |
| 157 | 243 | 124.8 | 径8.0 | | R 335 | S D28502 | | 杭 |
| 158 | 240 | 118 | 径9.6 | | R 335 | S D28502 | | 杭 |
| 159 | 241 | 108.65 | 径12.2 | | R 335 | S D28502 | | 杭 |
| 160 | 252 | (28.8) | 径2.3 | | R 335 | S D28502 | | 杭 |
| 161 | 242 | 84.4 | 径9.4 | | R 335 | S D28502 | | 杭 |

※ R 310の地区割番号のみのものはすべて S D28509出土
径の () は残存長

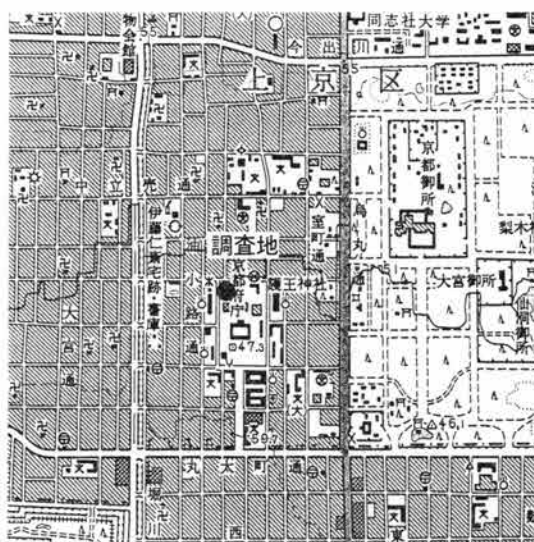
- 注2 橋本清一・高橋美久二(以上, 京都府立山城郷土資料館), 日下雅義(立命館大学), 山中 章・國下多美樹・清水みき・秋山浩三(以上, (財)向日市埋蔵文化財センター), 中尾秀正(長岡京市教育委員会)・山本輝雄・岩崎 誠・小田桐淳・木村泰彦(以上, (財)長岡京市埋蔵文化財センター)
- 注3 山本輝雄「右京第214次(7ANGMT地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和60年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1987
- 注4 高橋美久二ほか「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1979)』京都府教育委員会) 1979, 高橋美久二ほか「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-2)』京都府教育委員会) 1980
- 注5 渡辺 博「長岡京跡左京第162次(7ANEKD地区)発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第27集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1989
- 注6 中村 浩『和泉陶器窯の研究』柏書房 1981 ほか
- 注7 『平城京発掘調査報告』Ⅷ 奈良国立文化財研究所 1976年 ほか
- 注8 井藤暁子「畿内」(佐原 眞編『弥生土器』I ニューサイエンス社) 1983 ほか
- 注9 木簡の読みについては, 京都教育大学教授和田 萃氏, 東北大学助教授今泉隆雄氏, 国立歴史民俗博物館平川 南氏, 京都市立芸術大学講師西山良平氏, 奈良国立文化財研究所橋本義則氏, (財)向日市埋蔵文化財センター山中 章氏・清水みき氏, (財)京都市埋蔵文化財研究所長宗繁一氏・百瀬正恒氏・久世康晴氏をはじめとして, 多くの方々に御協力いただいた。また, 平成2年度の木簡学会において, 貴重な御教示を得る機会を持った。ここに記して感謝の意を表したい。
- 注10 岸 俊男「古代村落と郷里制」ほか(同『日本古代籍帳の研究』所収 塙書房) 1973.5, その他, 岸 俊男氏の著作に郷里制と関連した研究がある。
- 注11 『茨城県関係古代金石文資料集成—墨書・篋書—』(『学術調査報告書』2 茨城県立歴史館) 1985, 図版81。この資料は, 国立歴史民俗博物館平川 南氏より御提供いただいた。感謝の意を述べたい。
- 注12 高橋美久二「宝菩提院廃寺」(『長岡京古瓦聚成』向日市教育委員会) 1987
- 注13 『平城京出土軒瓦型式一覧』1976, 同補遺編 奈良国立文化財研究所 1979。以下の瓦の分類は, この資料による。
- 注14 小田桐淳「右京第144次(7ANIMO地区)調査概報」(『長岡京市埋蔵文化財センター年報昭和58年度』(財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1984
- 注15 『平城京発掘調査報告』Ⅵ 奈良国立文化財研究所 1975
- 注16 奈良国立文化財研究所『木器集成図録』近畿古代編「奈良国立文化財研究所 資料第27冊」1985
- 注17 長岡京市市史纂纂委員会編『長岡京市史』資料篇1 長岡京市 1991
- 注18 獄令・流移人条, 遷送条。
- 注19 長屋王家木簡に
「(表)雅楽寮移長屋王家令所/平群朝臣廣足/右人請因倭舞」
「(裏)故移 十二月廿四日/少属白鳥史豊麻呂/少允船豊」
とあり(『平城宮発掘調査出土木簡概報(21)—長屋王家木簡—』奈良国立文化財研究所 1989.5), 正式に移式で出すものと推定できる。
- 注20 吉田 孝「イへとヤケ」(同『律令国家と古代の社会』所収 岩波書店) 1983.12

2. 平安京左京一条三坊二町・西洞院大路 発掘調査概要

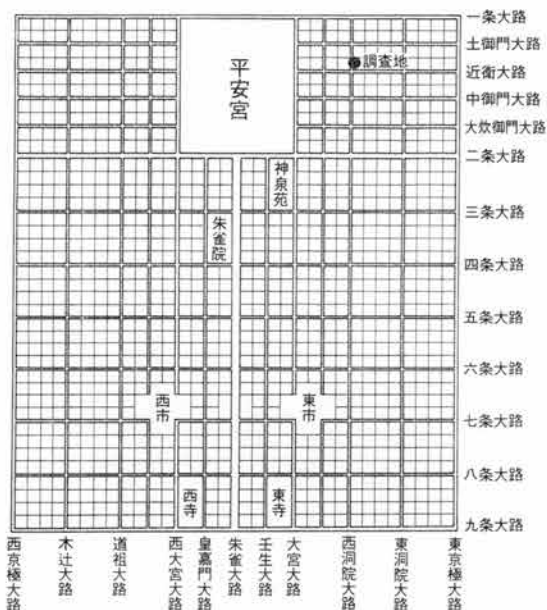
1. はじめに

今回の調査は、京都市上京区下立売通新町西入ル藪ノ内町の京都府庁内で実施したものである。府庁の北西隅に位置する職員会館南側の木造庁舎跡地が、調査地である。この地点に、職員福利厚生棟(仮称)建設が計画されたため、京都府総括調整室の依頼を受けて、当調査研究センターが発掘調査を実施した。調査に係わる経費は、すべて京都府総括調整室が負担した。

現地調査は、平成2年8月7日から平成3年1月14日まで行った。調査面積は、約1,000㎡である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長辻本和美と同主任調査員引原茂治が担当した。調査に当たり、京都府総括調整室をはじめ、教育庁指導部文化財保護課などから、協力していただいた。また、京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・同志社大学の方々からは、多大なご教示をいただいた。現地調査では、調査補助員・整理員として、一般市民や各大学の学生など、多くの方々に協力してい



第52図 調査地位置図 (1/25,000)



第53図 平安京条坊図

(注1)
 いただいた。記して感謝したい。

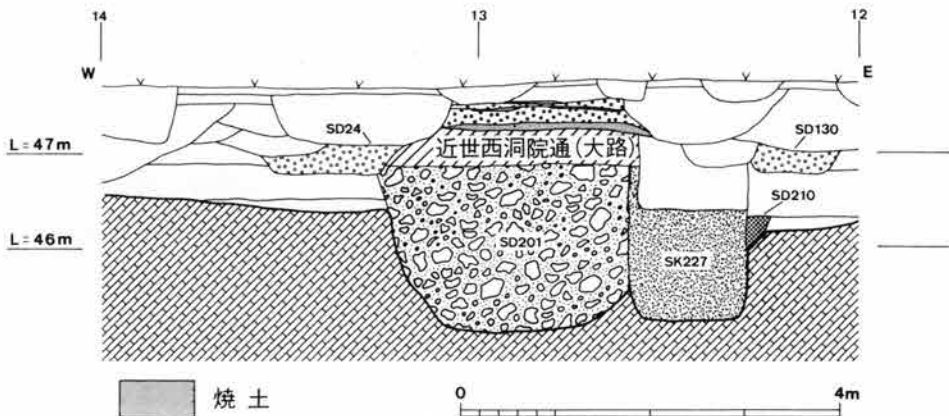
2. 調査経過

調査地は、平安時代に遡れば、平安京西洞院大路及びその東側の左京一条三坊二町にあたる。また、わずかではあるが、西洞院大路西側の左京一条二坊十五町が含まれる。それ以後、現在にいたるまで、ほとんど人跡の絶えたことがないところである。江戸時代初期には、調査地の南西側に豪商茶屋四郎次郎屋敷が造られている。(財)京都市埋蔵文化財研究所によってその一部が調査され、豪商の生活の一端を偲ばせる多くの遺物が出土している。(注2)
 江戸時代末期には、京都守護職に任じられた会津藩主松平容保の役邸があった。

今回の調査地の南側、府庁1号館の地点は、西洞院大路と近衛大路の交差点にあたる部分であるが、昭和62・63年度に、当調査研究センターが調査を行った。この調査では、時期が遡るにつれて西洞院大路が町屋に侵食され、路面幅が狭くなることを確認している。また、華南三彩盤などが出土している。(注3)

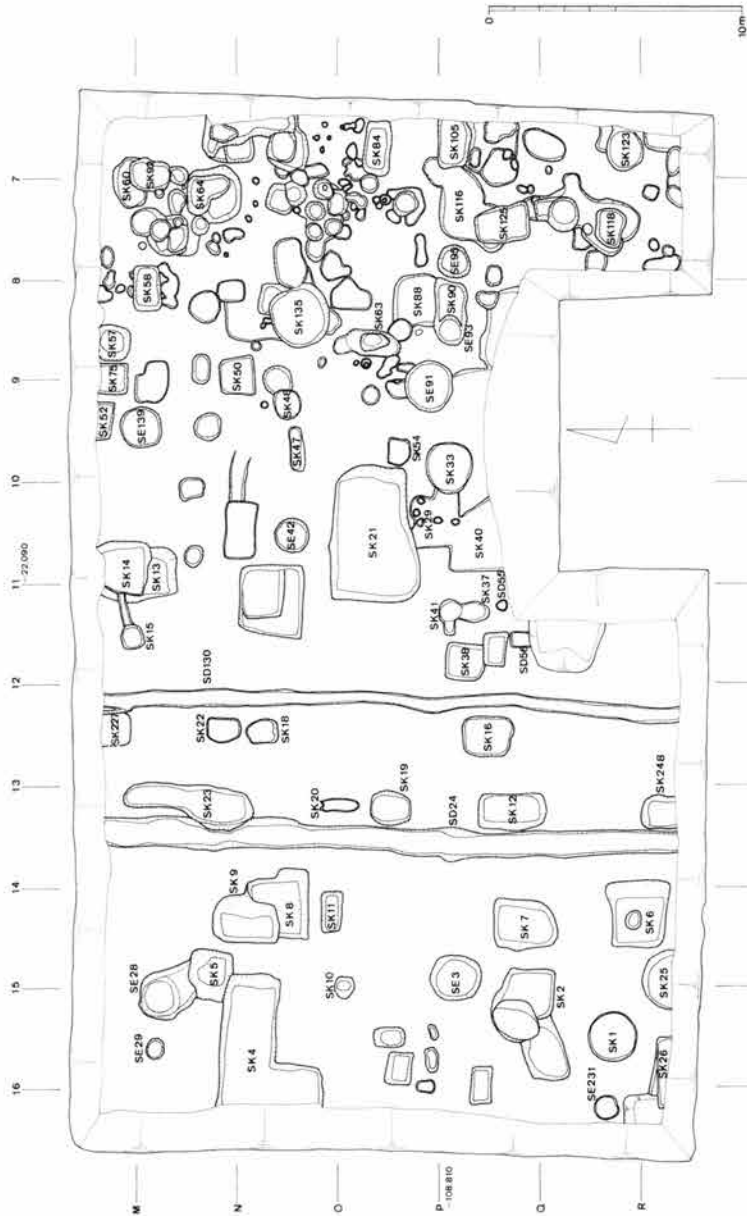
今回の調査地の地区割りは、国土座標に合わせて行った。また、昭和62・63年度の調査と関連性をもつため、南北方向については、その11ライン(Y=-22,090)を今回の調査でも11ラインとして、東から西にアラビア数字で表示した。また、東西方向については、昭和62・63年度調査のPライン(X=-108,910)から100m北のライン(X=-108,810)を同じくPラインとして、北から南へアルファベットで表示した。方眼は4mである。標高は、府庁前の国土水準点を使用した。

現地調査は、平成2年8月7日に機材・物品の搬入を行い、翌8日から重機掘削を開始した。近世初頭頃の面まで重機で掘削し、8月22日から人力で掘削・精査をはじめた。こ



第54図 層序断面図

の面からは、近世西洞院通(大路)の両側溝・京都守護職役邸に係わるものとみられる井戸・多数の土坑など約170か所の遺構を検出した。その後、11月2日から20日にかけて再度重機により地山直上まで掘削した。以後、人力による掘削・精査を行い、戦国期の堀とみられる溝・西洞院大路の東西両側溝とみられる溝など平安時代までの遺構約90か所を検出した。奈良時代以前については、遺構・遺物ともに存在していなかった。12月20日にアドバルーンによる空撮を行い、21日に掘削作業を終了した。平成3年1月14日までに図面・



第55図 調査地平面図(近世)

機材撤収を行い、現地調査を完了した。この間、平成2年11月28日に現地説明会を行った。府職員・府民の方々など約210名が参加された。

3. 検出遺物の概要

今回の調査では、平安時代から近世にかけての遺構約260か所を検出した。遺構の分布は、調査地の東半部に密であり、西半部はやや疎である。これは、西半部が西洞院大路の路面部分や通りに面した表の部分にあたるためと考えられる。

なお、現時点では、整理作業が不十分であり、遺構と遺物との関連もほとんど検討できていない。したがって、詳細な報告はできないが、主なものについて、概略記す。

(1) 近世の遺構

西洞院通(大路) 溝S D24(西側溝)と溝S D130(東側溝)の間の幅約4m前後の部分が路面となる。これは、昭和62・63年度調査で検出したものの北側延長部及び府庁の南北両側に現存する西洞院通の道筋にほぼ一致する。西洞院通は、京都守護職役邸設置時にその敷地に含まれ、西側へ約20m移動する。今回検出したのは、役邸造営以前の西洞院通にあたる。路面には3層の焼土の堆積が認められる。

井戸S E42 調査地ほぼ中央で検出した石組の井戸である。直径約1.4mの円形である。花崗岩の切石を積む。19世紀後半頃の遺物が出土した。時期的にみて、京都守護職役邸に係わる井戸とも考えられる。なお、調査地は、役邸の主要部ではなく長屋部分にあたるものとみられる。

井戸S E95 調査地東側で検出した石組の井戸である。直径約0.8mの円形で、18世紀頃の遺物が出土した。

土坑S K50 一辺約1.4mの方形土坑である。底部に拳大程度の石を円形に並べる。性格は不明であるが、植木の跡とも考えられる。

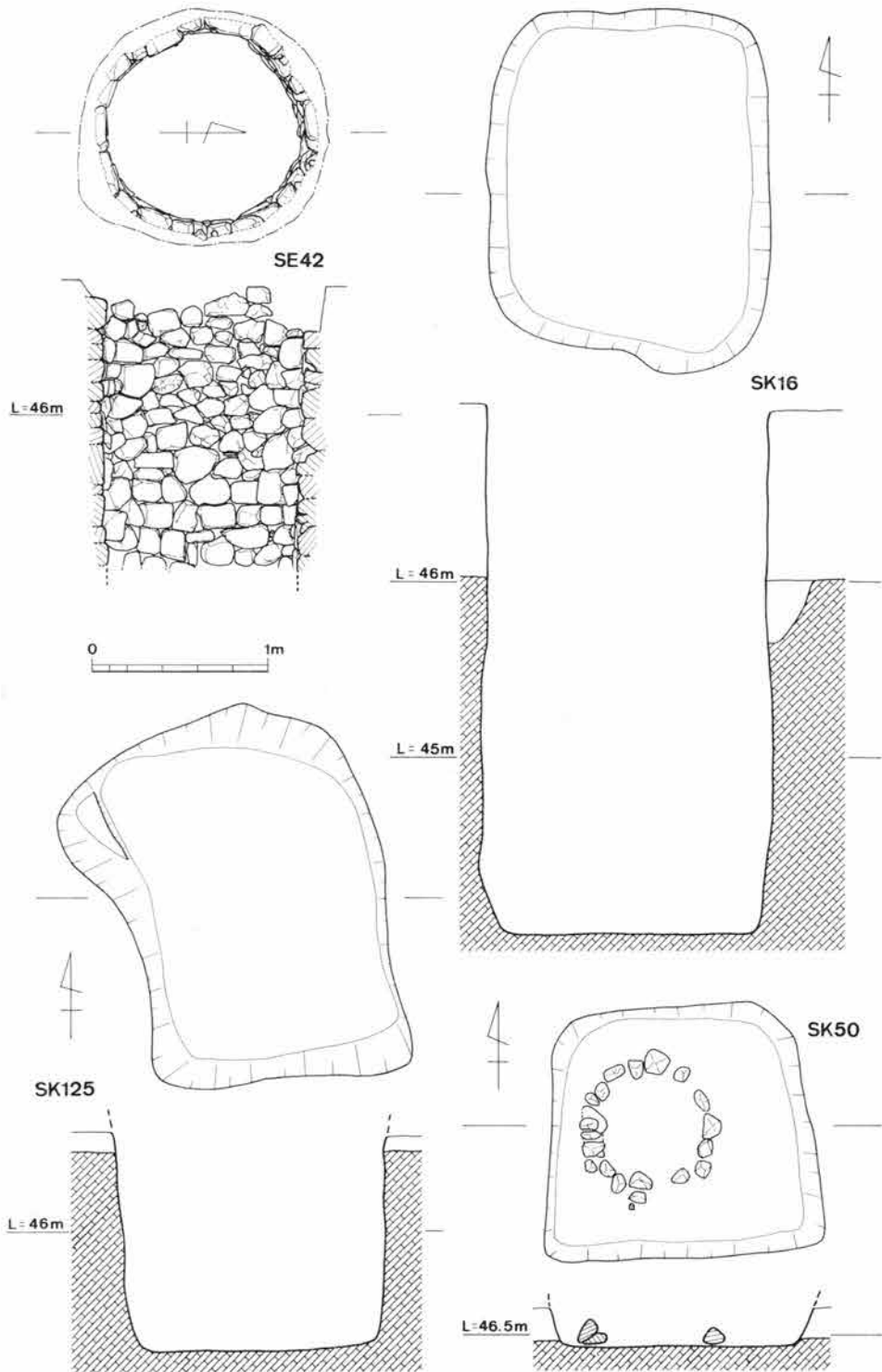
土坑S K26 調査地南西隅で部分的に検出した。全容は不明であるが、検出した一辺は約2.8mである。17世紀後半から18世紀初頭頃の遺物が出土した。

土坑S K58 調査地北東側で検出した。長さ約1.8m・幅約1.2mの長方形土坑で、17世紀後半頃の遺物が出土した。地下式貯蔵穴か。

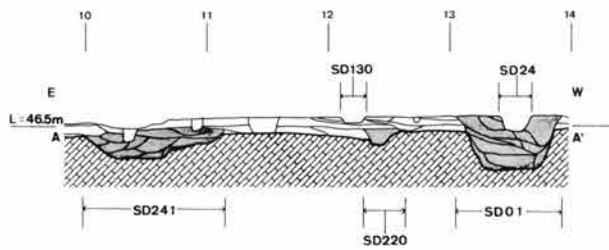
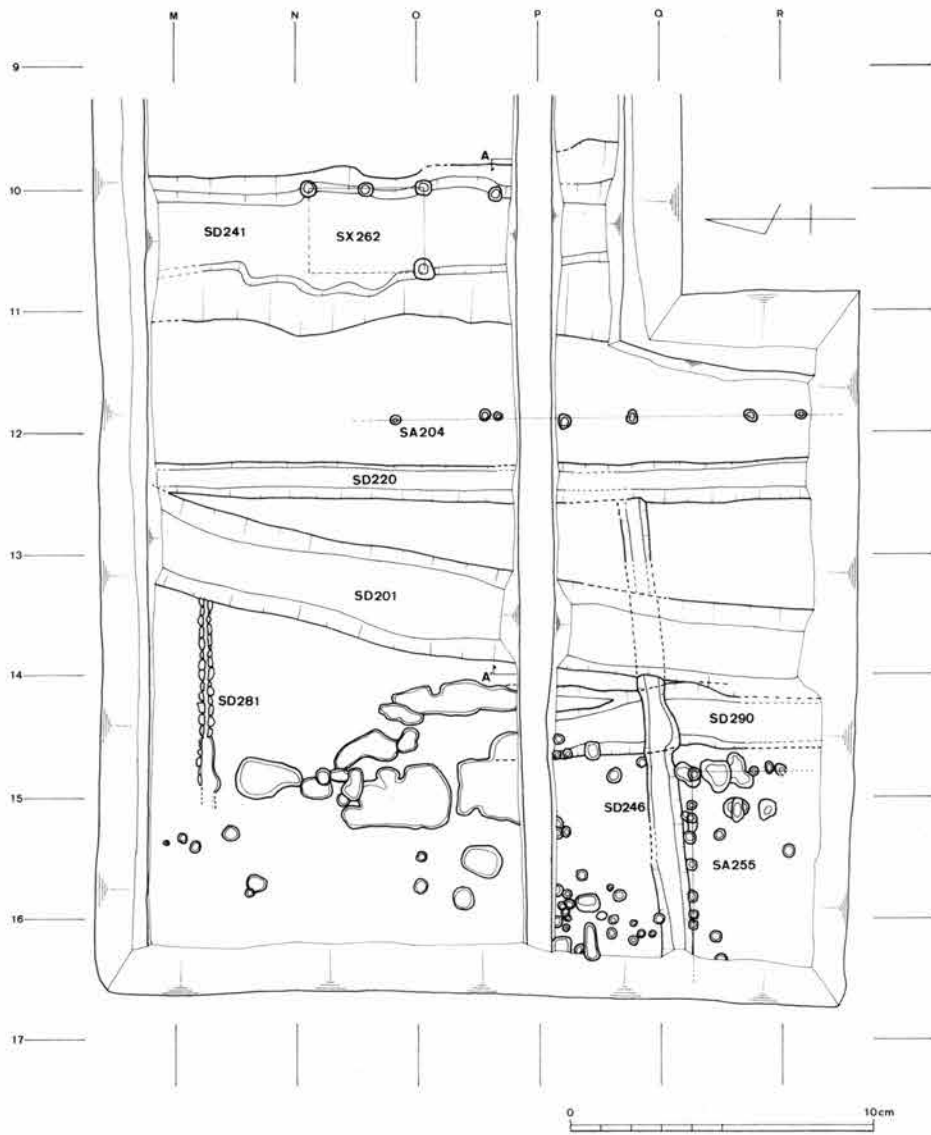
土坑S K84 調査地東端部で検出した。長さ約2.1m・幅約1mの長方形土坑で、17世紀後半頃の遺物が出土した。地下式貯蔵穴か。

土坑S K105 調査地東端部で検出した。長さ約1.8m・幅約1mの長方形土坑で、17世紀中葉から後半頃にかけての遺物が出土した。地下式貯蔵穴か。

土坑S K16 西洞院通の路面東端部で検出した。長さ約2m・幅約1.6mの長方形土坑で、



第56図 遺構実測図



第57図 調査地部分図 (平安~中世)

深さは3mにも及ぶ。地下式貯蔵穴状であるが、路面部分に位置しており、その性格は不明である。焼土や藁灰とみられるものが含まれており、あるいは、火災後のゴミ穴か。16世紀末から17世紀初頭頃にかけての遺物が出土した。

土坑SK125 調査地南東端で検出した。長さ約2m・幅約1.5mの長方形土坑である。地下式貯蔵穴と考えられる。16世紀末から17世紀初頭頃にかけての遺物が出土した。

土坑SK12 西洞院通の路面西端部、土坑SK16と相対する位置で検出した。長さ約3m・幅約1.5mの長方形土坑である。16世紀末ないしは17世紀初頭頃の遺物が出土した。

(2) 中世以前の遺構

溝SD201 調査地西側で検出した。幅約3.5m・深さ約1.7mの大規模な溝で、湾曲気味に南北にのびる。埋土は東側から入っており、あるいは、東側に土塁のようなものがあり、それを崩して溝を埋めたものか。このように考えると、この溝は、防御用の堀の可能性もある。出土遺物から、16世紀頃の溝と考えられる。

溝SD220 溝SD201の東側で検出した。幅約1.1m・深さ約0.4mで、ほぼ条坊の方向に沿って南北にのびる。北端部は、溝SD201に切られている。15世紀頃の遺物が出土しており、中世の西洞院大路東側溝の可能性はある。

柱列SA204 溝SD220に沿って、東側へ約1.5m離れて南北に並ぶ。柱間はばらつきがあるが、溝SD220に伴う築地ないしは柵列と考えられる。

土坑SK135 調査地東側で検出した。直径約3mの円形土坑である。12世紀から13世紀にかけての遺物が出土した。

溝SD241 調査地ほぼ中央で検出した。幅約4.6m・深さ約0.8mで、南北にのびる。位置的に、西洞院大路東側溝と考えられる。出土遺物は、11世紀のものを中心として、12世紀頃のものまでが含まれる。大路側溝としては規模が大きいが、これが当初からの規模であるのか否かは不明である。ただ、橋とみられる遺構SX262があり、ある一時期の側溝の規模を示していることは考えられる。

溝SD290 溝SD201の西側で検出した。幅約1.8m・深さ約0.3mで、南北にのびる。南端部は溝SD201や近世遺構に切られている。北側部分は、削平されたのか途切れる。位置的に、西洞院大路西側溝と考えられる。上層には中世の遺物を含んでおり、中世頃まで機能していたものとみられる。

溝SD246 調査地南西部で検出した。幅約1m・深さ約0.4mで、東西方向にのびるが、条坊の方向には合わない。切り合い関係から溝SD201や溝SD220に先行することは確認できるが、溝SD290との関係については、交差点が近世遺構で攪乱されているため不明である。埋土は、溝SD290とほぼ同質である。この溝の性格についても不明である。

柱列 S A 255 溝 S D 290 の西側に「L」字形に並ぶ。柱間は約1mである。条坊の方向にはほぼ沿っている。築地ないしは柵列の跡か。

4. 出土遺物の概略

今回の調査では、平安時代から近世に至る多量の遺物が出土したが、上記のとおり、整理作業は充分できていないのが現状である。したがって、今回は、その一部を紹介するにとどめる。なお、図示した遺物の法量などについては、付表4を参照されたい。文中の番号は、第58～62図の番号及び付表の番号に一致する。

(1) 近世の遺物

出土遺物のうちでは、近世のものが、全体の85%程度を占める。内容は、土師器皿・銅などの土器、国産陶磁器、輸入陶磁器、瓦、古銭などの金属製品、石塔・石臼などの石製品である。また、ふいごの羽口やるつばなども出土している。このうち、近世初頭頃の国産・輸入陶磁器には注目すべきものが多い。

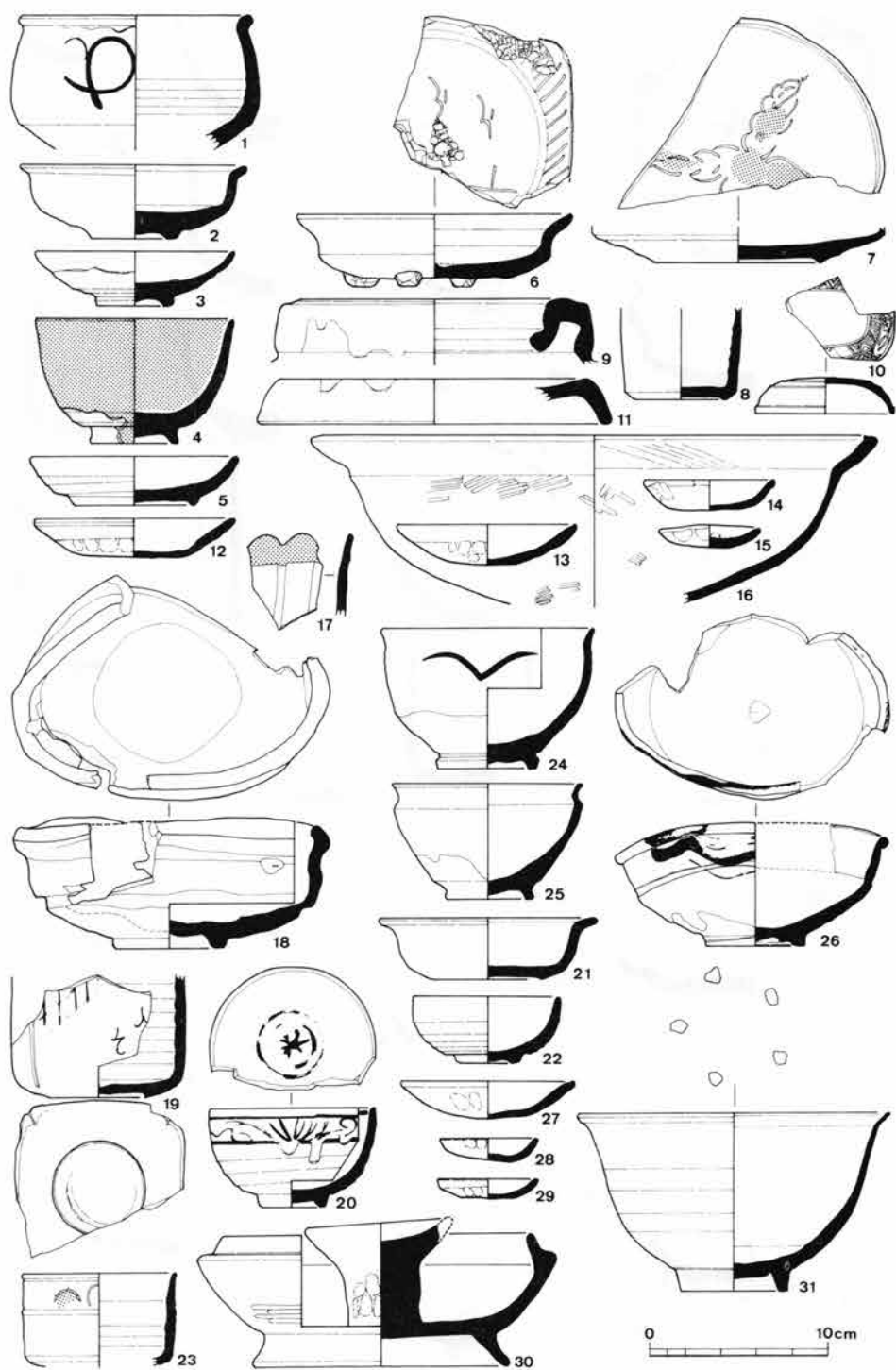
土坑 S K 12 からは、黄瀬戸大根文鉢(7)・鼠志野向付(6)などが出土している。この土坑からは、唐津沓形碗や水指(9)などの茶道具も出土しており、これらは、茶道に伴う高級食器とも考えられる。この土坑出土の国産陶器では、美濃瀬戸系のもものが肥前系のものに比べてやや優位を占める傾向がみられる。輸入陶磁器では、合子蓋(10)が出土している。いわゆる交趾香合の蓋であり、茶道に関係するものとみられる。

土坑 S K 16・S K 125 からも織部沓形碗(18)・絵唐津沓形碗(26)などの茶道具とみられるものや、高級食器類が出土している。これらの土坑出土の国産陶器では、肥前系のもものが優位に立つ傾向がある。肥前系の唐津碗・皿は、ほとんどが胎土目の目跡をもつが、砂目のものも数点含まれる。美濃瀬戸系のもものは、登窯Ⅰ期のもものとみられ、17世紀初頭頃に比定される。また、これらの土坑からは、朝鮮王朝陶磁器(31・51)が出土しているが、これについてはすでに紹介している^(注4)。

土坑 S K 105 からは、いわゆる初期伊万里の染付・青磁などの肥前磁器がまとまって出土している。17世紀中葉頃か。土坑 S K 26 からは、肥前の長吉谷窯産とみられる染付磁器や、いわゆる京焼風肥前陶器碗(75)などが出土している。17世紀後期頃か。

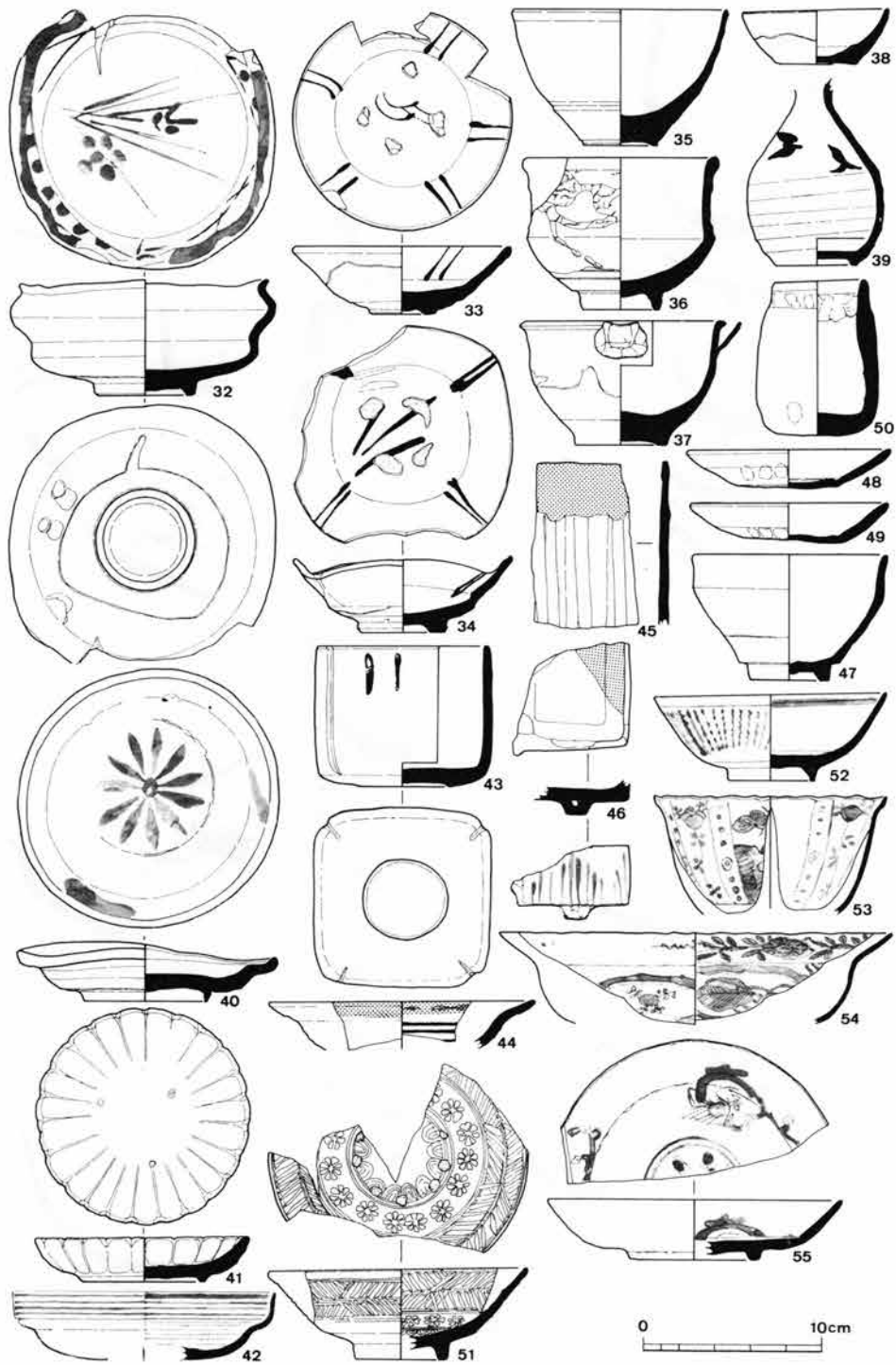
飾瓦(124)は、いわゆる金箔瓦である。数枚で一つの文様パターンを構成していたものであろう。土坑 S K 93 から出土した。

土坑 S K 63 からは、古銭が103枚出土した。すべて輸入銭であり、内容は付表3のとおりである。ほとんど中国の唐・宋・明銭であるが、朝鮮王朝の「朝鮮通寶」が1枚含まれている。棒状にさび付いており、もとは紐で一本に通されていたものか。



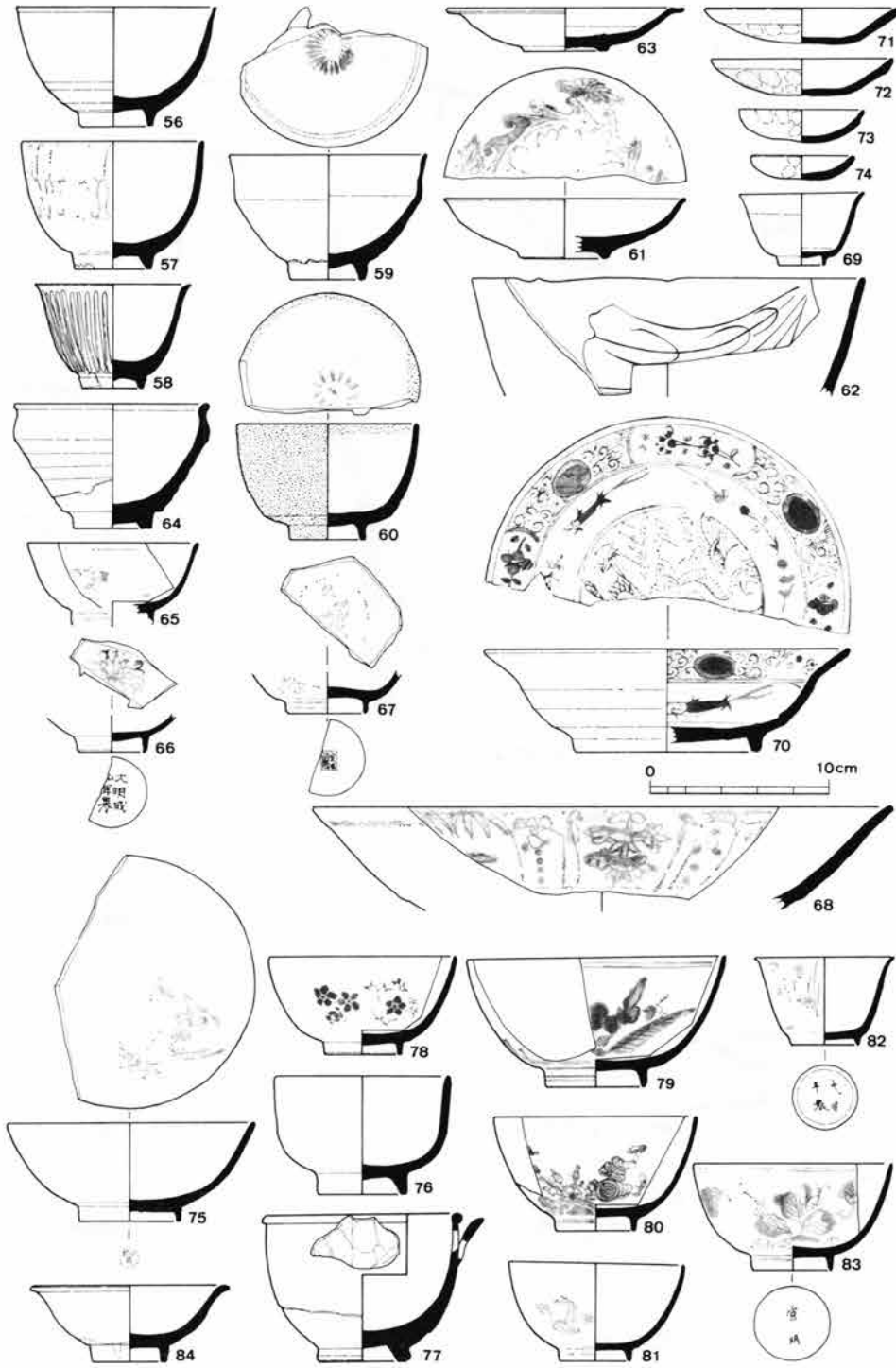
第58図 出土遺物実測図(1)

1~16. 土坑S K12 17~31. 土坑S K125



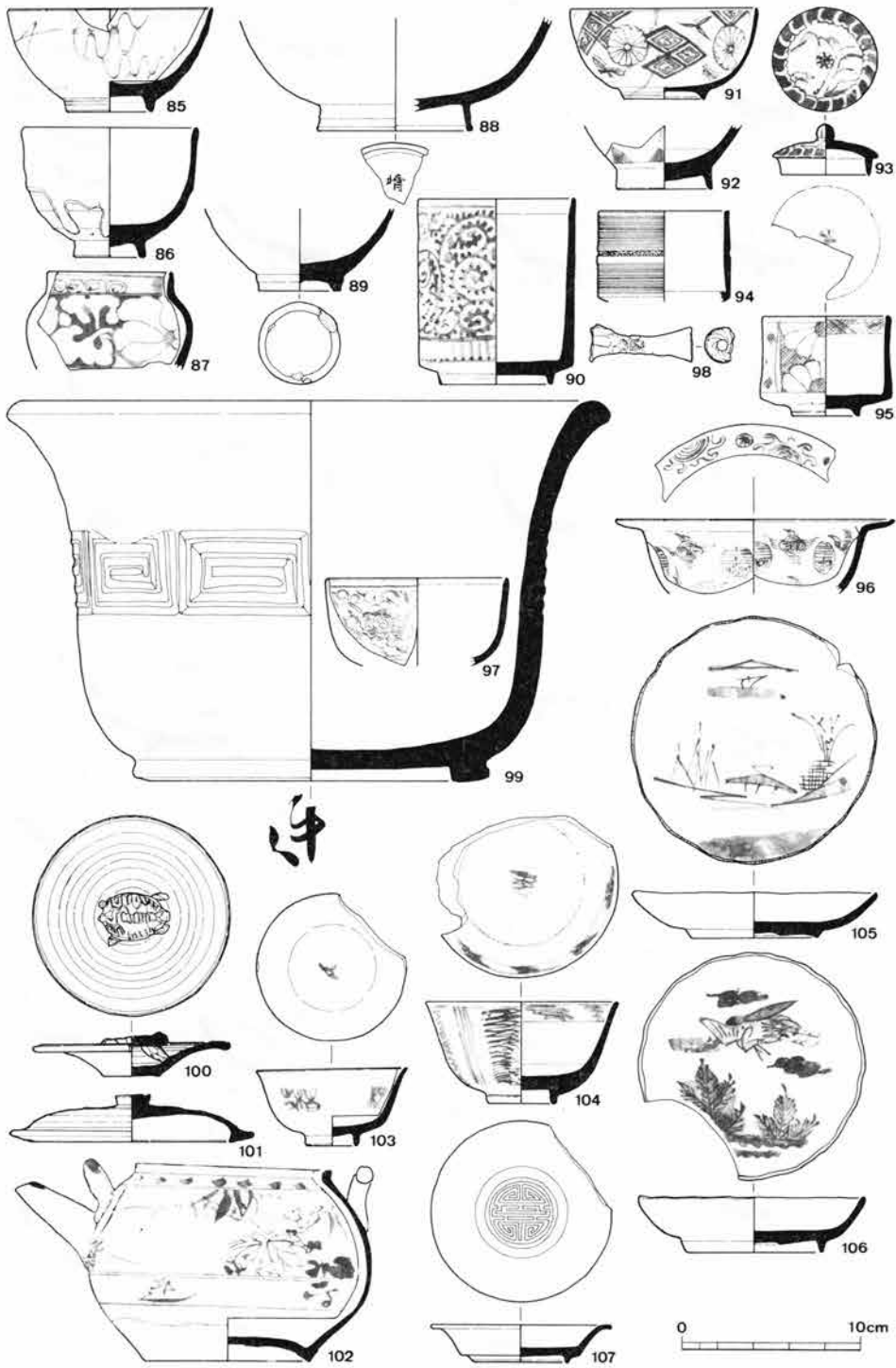
第59図 出土遺物実測図(2)

32~55. 土坑S K16



第60図 出土遺物実測図(3)

56~74. 土坑S K105 75~84. 土坑S K26



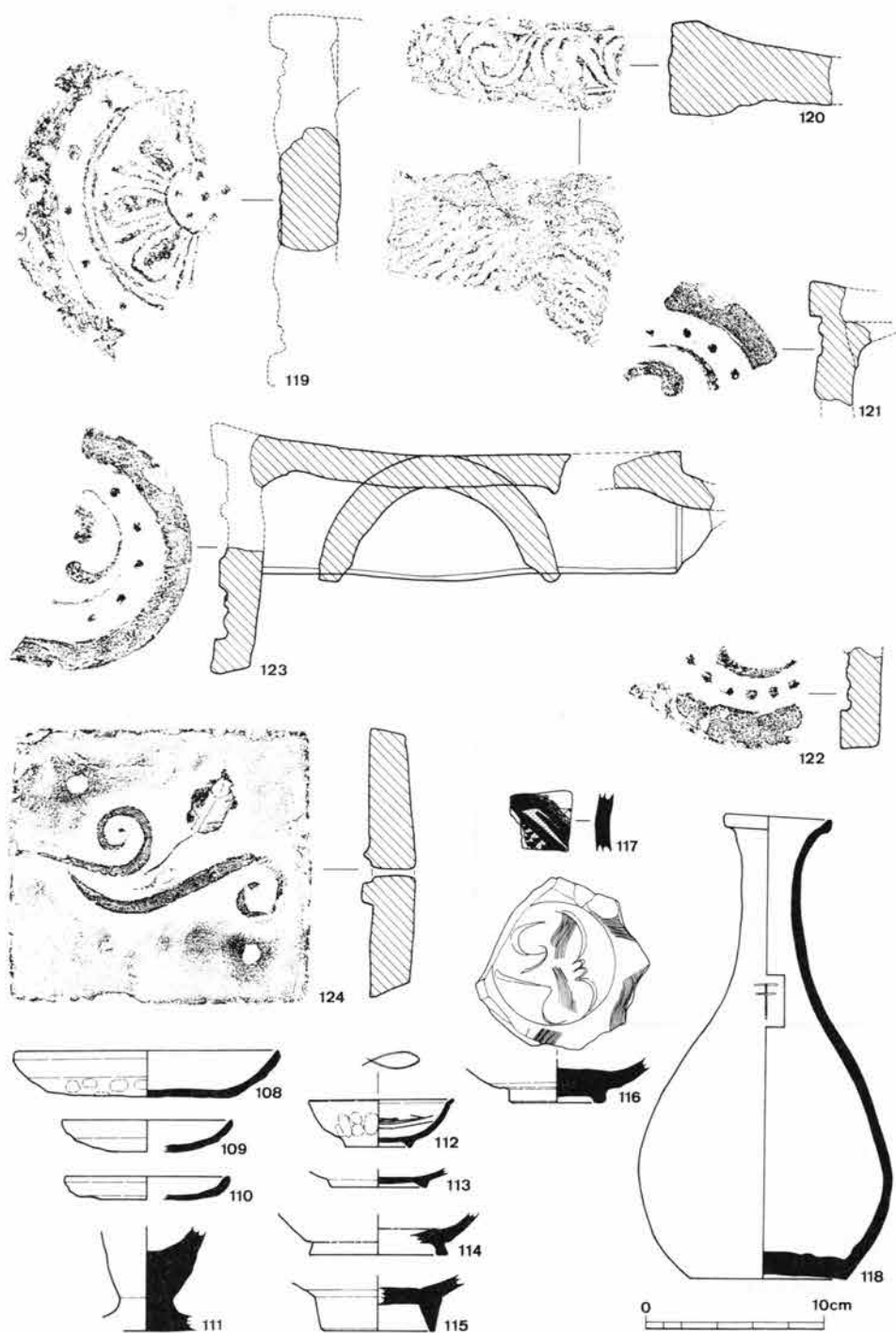
第61図 出土遺物実測図(4)

85~89. 土坑SK84

90. 土坑SK23

91~99. 土坑SK139

100~107. 井戸SE42



第62図 出土遺物実測図(5)

108~116・120. 土坑S K135 121. 土坑S K227 123・124. 土坑S K93
 117~119・122. 重機掘削土中

付表3 土坑S K63出土古銭一覧表

| 銭名 | 初 鋳 年 | 枚数 | 備 考 |
|------|-----------|-----|------|
| 開元通寶 | 621 (唐) | 8 | |
| 咸平元寶 | 995 (北宋) | 5 | |
| 景德元寶 | 1004 (北宋) | 2 | |
| 祥符元寶 | 1008 (北宋) | 5 | |
| 天聖元寶 | 1023 (北宋) | 4 | |
| 景祐元寶 | 1034 (北宋) | 2 | |
| 皇宋通寶 | 1039 (北宋) | 14 | 字体3種 |
| 至和元寶 | 1054 (北宋) | 1 | |
| 治平元寶 | 1064 (北宋) | 3 | |
| 熙寧元寶 | 1068 (北宋) | 5 | 字体2種 |
| 元豐通寶 | 1078 (北宋) | 13 | 字体2種 |
| 元祐通寶 | 1093 (北宋) | 2 | |
| 紹聖元寶 | 1094 (北宋) | 3 | |
| 元符通寶 | 1098 (北宋) | 2 | |
| 聖宋元寶 | 1101 (北宋) | 3 | 字体2種 |
| 大觀通寶 | 1107 (北宋) | 2 | |
| 政和通寶 | 1111 (北宋) | 2 | 字体2種 |
| 洪武通寶 | 1368 (明) | 2 | |
| 永樂通寶 | 1408 (明) | 2 | |
| 朝鮮通寶 | 1423 (朝鮮) | 1 | |
| 不 明 | | 22 | |
| 総 計 | | 103 | |

(2) 中世以前の遺物

中世以前の遺物としては、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦器などの土器、白磁・青磁などの輸入陶磁器、六古窯系の陶器、瓦などがある。しかし、整理作業はほとんど未着手の状態であり、提示できるものは少ない。

平安時代前期の緑釉瓦(119)は、西賀茂産とみられる。緑釉はほとんど剥落している。軒平瓦(120)は、讃岐産のもので、11世紀後半頃のものともみられる。土坑S K135から出土した。青釉陶器(117)は、白化粧した上に鉄釉で絵付けし、さらに青釉を施す。13世紀頃の中国磁州窯産とみられる。

5. 小 結

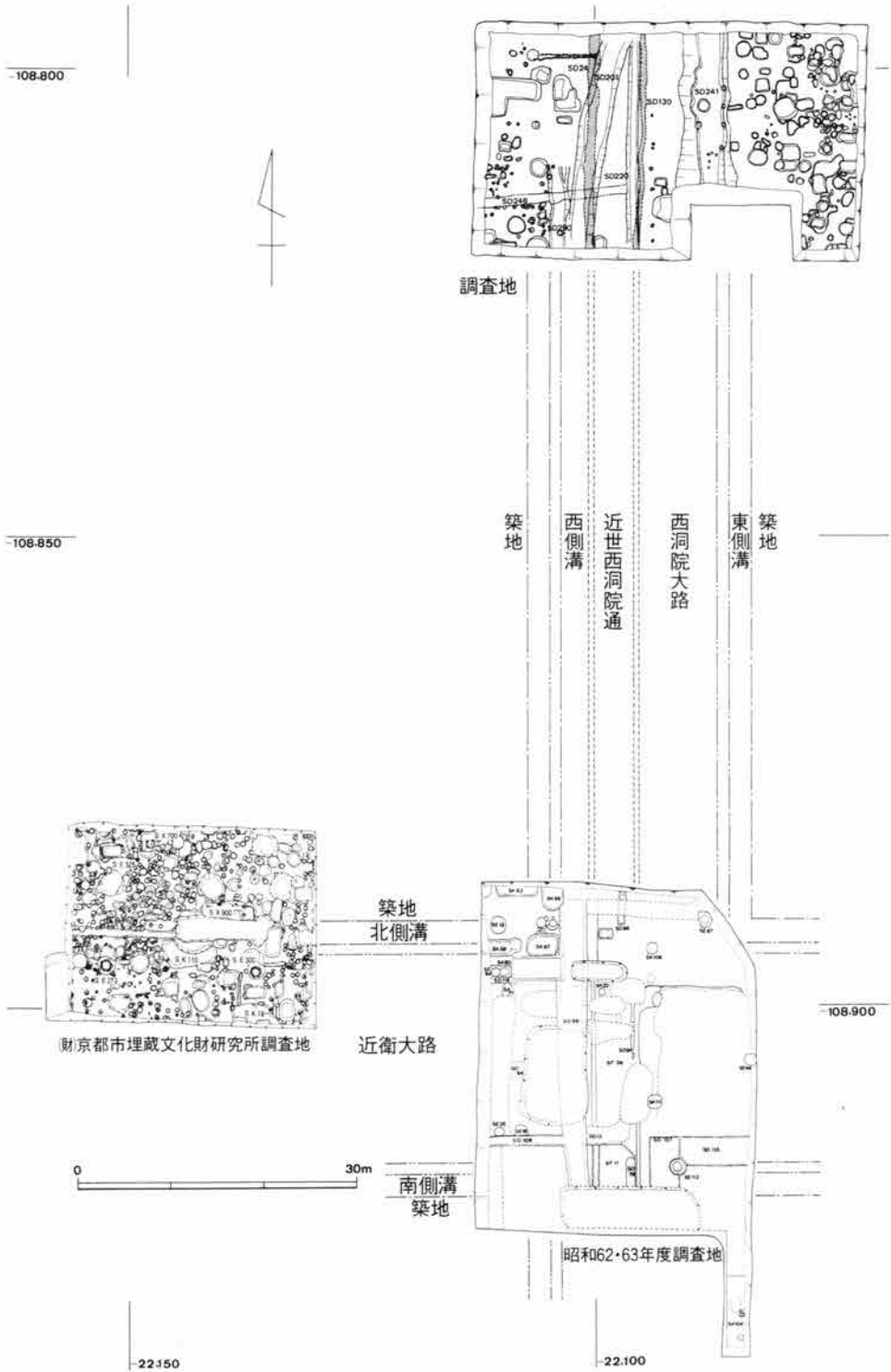
今回の調査では、調査地内に想定される西洞院大路の検出とその変遷過程の追及が、調査目的の一つであった。最後に、今回の調査地内で想定できる西洞院大路の変遷を概観して、小結としたい。

平安京造営時の西洞院大路の幅は、築垣の心々間で8丈(約24m)とされる。大路の

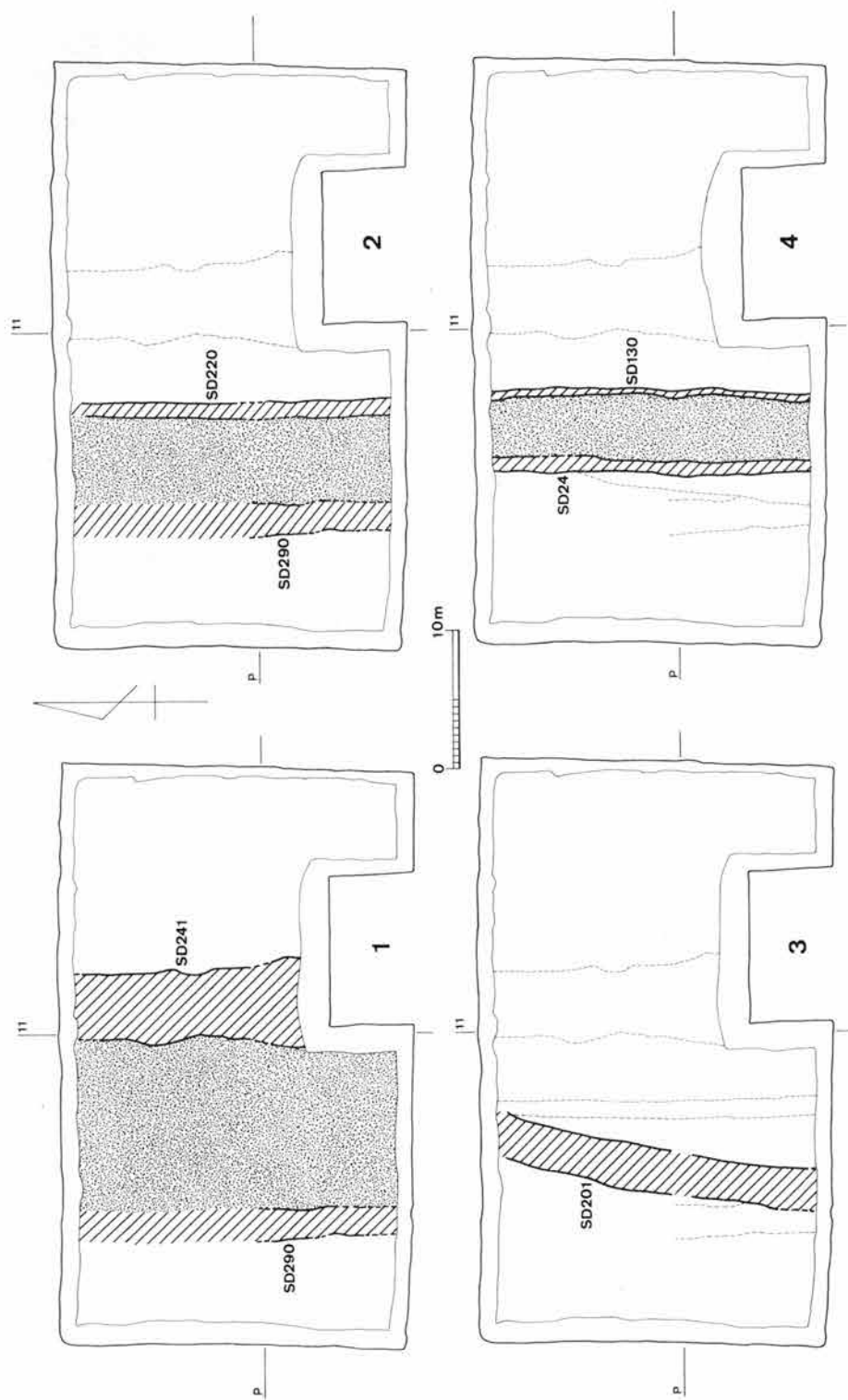
両側には、幅6尺の築垣、幅5尺の犬行、幅4尺の側溝が設けられる。築垣は心々で測るため半分の3尺として、これら両側の施設を除いた路面幅は56尺である。

(1) 1期

今回の調査で検出した西洞院大路の最古の状況は、11世紀ないしは12世紀のものである。東側溝S D241は、東肩部はほぼ想定線上に位置するが、西肩部は大きく路面側に張り出す。西側溝S D290は、西肩部はほぼ想定線上に位置するが、東肩部はわずかに路面側に張り出す。このため、路面幅は40尺前後となる。平安京造営時に比べて、路面幅が約70%に縮小している。しかし、これは、側溝幅が路面側に広がったためであり、全体的な西洞院大路の幅は、あまり変化がなかったものと考えられる。



第63図 調査地関係図



第64圖 西河院大路變遷圖

(2) 2期

溝S D241が廃棄され、それまでの路面の中央付近に溝S D220が造られ、東側溝になる。西側溝については、溝S D290が踏襲されていたものとみられる。この期の下限は15世紀頃と考えられるが、上限は不明である。路面幅は20尺前後となり、平安京造営時に比べて約36%に縮小する。

(3) 3期

2期の両側溝であった溝S D220や溝S D290が廃棄され、溝S D201が造られる。この期はほぼ16世紀頃と考えられ、いわゆる戦国時代である。この溝の東側には土塁の存在が想定され、東側は路面とはなり得なかったものと考えられる。溝の西側には通路の存在が想定できるが、この溝は、条坊の方向線に沿っておらず湾曲している。そのため、それまでの整然とした道路の面影はなかったものと考えられる。この溝は、応仁・文明の乱以後の乱世に、町衆が自衛のために構築した「構」の遺構と考えることもできよう。

(4) 4期

溝S D201が埋められた後、溝S D130・溝S D24が造られ、東西両側溝となる。この期は、西暦1600年を前後する時期から江戸時代末までである。東側溝は2期の溝S D220の位置とあまり変わらないが、西側溝はやや東側に寄る。路面幅は13尺余りとなり、平安京造営時の約23%の規模に縮小する。

この期には、付近に上級町衆が居住し繁栄していたことが、今回の出土遺物からもうかがえる。路面には盛土が繰り返される。この盛土中には焼土が3層あり、少なくとも3回の大火にみまわれたことが想定できる。

以上、西洞院大路の大まかな変遷を述べて、この概要報告を終わる。

(引原 茂治)

- 注1 橋本 稔・長田康平・塚本映子・田中あゆみ・川相依子・岩佐聖子・阿部秀樹・天岡昌代・長関達哉・山本紀子・島田典子・三倉一善・村山敏之・立川智康・須田 篤・阿部 恩・佐久田健司・古本由佳・小西有紀・平田知代・丹新千晶・見延信子・永井武雄
- 注2 平尾政幸・本弥八郎「平安京左京一条二坊」(『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1987
- 注3 伊野近富「平安京(左京近衛・西洞院辻)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第33冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注4 引原茂治「平安京左京一条三坊二町出土の朝鮮王朝陶磁器」(『京都府埋蔵文化財情報』第39号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

付表4 出土遺物一覧表

土坑SK12

| 種類 | 器形 | 番号 | 法量 (cm) | | | 備考 |
|--------|----|----|---------|-----|------|---------------------------|
| | | | 口径 | 高台径 | 器高 | |
| 肥前陶器 | 壺 | 1 | 12.8 | | | 絵唐津・塩筒形 |
| | 皿 | 2 | 12.8 | 4.8 | 4.15 | 唐津 |
| | 皿 | 3 | 11.2 | 4.3 | 3.0 | 唐津・胎土目 |
| 美濃瀬戸陶器 | 椀 | 4 | 11.0 | 4.8 | 7.05 | 灰釉・丸椀 |
| | 皿 | 5 | 11.8 | 6.6 | 2.8 | 志野・内面銅緑釉斑 |
| | 向付 | 6 | | | 4.0 | 鼠志野・角形 |
| | 鉢 | 7 | | 9.3 | | 黄瀬戸・大根文 |
| | 向付 | 8 | | 5.2 | | 志野 |
| 国産陶器 | 水指 | 9 | 10.5 | | | 伊賀または信楽 |
| 輸入陶器 | 合子 | 10 | | | 2.05 | 交趾・蓋・外面無釉 |
| 瓦器 | 蓋 | 11 | 19.4 | | 2.55 | |
| 土師器 | 皿 | 12 | 11.0 | | 2.2 | 内面ナデ・外面ユビオサエ |
| | 皿 | 13 | 9.8 | | 2.25 | 同上 |
| | 皿 | 14 | 7.2 | | 1.75 | 同上 |
| | 皿 | 15 | 5.6 | | 1.35 | 同上 |
| | 鍋 | 16 | 31.85 | | | 内外面ミガキ・内面口縁端部ハケ目のちナデ・線刻文字 |

土坑SK125

| | | | | | | |
|--------|----|----|---------------|-------------|--------------|--------------|
| 美濃瀬戸陶器 | 向付 | 17 | | | 5.3 (残存高) | 織部・筒形 |
| | 椀 | 18 | 16.3 (長径) | 6.4 (長径) | 7.2 | 織部黒・沓形 |
| | 向付 | 19 | 9.4 | 3.2 | | 志野・角筒形・隅入 |
| | 椀 | 20 | 9.2 | 3.7 | 5.5 | 志野 |
| | 皿 | 21 | 12.3 | 6.2 | 3.5 | 志野 |
| | 椀 | 22 | 8.1 | 3.5 | 3.85 | 志野 |
| | 向付 | 23 | 8.4 | | | 黄瀬戸 |
| 肥前陶器 | 椀 | 24 | 11.5 | 5.5 | 7.9 | 絵唐津 |
| | 椀 | 25 | 10.5 | 4.8 | 6.4 | 唐津・天目形 |
| | 椀 | 26 | 15.35 (長径) | 5.5 | 6.8 | 絵唐津・沓形・高台円 |
| 土師器 | 皿 | 27 | 9.6 | | 2.2 | 内面ナデ・外面ユビオサエ |
| | 皿 | 28 | 5.4 | | 1.35 | 同上 |

| 種類 | 器形 | 番号 | 法 量 (cm) | | | 備 考 |
|--------|----|----|----------|------|-----|---------------------------|
| | | | 口 径 | 高台径 | 器 高 | |
| 土師器 | 皿 | 29 | 5.6 | | 1.1 | 内面ナデ・外面ユビオサエ |
| 瓦 器 | | 30 | 17.1 | 14.0 | 8.5 | 外面ミガキ・内面ナデ高台及び受皿部貼り付け |
| 朝鮮王朝磁器 | 鉢 | 31 | 17.6 | 6.0 | 9.9 | 白磁・胎土目・円刻は高台径より大・漆継・目跡に漆詰 |

土坑 S K16

| | | | | | | |
|--------|-----|----|-------|------|--------------|----------------------|
| 肥前陶器 | 向付 | 32 | 14.05 | 5.6 | 6.5 | 絵唐津・角形・高台円 |
| | 皿 | 33 | 12.0 | 3.75 | 3.8 | 絵唐津・胎土目 |
| | 皿 | 34 | 12.3 | 4.6 | 4.25 | 絵唐津・砂目・円形に成形後角形に変形 |
| | 椀 | 35 | 11.8 | 3.8 | 7.7 | 唐津 |
| | 椀 | 36 | 10.4 | 4.2 | 8.4 | 蛇蝎唐津 |
| | 片口 | 37 | 11.6 | 5.0 | 7.0 | 唐津・胎土目 |
| | 杯 | 38 | 8.2 | 4.5 | 3.15 | 唐津・糸切底 |
| | 徳利 | 39 | | 4.4 | | 絵唐津 |
| 美濃瀬戸陶器 | 皿 | 40 | 14.7 | 6.8 | 3.4 | 鉄絵・銅緑釉斑 |
| | 皿 | 41 | 12.0 | 6.8 | 2.7 | 志野・菊花形 |
| | 向付 | 42 | 14.5 | | | 志野 |
| | 向付 | 43 | 9.4 | 4.8 | 7.85 | 志野・角筒形・隅入 |
| | 皿 | 44 | 14.8 | | | 織部 |
| | 向付 | 45 | | | 9.0 (残存高) | 鳴海織部・角筒形 |
| | 向付 | 46 | | | 2.8 | 絵織部・形状不明 |
| | 椀 | 47 | 10.8 | 4.45 | 7.05 | 天目形 |
| 土師器 | 皿 | 48 | 11.2 | | 2.2 | 内面ナデ・外面ユビオサエ |
| | 皿 | 49 | 11.0 | | 2.2 | 同 上 |
| | 塩 壺 | 50 | 5.1 | | 8.7 | 内面未調整・外面ユビオサエ後ナデ |
| 朝鮮王朝陶器 | 椀 | 51 | 14.5 | 5.0 | 5.25 | 粉青沙器(彫三島)・砂目・印花文・檜垣文 |
| 中国製磁器 | 椀 | 52 | 13.0 | 4.8 | 4.9 | 青花・高台内赤変 |
| | 椀 | 53 | 13.1 | | | 青花・薄手・口縁輪花 |
| | 鉢 | 54 | 22.0 | | | 青花・薄手・口縁輪花 |
| | 皿 | 55 | 16.4 | 7.2 | 3.5 | 青花 |

土坑 S K 105

| 種類 | 器形 | 番号 | 法量 (cm) | | | 備考 |
|--------|----|----|---------|------|------|-------------------|
| | | | 口径 | 高台径 | 器高 | |
| 肥前磁器 | 碗 | 56 | 11.2 | 4.2 | 6.7 | 伊万里青磁 |
| | 碗 | 57 | 10.05 | 4.3 | 7.2 | 伊万里染付・高台内露胎 |
| | 碗 | 58 | 8.8 | 3.4 | 5.8 | 伊万里白磁・高台内露胎鑄手 |
| | 碗 | 59 | 11.0 | 4.2 | 7.0 | 伊万里青磁染付・高台内露胎・天目形 |
| | 碗 | 60 | 10.0 | 4.2 | 6.6 | 伊万里鉄釉染付・高台内露胎 |
| | 皿 | 61 | 13.4 | 5.0 | 3.4 | 伊万里染付 |
| | 鉢 | 62 | 21.8 | | | 伊万里青磁・内面線刻文・口縁輪花 |
| 肥前陶器 | 皿 | 63 | 13.3 | 4.6 | 2.4 | 唐津折縁皿・砂目 |
| 美濃瀬戸陶器 | 碗 | 64 | 10.8 | 4.4 | 7.1 | 天目形 |
| 中国製磁器 | 碗 | 65 | 9.5 | | | 青花 |
| | 碗 | 66 | | 3.6 | | 青花・「大明成化年製」銘 |
| | 碗 | 67 | | 4.3 | | 青花・饅頭心型 |
| | 皿 | 68 | 32.4 | | | 青花 |
| | 碗 | 69 | 7.1 | 3.6 | 4.1 | 白磁 |
| | 鉢 | 70 | 20.3 | 10.0 | 5.85 | 呉須赤絵・高台砂粒付着・漆継 |
| 土師器 | 皿 | 71 | 10.7 | | 2.05 | 内面ナデ・外面ユビオサエ |
| | 皿 | 72 | 10.1 | | 2.1 | 同上 |
| | 皿 | 73 | 6.95 | | 1.85 | 同上 |
| | 皿 | 74 | 3.65 | | 1.45 | 同上 |

土坑 S K 26

| | | | | | | |
|------|----|----|------|-----|------|-------------------|
| 肥前陶器 | 碗 | 75 | 13.7 | 5.6 | 5.4 | 京焼風陶器 A 類・「小松吉」印銘 |
| | 碗 | 76 | 9.6 | 4.4 | 6.65 | 京焼風陶器 B 類 |
| | 片口 | 77 | 10.6 | 4.9 | 8.4 | 唐津 |
| 肥前磁器 | 碗 | 78 | 10.4 | 4.2 | 5.6 | 伊万里印判手染付 |
| | 碗 | 79 | 14.4 | 5.3 | 7.4 | 伊万里染付 |
| | 碗 | 80 | 11.2 | 5.4 | 6.35 | 伊万里染付 |
| | 碗 | 81 | 9.8 | 3.9 | 5.65 | 伊万里染付 |
| | 向付 | 82 | 7.85 | 3.7 | 5.0 | 伊万里染付・「大明年製」銘 |

| 種類 | 器形 | 番号 | 法 量 (cm) | | | 備 考 |
|------|----|----|----------|-----|------|-------------------|
| | | | 口 径 | 高台径 | 器 高 | |
| 肥前磁器 | 椀 | 83 | 11.1 | 4.3 | 5.95 | 伊万里染付・「宣明」銘・長吉谷窯? |
| | 椀 | 84 | 11.2 | 4.1 | 4.45 | 伊万里青磁・高台露胎 |

土坑 S K 84

| | | | | | | |
|-------|---|----|-------|-----|------|-----------------------------------|
| 肥前陶磁器 | 椀 | 85 | 11.35 | 4.6 | 5.85 | 伊万里染付磁器 |
| | 椀 | 86 | 9.7 | 3.8 | 7.2 | 唐津陶器 |
| | 壺 | 87 | 6.8 | | | 伊万里染付磁器 |
| 中国製磁器 | 鉢 | 88 | | 8.7 | | 総瑠璃・「靖」の刻銘・「大明嘉靖年製」銘の一部か・成形焼成とも上作 |
| 不明陶器 | 椀 | 89 | | 4.6 | | 半磁胎・高台に砂目の目跡・全面施釉・朝鮮王朝白磁か |

土坑 S K 23

| | | | | | | |
|------|------|----|-----|-----|------|---------------------|
| 肥前磁器 | 筒形容器 | 90 | 8.7 | 6.2 | 10.3 | 伊万里染付・内面口縁端部無釉・蓋付きか |
|------|------|----|-----|-----|------|---------------------|

土坑 S K 139

| | | | | | | |
|------|------|----|------|------|---------------|--------------|
| 肥前磁器 | 椀 | 91 | 10.4 | 4.4 | 5.2 | 伊万里染付・焼継 |
| | 椀 | 92 | | 5.2 | | 伊万里染付・広東椀 |
| | 蓋 | 93 | 4.9 | | 2.9 | 伊万里染付 |
| | 向付 | 94 | 7.3 | | | 伊万里白磁鉄釉・口紅 |
| | 向付 | 95 | 7.0 | 3.6 | 5.65 | 伊万里染付・見込五弁花 |
| | 鉢 | 96 | 15.4 | | | 伊万里染付 |
| | 椀 | 97 | 10.0 | | | 伊万里染付 |
| 京焼陶器 | 急須把手 | 98 | | | 5.75 (残存長) | 無釉・「道八」の印銘 |
| 瀬戸陶器 | 鉢 | 99 | 33.8 | 20.0 | 21.3 | 御深井・底部「伊」墨書銘 |

井戸 S E 42

| | | | | | | |
|------|----|-----|-------|-----|-------|------------|
| 国産陶器 | 蓋 | 100 | 11.05 | | 2.55 | 亀形つまみ・外面施釉 |
| | 蓋 | 101 | 11.0 | | 2.7 | 内面施釉 |
| | 土瓶 | 102 | 10.95 | 9.3 | 11.25 | 鉄絵・信楽か |
| 国産磁器 | 椀 | 103 | 8.45 | 2.8 | 4.35 | 染付 |
| | 椀 | 104 | 10.6 | 3.6 | 5.8 | 染付 |
| | 皿 | 105 | 13.8 | 7.0 | 2.7 | 染付・口紅・口縁波状 |
| | 皿 | 106 | 12.5 | 7.5 | 3.2 | 染付・口縁波状 |

| 種類 | 器形 | 番号 | 法 量 (cm) | | | 備 考 |
|------|----|-----|----------|-----|------|-----------|
| | | | 口 径 | 高台径 | 器 高 | |
| 国産磁器 | 皿 | 107 | 10.2 | 5.2 | 2.15 | 白磁・陰刻・寿字文 |

土坑 S K135

| | | | | | | |
|-------|-----|-----|------|-----|--------------|-------------|
| 土 師 器 | 皿 | 108 | 14.6 | | 2.75 | 口縁部二段ナデ |
| | 皿 | 109 | 9.6 | | 1.8 | 口縁部ナデ |
| | 皿 | 110 | 9.2 | | 1.35 | 口縁部二段ナデ |
| 灰釉陶器 | 不 明 | 111 | | | 6.0 (残存高) | 底部系切り・内外面ナデ |
| 瓦 器 | 椀 | 112 | 8.2 | 3.6 | 2.8 | 内面ミガキ |
| | 椀 | 113 | | 5.3 | | 内面ミガキ |
| 緑釉陶器 | 椀 | 114 | | 7.6 | | 貼付高台・見込みに沈線 |
| 中国製磁器 | 椀 | 115 | | 6.0 | | 白磁・V類 |
| | 椀 | 116 | | 5.4 | | 青磁 |

包 含 層

| | | | | | | |
|------|-----|-----|-----|-----|------------|----------------------|
| 輸入陶器 | 不 明 | 117 | | | 器 厚 0.8 | 白化粧上に鉄絵を施し青釉を施釉・磁州窯か |
| 備前陶器 | 徳 利 | 118 | 5.9 | 8.8 | 26 | 頸部と胴部の境に「干」の窯印 |

瓦

| 番 号 | 器 形 | 法 量 (cm) | 出 土 地 | 備 考 |
|-----|------|---------------------------------|-----------|------------------------------|
| 119 | 軒 丸 | 復原径 20.6 | 包 含 層 | 緑釉 西賀茂産 |
| 120 | 軒 平 | 瓦当厚 5.0 | 土坑 S K135 | 讃岐産 |
| 121 | 軒 丸 | 復原径 13.4 | 土坑 S K227 | 金箔瓦 |
| 122 | 軒 丸 | 復原径 14.2 | 包 含 層 | 金箔瓦 |
| 123 | 軒 丸 | 復原径 14.0 残存長 28.2 | 井戸 S E93 | 金箔瓦 |
| 124 | 方形飾瓦 | た て 15.0 よ こ 17.0 厚 さ 2.6 | 井戸 S E93 | 金箔瓦 唐草文もしくは桐文の一部か 釘穴 3 |

圖 版





(1) 調査前風景 (南から)



(2) 調査前風景 (北から)



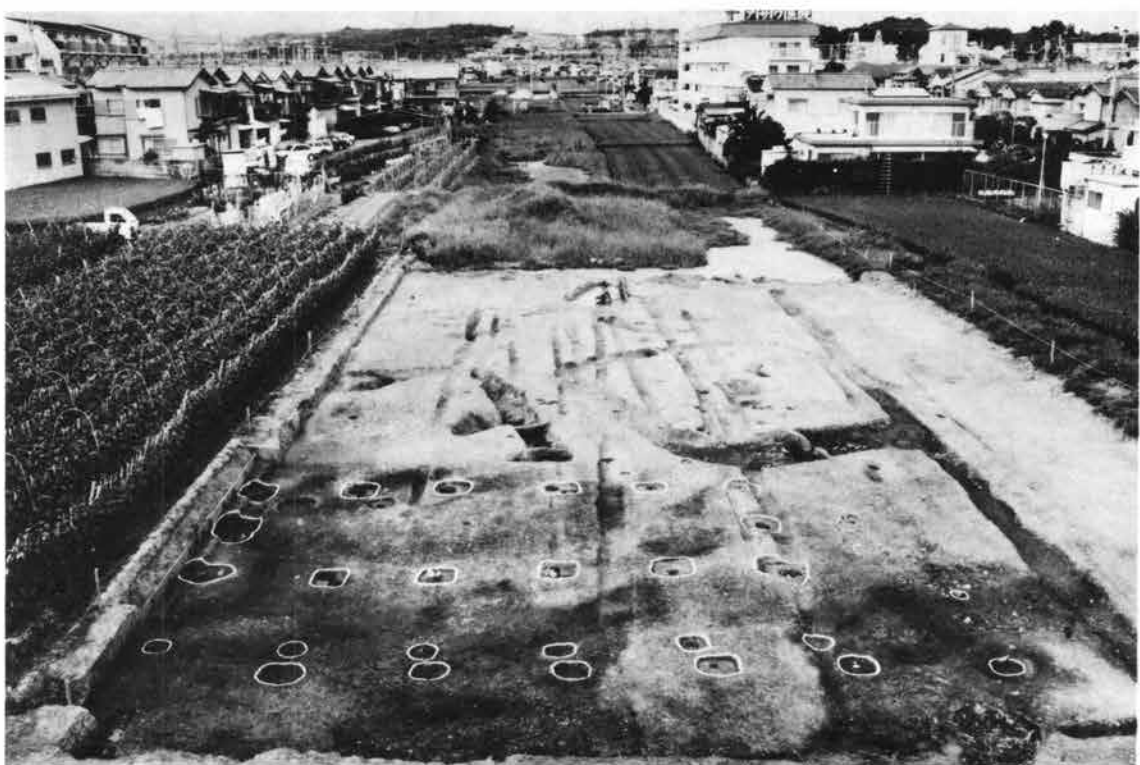
(1) Aトレンチ全景 (南から)



(2) Aトレンチ・中世溝群 (北から)



(1) Aトレンチ・西二坊大路東側溝SD28501 (南から)



(2) Aトレンチ・掘立柱建物跡SB28511・柵列SA28512 (南から)



(1) Aトレンチ・二条条間大路南側溝SD28502ほか(南から)



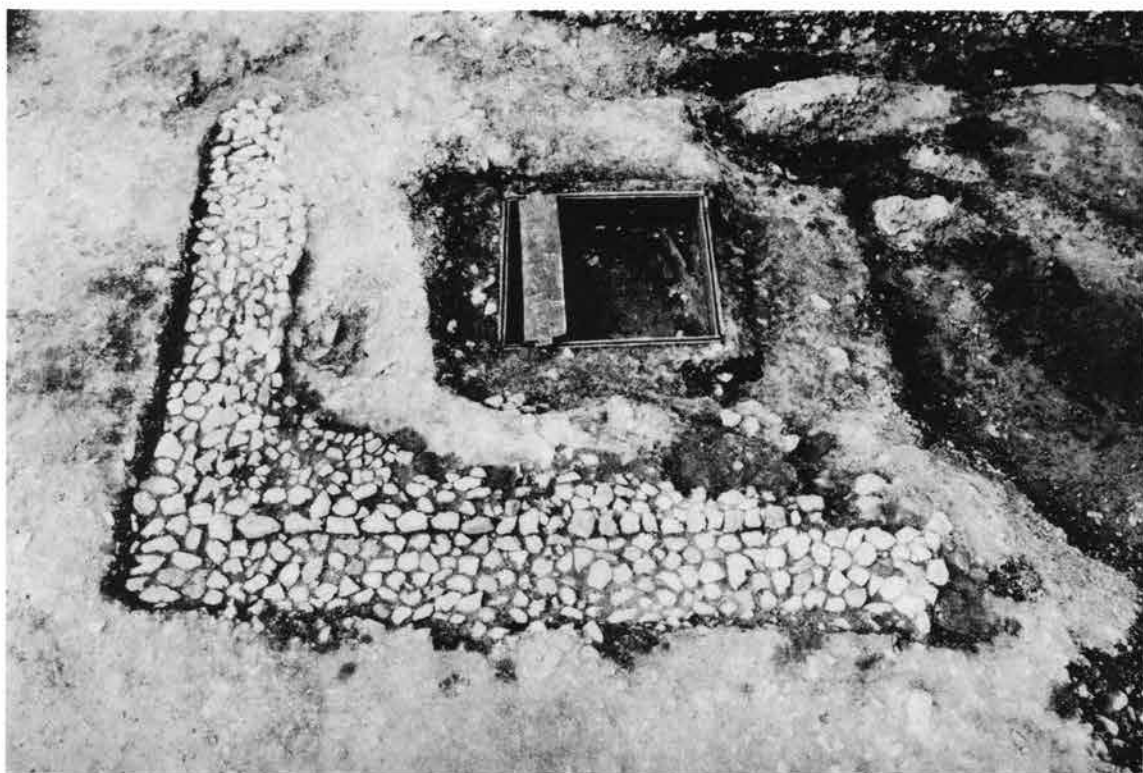
(2) Aトレンチ・二条条間大路南側溝SD28502(西から)



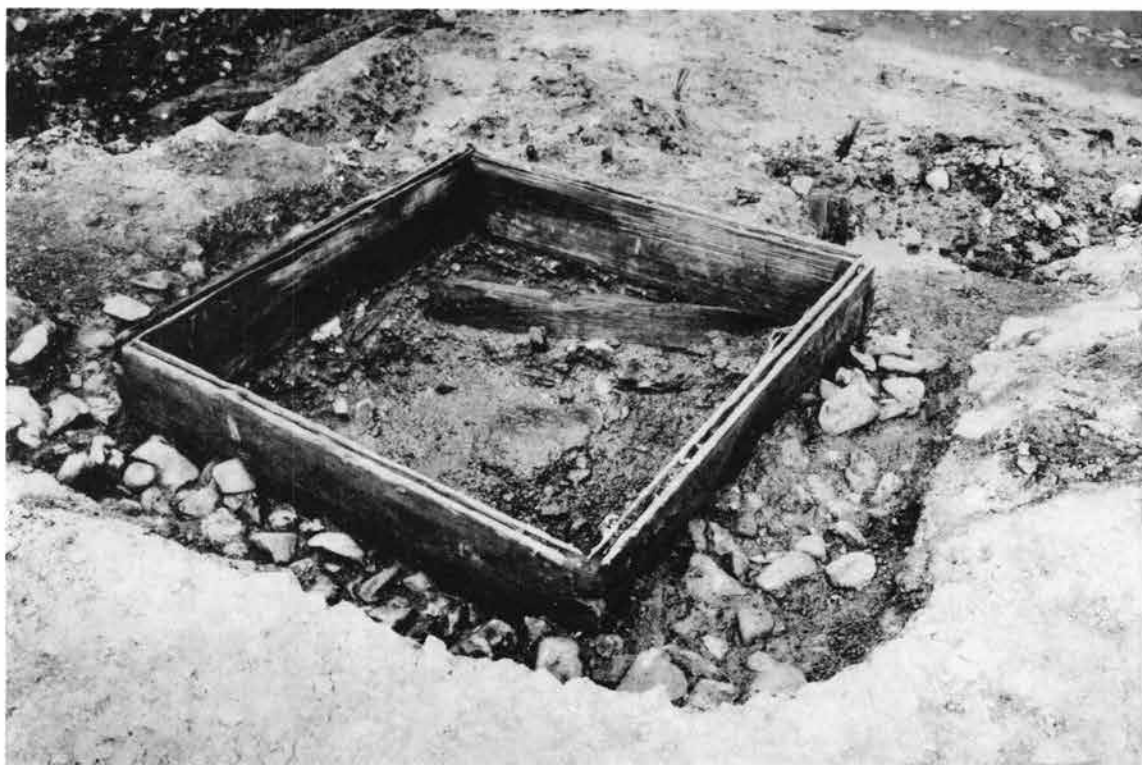
(1) Cトレンチ・二条条間小路南側溝SD28502 (東から)



(2) E1トレンチ・丸太敷き路盤改良遺構SX31037 (西から)



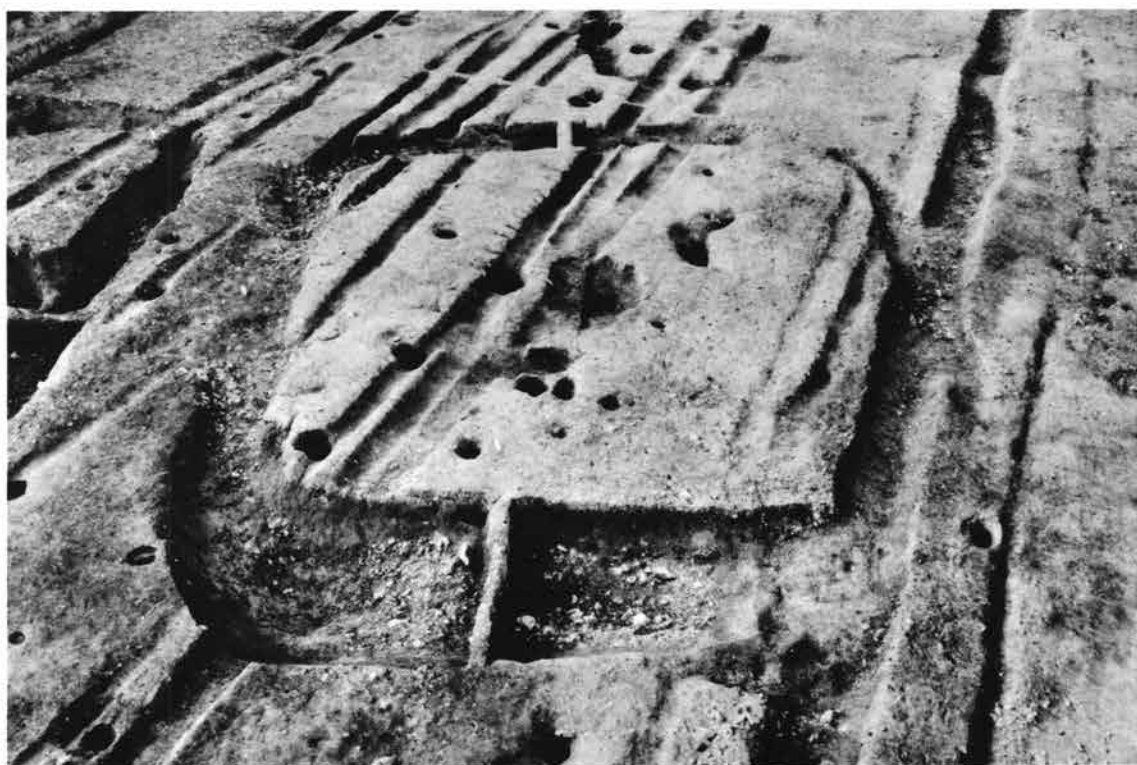
(1) Cトレンチ・石敷き溝が伴う井戸SE31035 (南から)



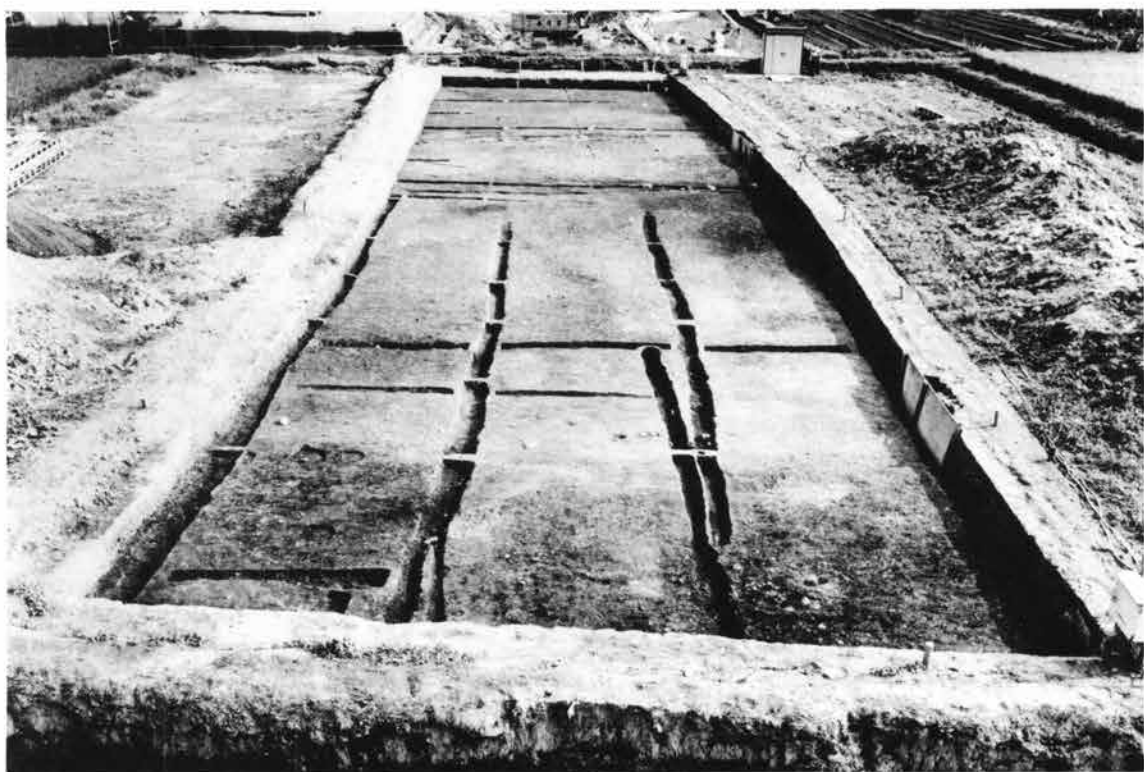
(2) Cトレンチ・SE31035井籠組みの木枠 (南東から)



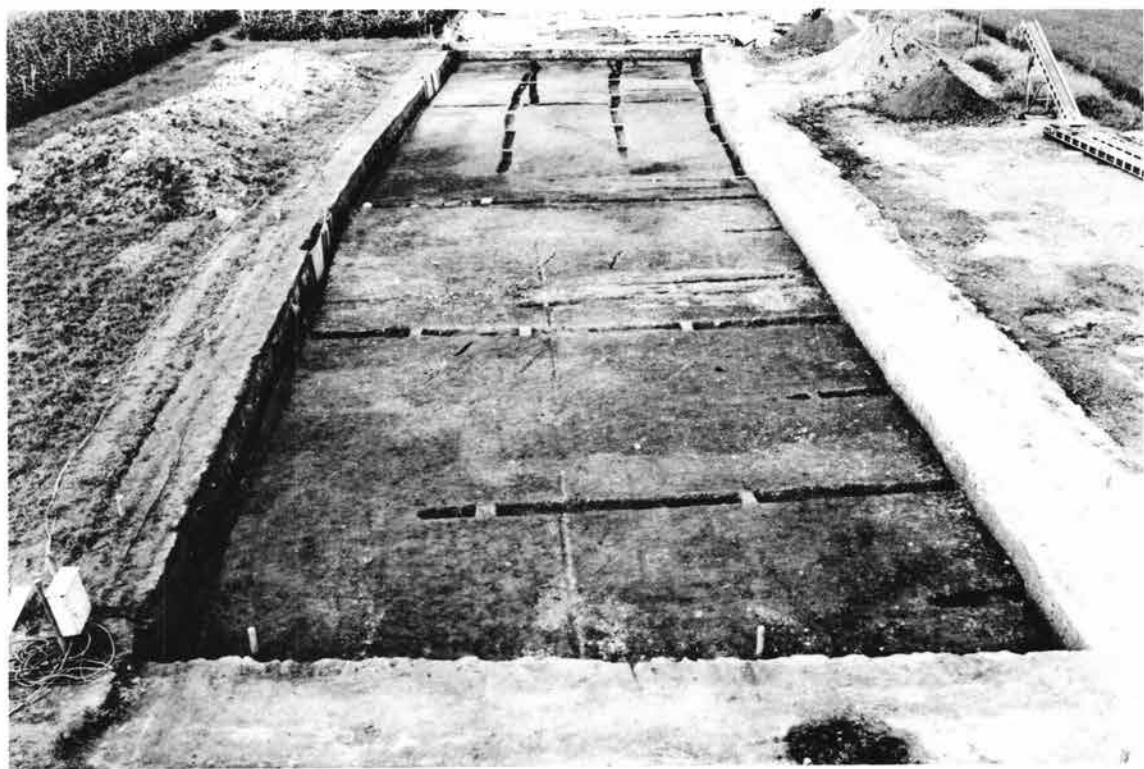
(1) Aトレンチ下層・方形周溝墓1 (南から)



(2) Aトレンチ下層・方形周溝墓2 (南から)



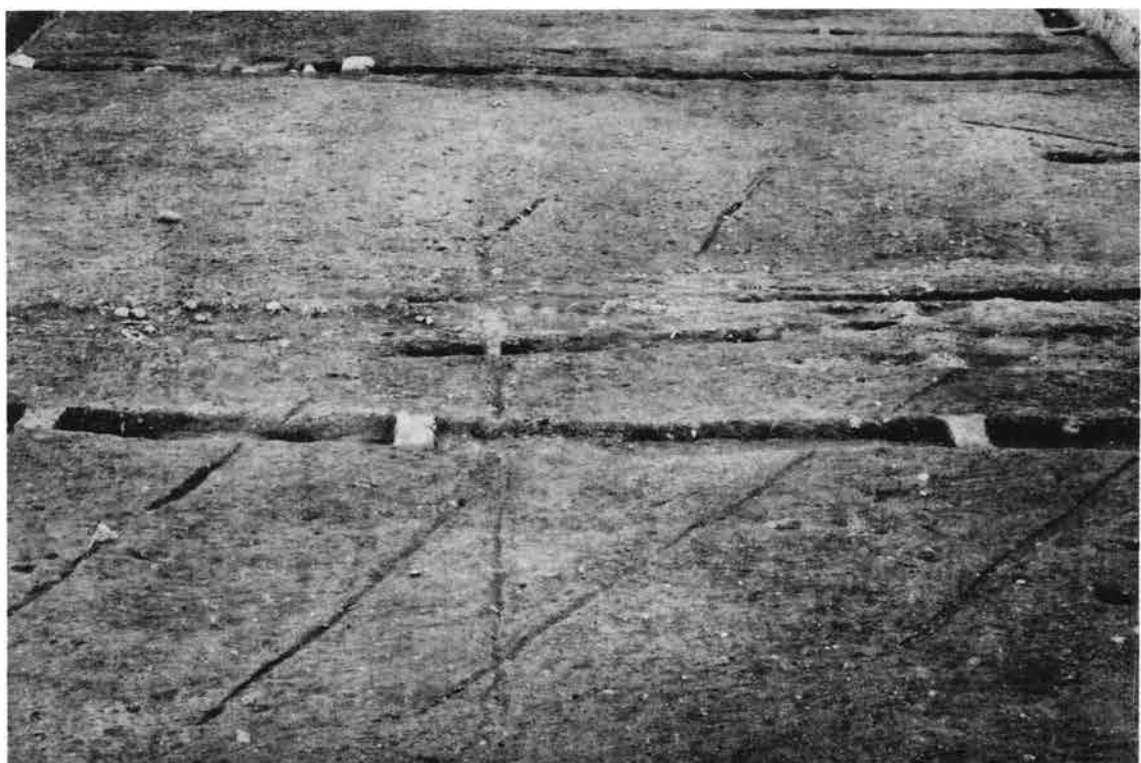
(1) Bトレンチ東半部 (北から)



(2) Bトレンチ東半部 (南から)



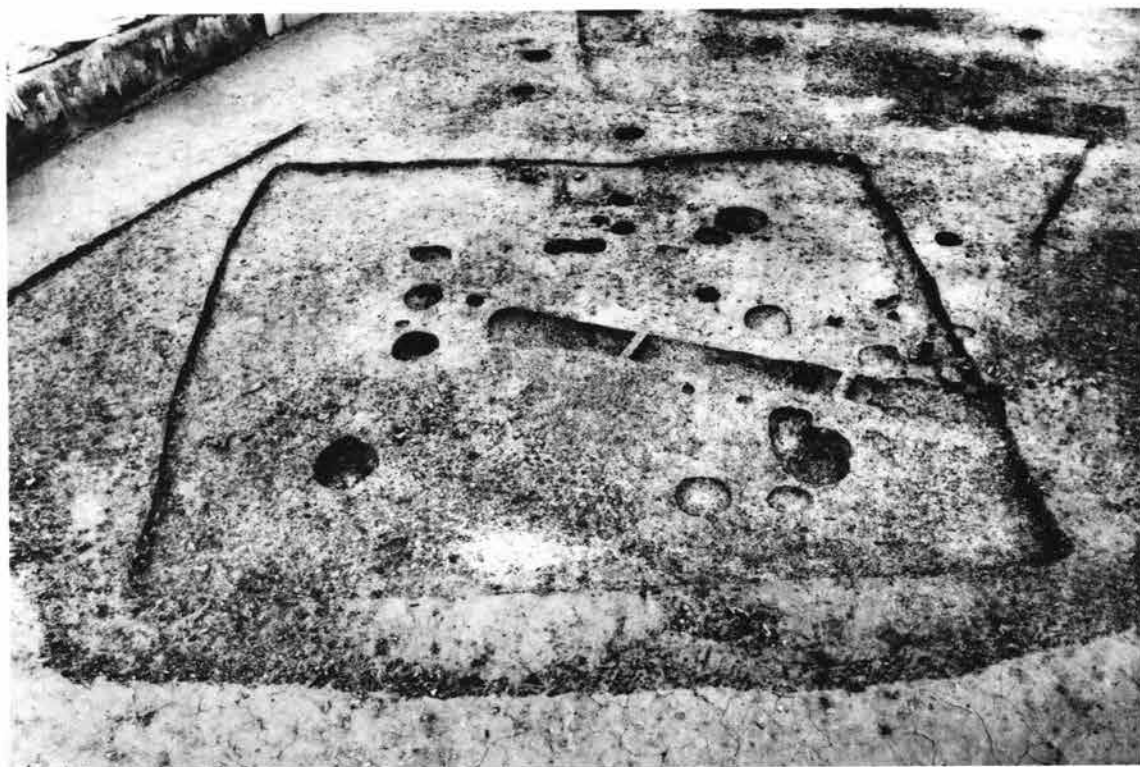
(1) Bトレンチ・西二坊大路東側溝SD28501 (南から)



(2) Bトレンチ・西二坊大路路面上の轍群 (南から)



(1) Bトレンチ下層・竪穴式住居跡群SH31023ほか（南から）



(2) Bトレンチ下層・竪穴式住居跡SH31030（南から）



(1) Bトレンチ下層・竪穴式住居跡群SH31025ほか(北から)



(2) Bトレンチ下層・竪穴式住居跡SH31026(南から)



(1) Dトレンチ上層遺構 (南から)



(2) Dトレンチ下層遺構 (南から)



(1) Dトレンチ・西二坊大路を横断する轍群SX31010 (西から)



(2) Dトレンチ下層・土坑SK31015 (南から)



(1) Gトレンチ上層遺構 (南から)



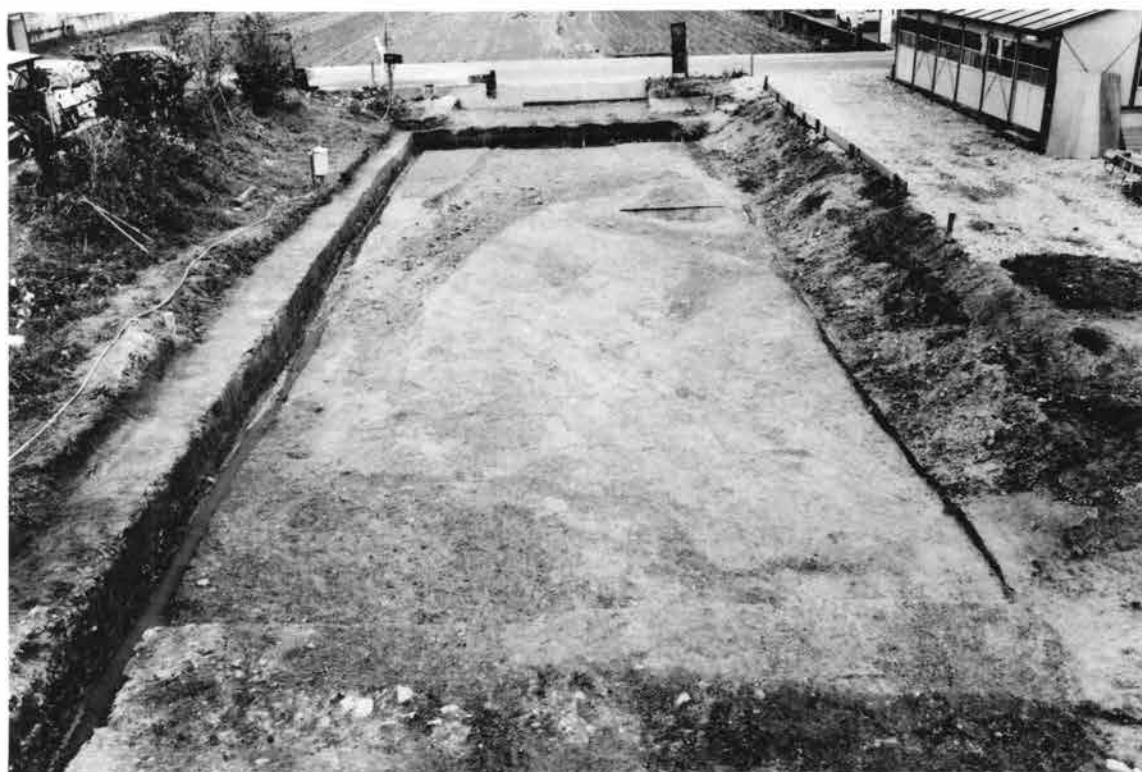
(2) Gトレンチ下層遺構 (南から)



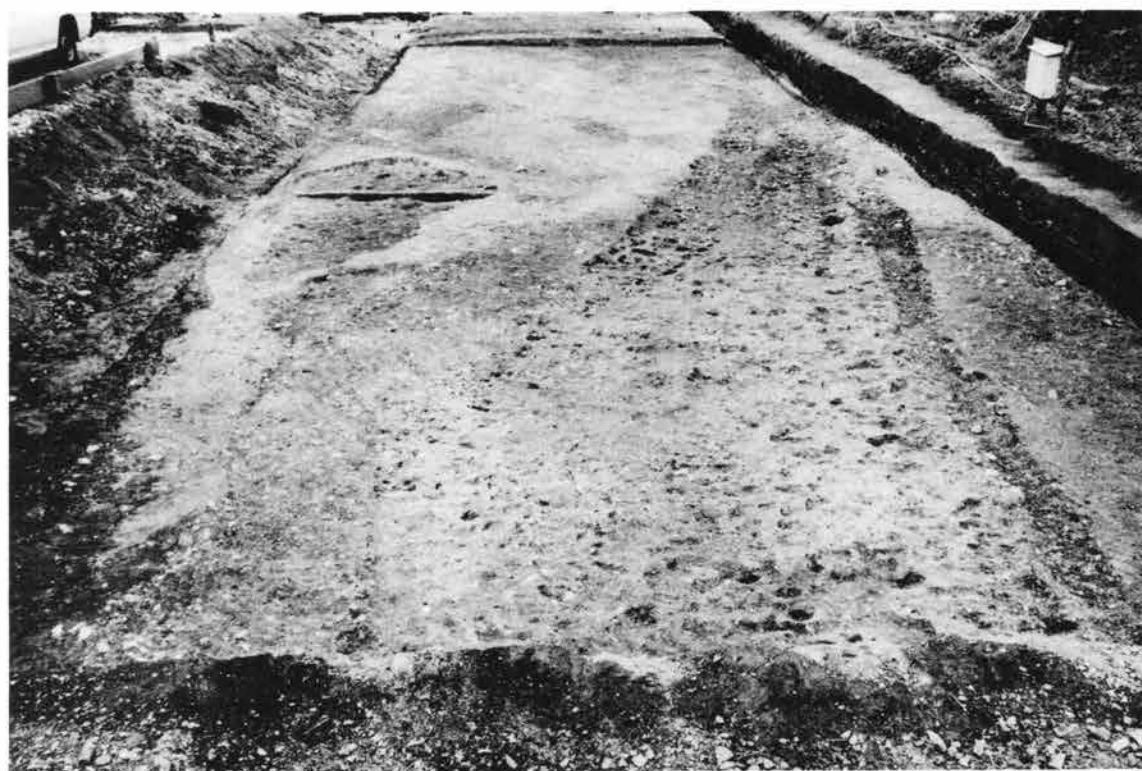
(1) Fトレンチ北部全景・西二坊大路東側溝SD33501ほか（南から）



(2) Fトレンチ北部・西二坊大路東側溝SD33501（北から）



(1) E2トレンチ北部全景 (南から)



(2) E2トレンチ北部全景 (北から)



(1) E2トレンチ・西二坊大路を横断する溝SD33503 (西から)



(2) E2トレンチ南部全景 (手前がSD33503) (北から)



(1) Fトレンチ南部全景・自然流路SD33516ほか（北から）



(2) Fトレンチ南壁断面



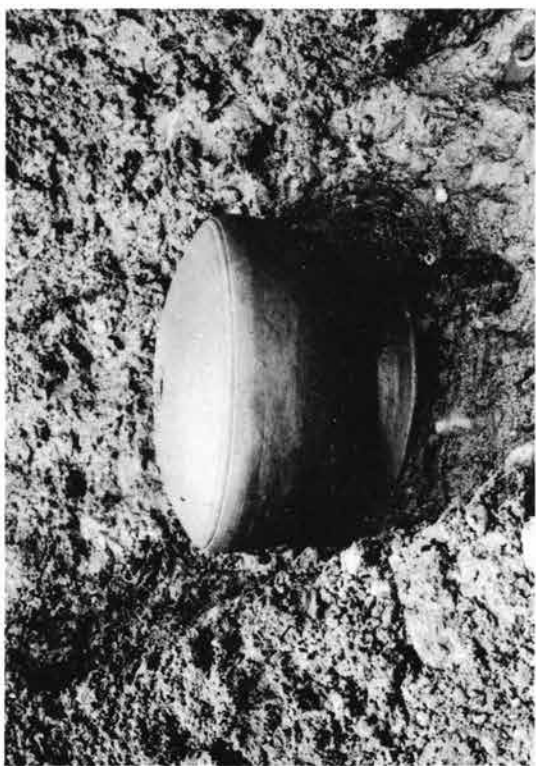
(1) 遺物出土状況・野井戸1の軒丸瓦



(2) 遺物出土状況・S D 28509上層出土の齋串



(3) 遺物出土状況・SD28509上層出土の齋串



(4) 遺物出土状況・SD31012出土の壺



(1) 掘立柱建物跡SB28511・柱穴 (P-5)



(2) 掘立柱建物跡SB28511・柱穴 (P-13)



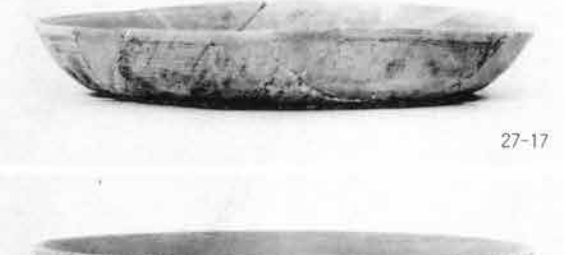
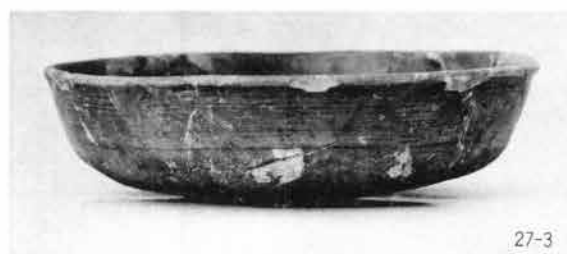
(3) 掘立柱建物跡SB28511・柱穴 (P-10)



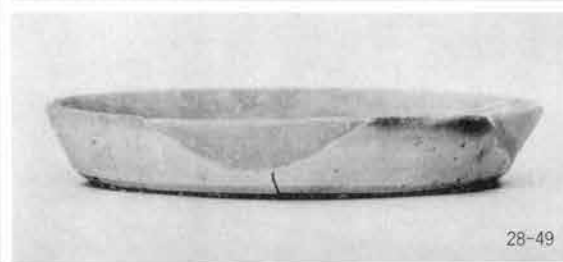
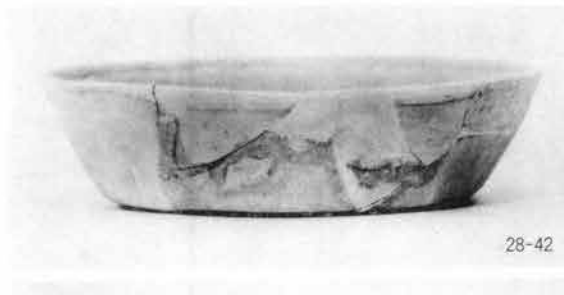
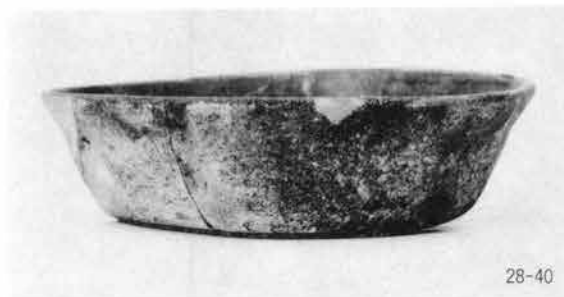
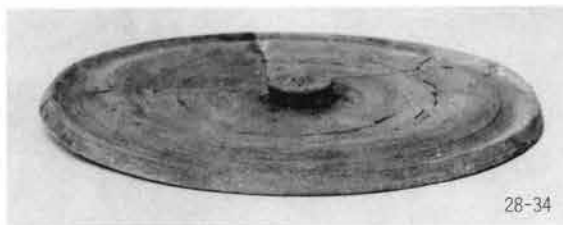
(4) 掘立柱建物跡SB28511・柱穴 (P-11)



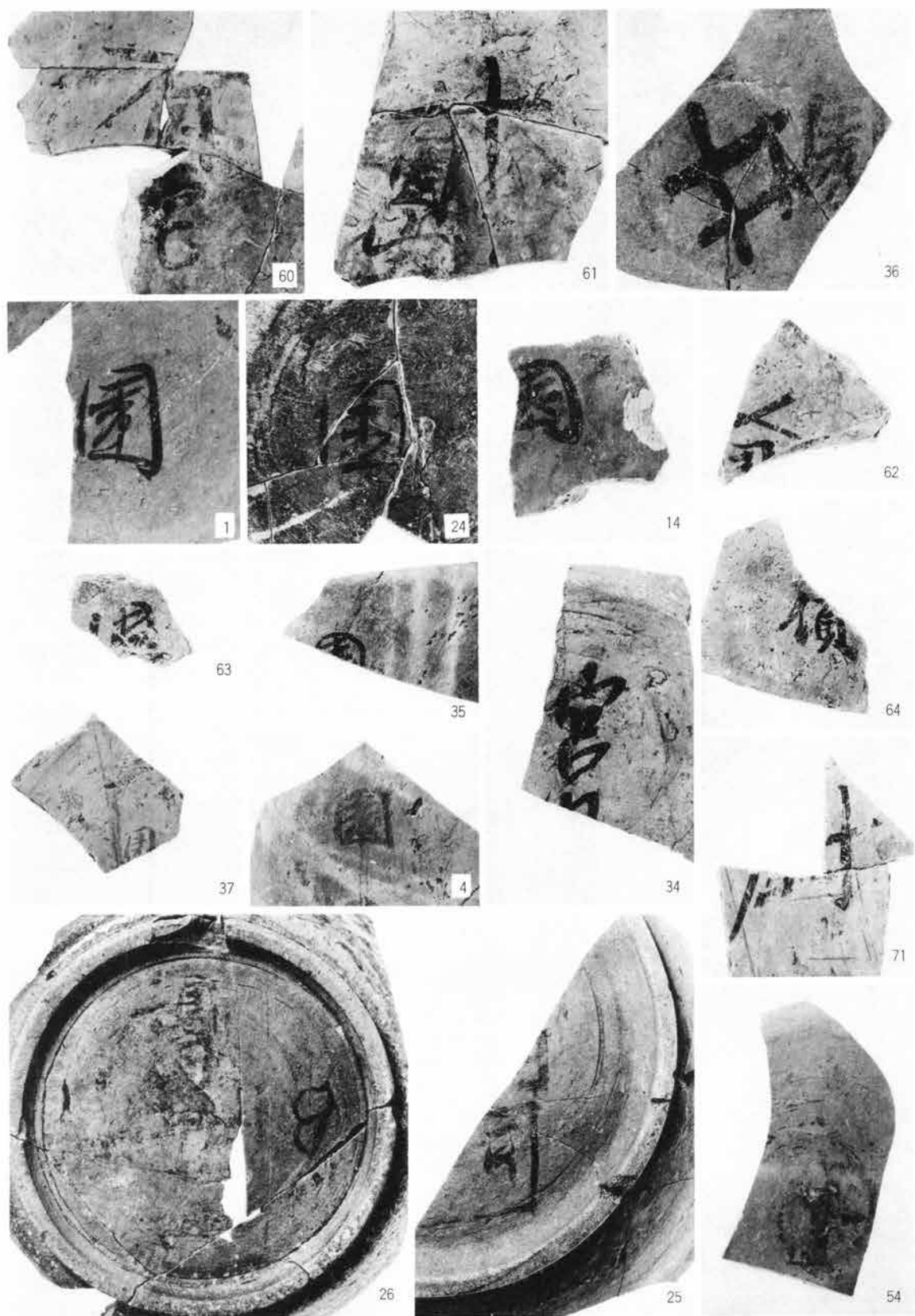
出土遺物(1) 土器 (A・B・D・Gトレンチ出土)



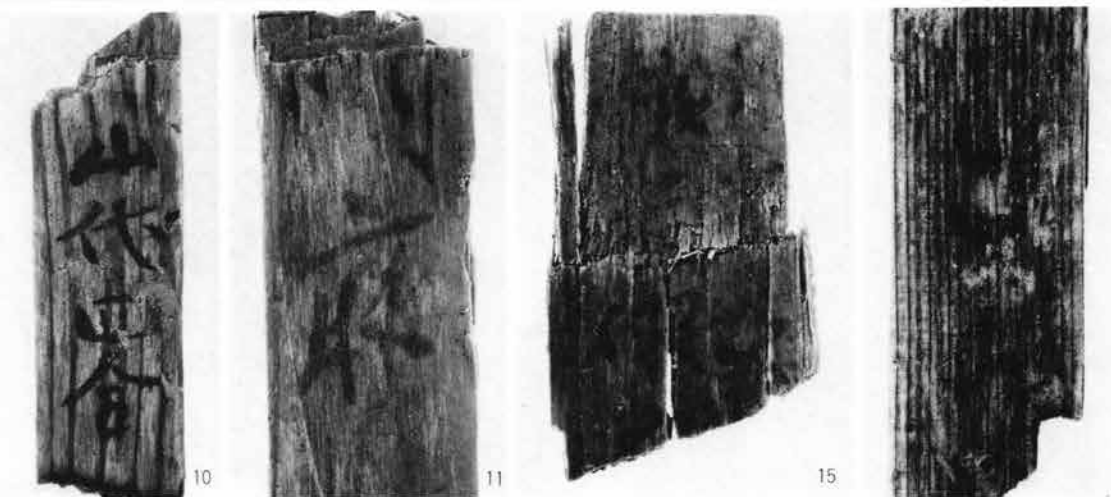
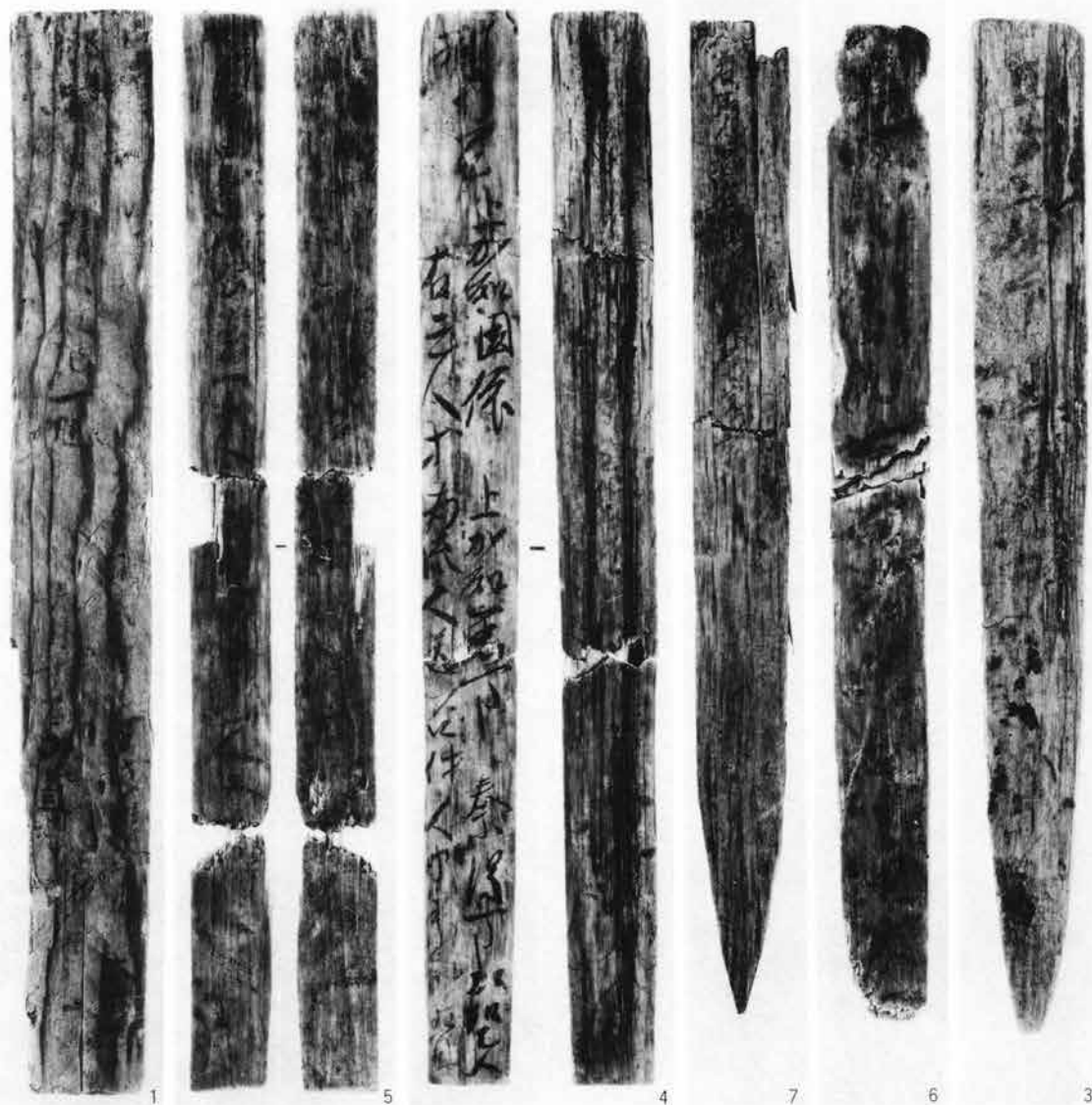
出土遺物(2) 土器 (流路跡 S D28509出土)



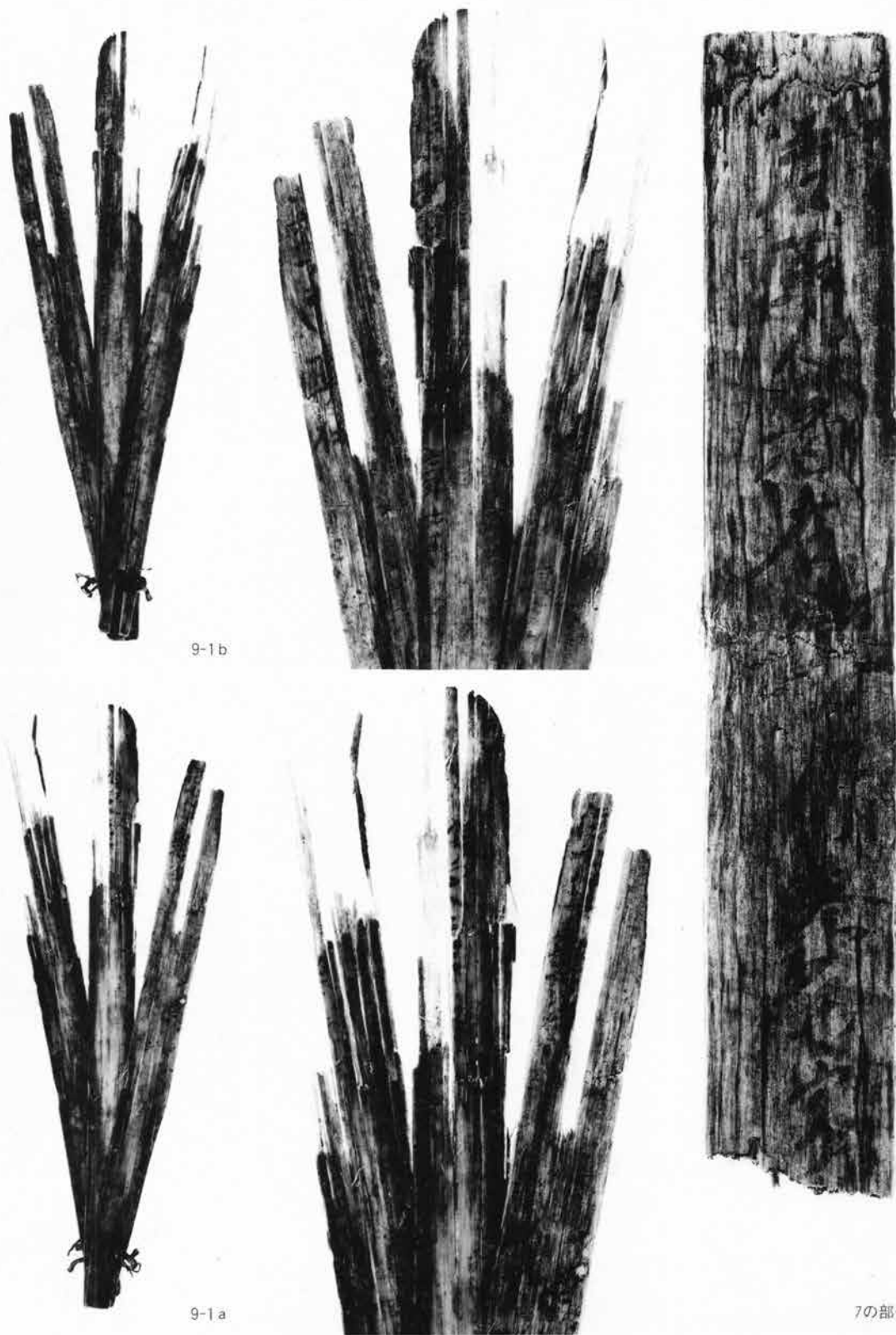
出土遺物(3) 土器 (流路跡 S D28509出土)



出土遺物(4) 墨書土器 (流路跡S D28509出土)



出土遺物(5) 木簡 (流路跡 S D 28509出土ほか)

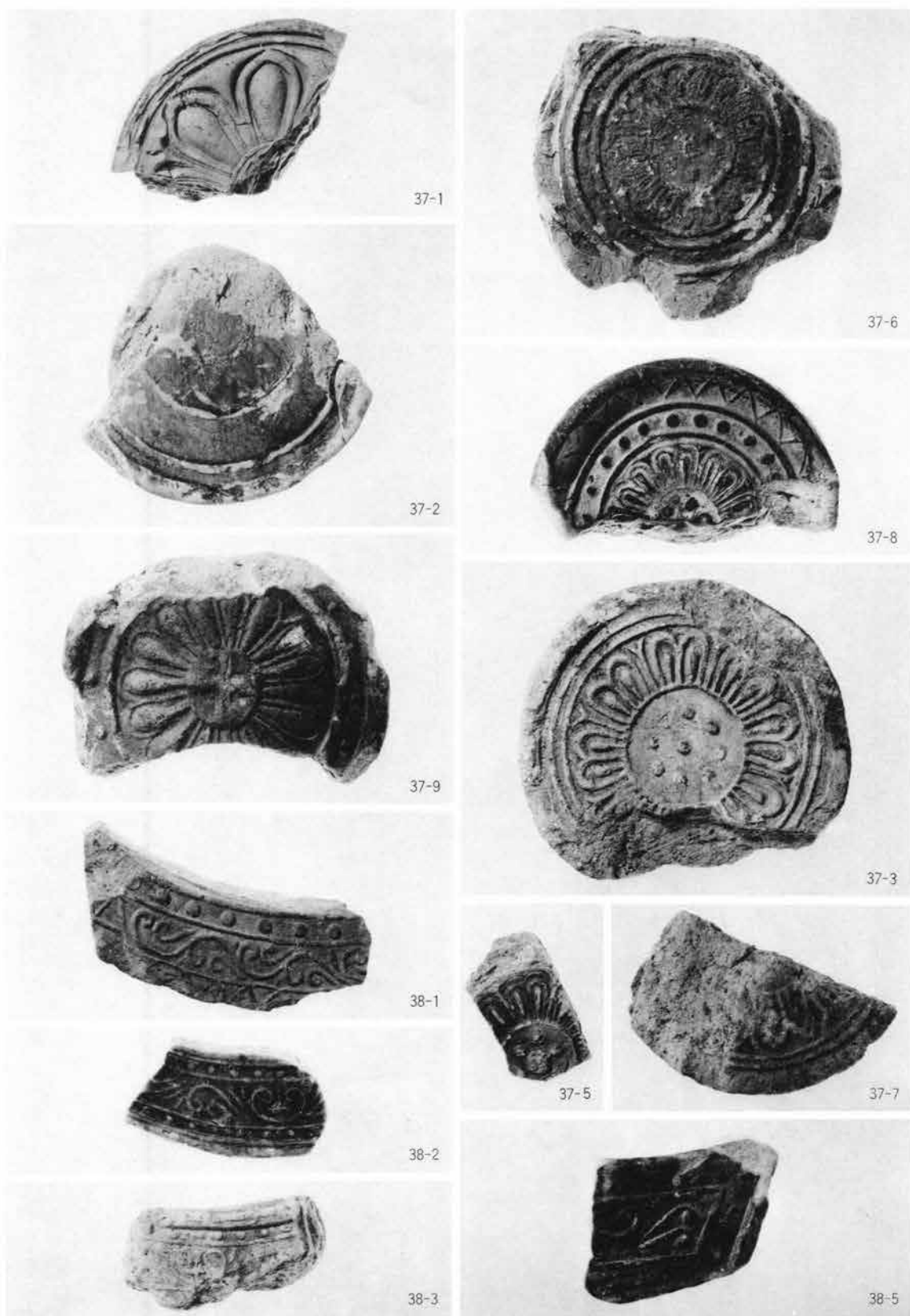


9-1b

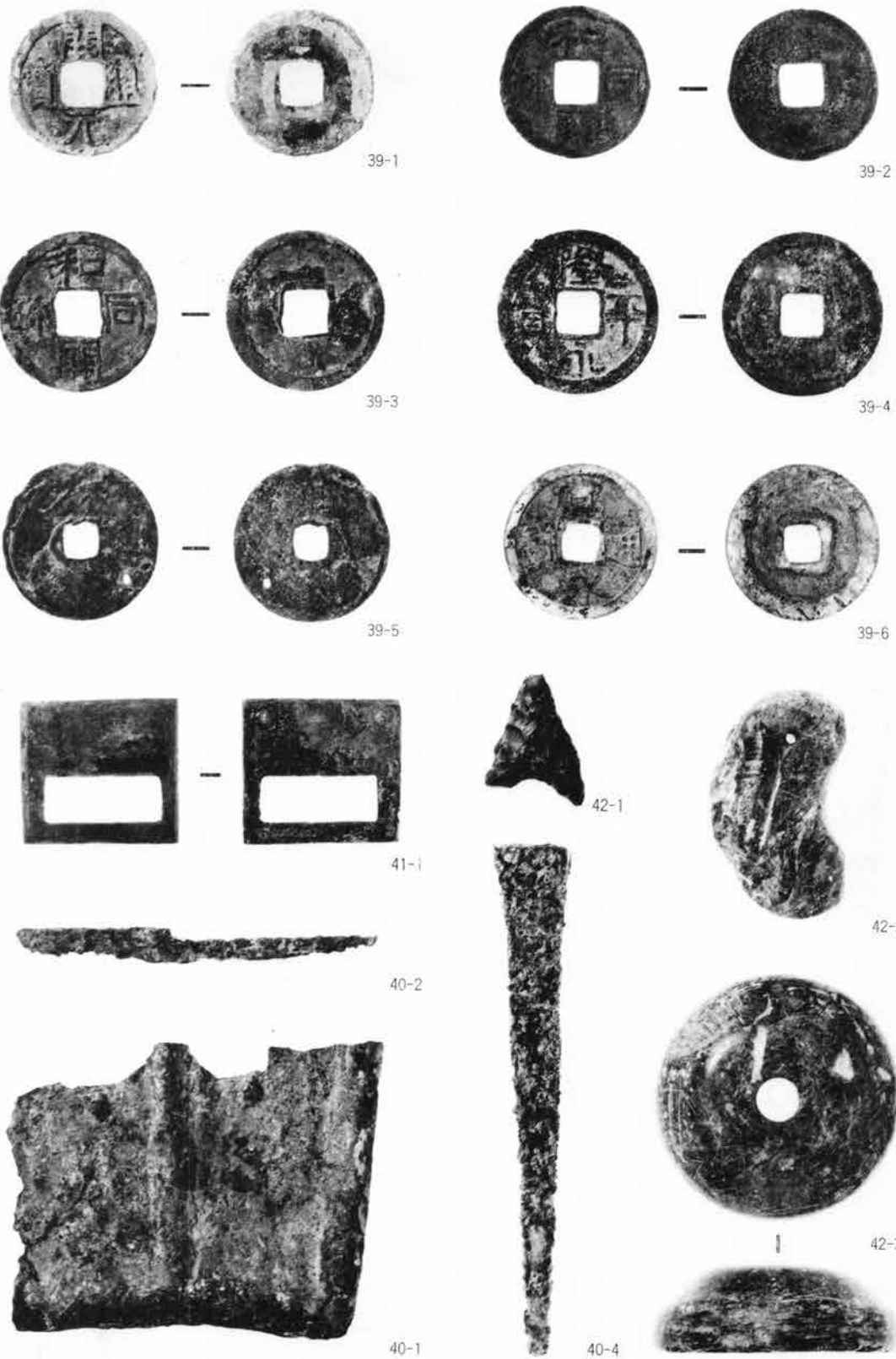
9-1a

7の部分

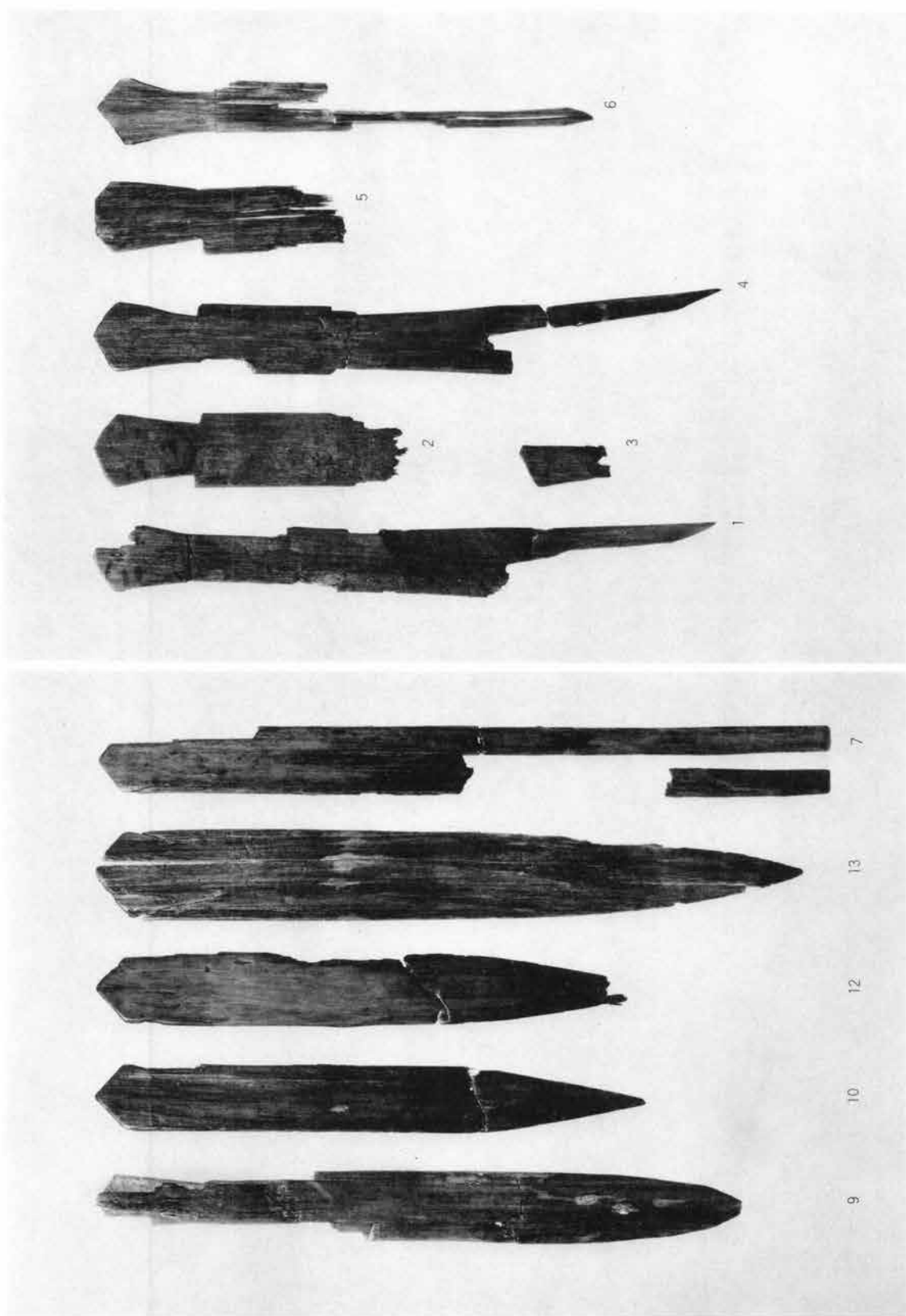
出土遺物(6) 木簡



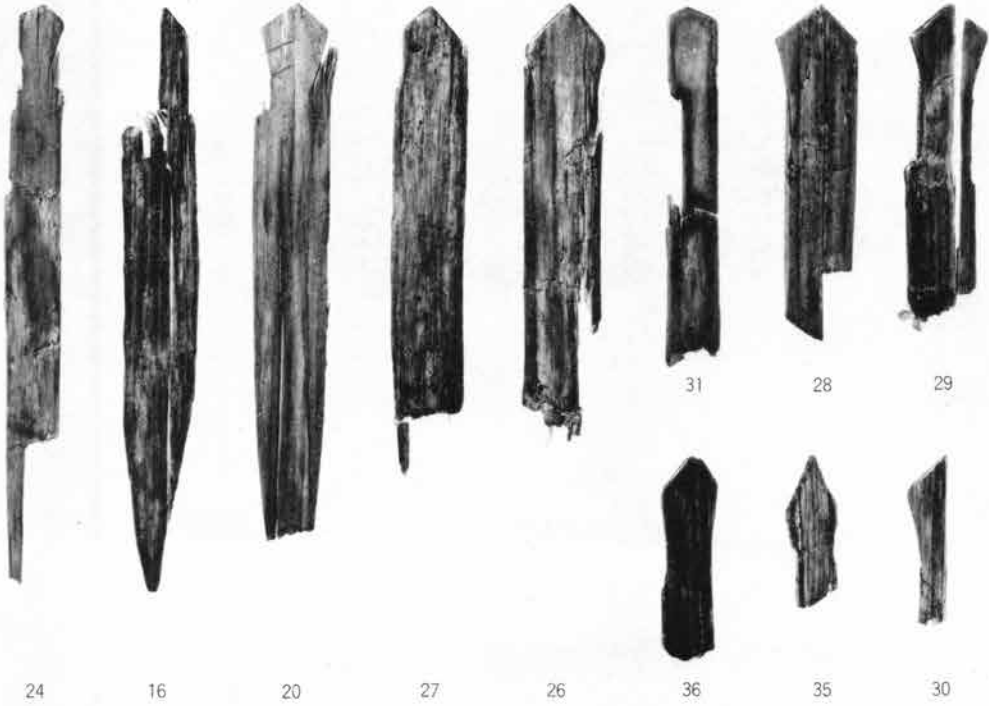
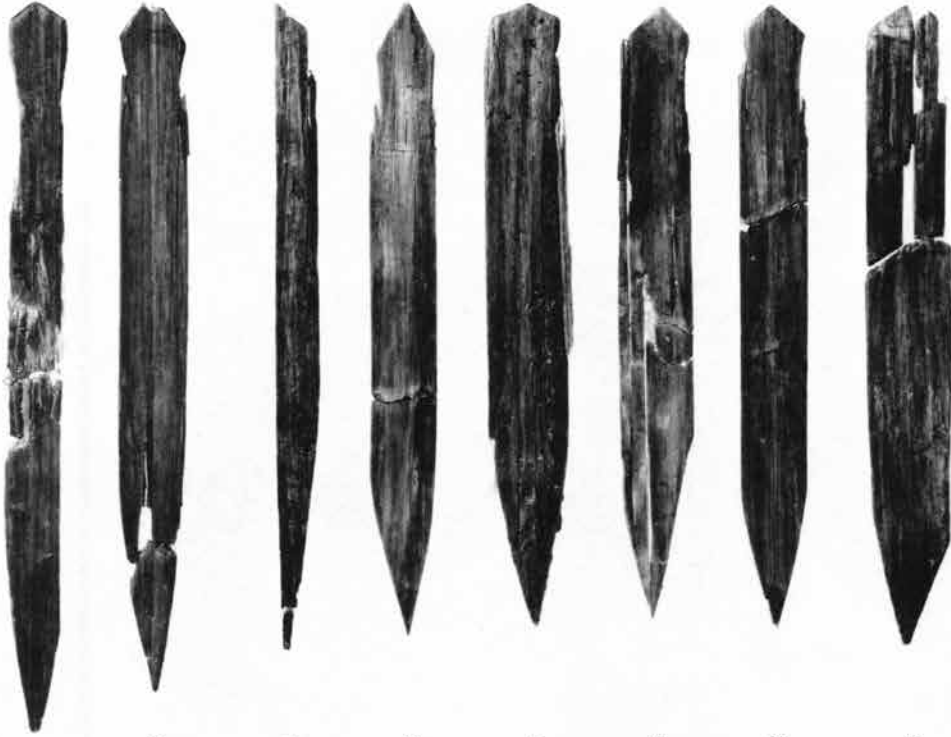
出土遺物(7) 瓦類 (流路跡 S D 28509 出土ほか)



出土遺物(8) 錢貨・銅製品・鉄製品・石製品



出土遺物(9) 人形・斎串





56



57



61



64



63



67



62



58



60



70



114



115



101



99



81



88



93



84



95



87



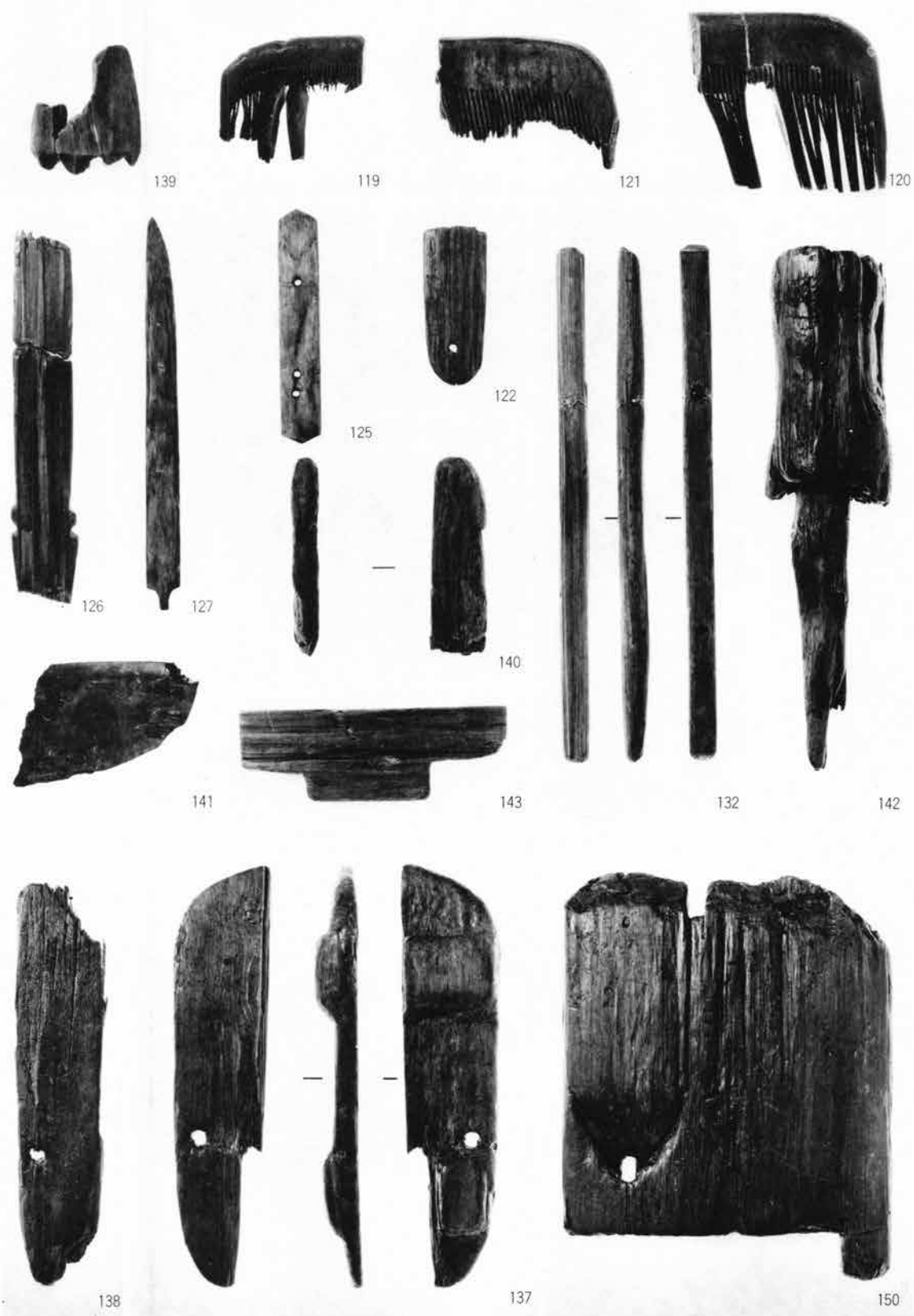
83



80



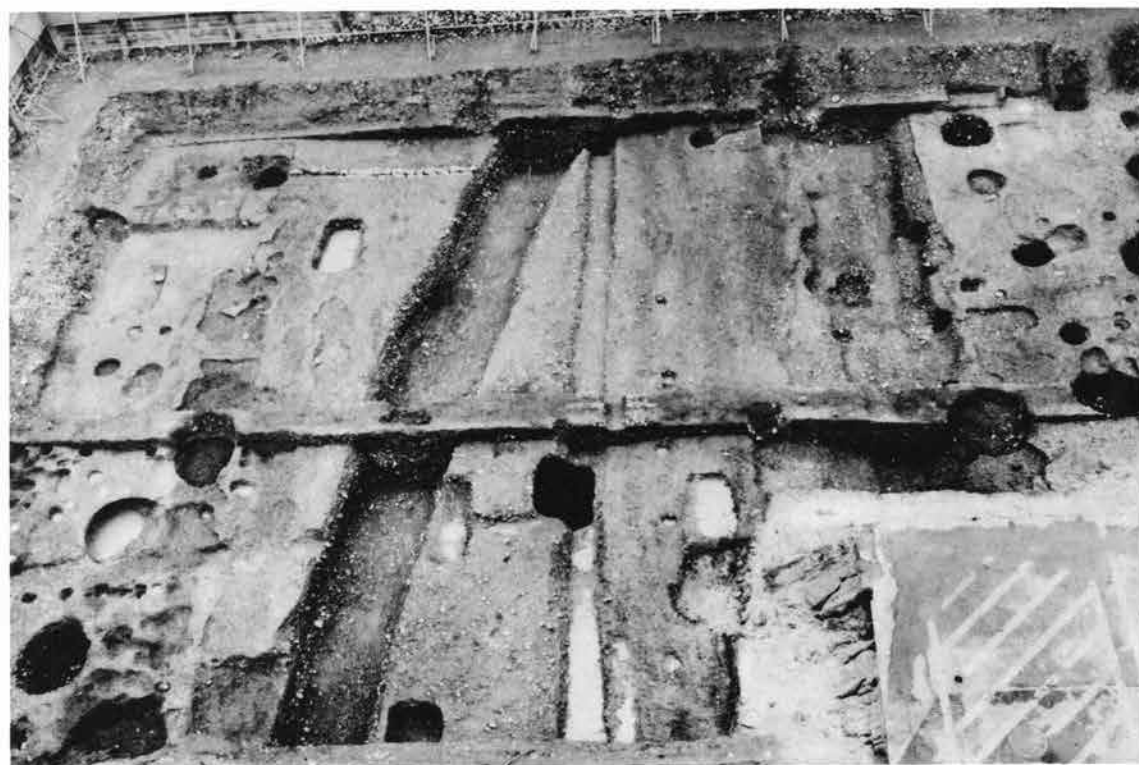
105



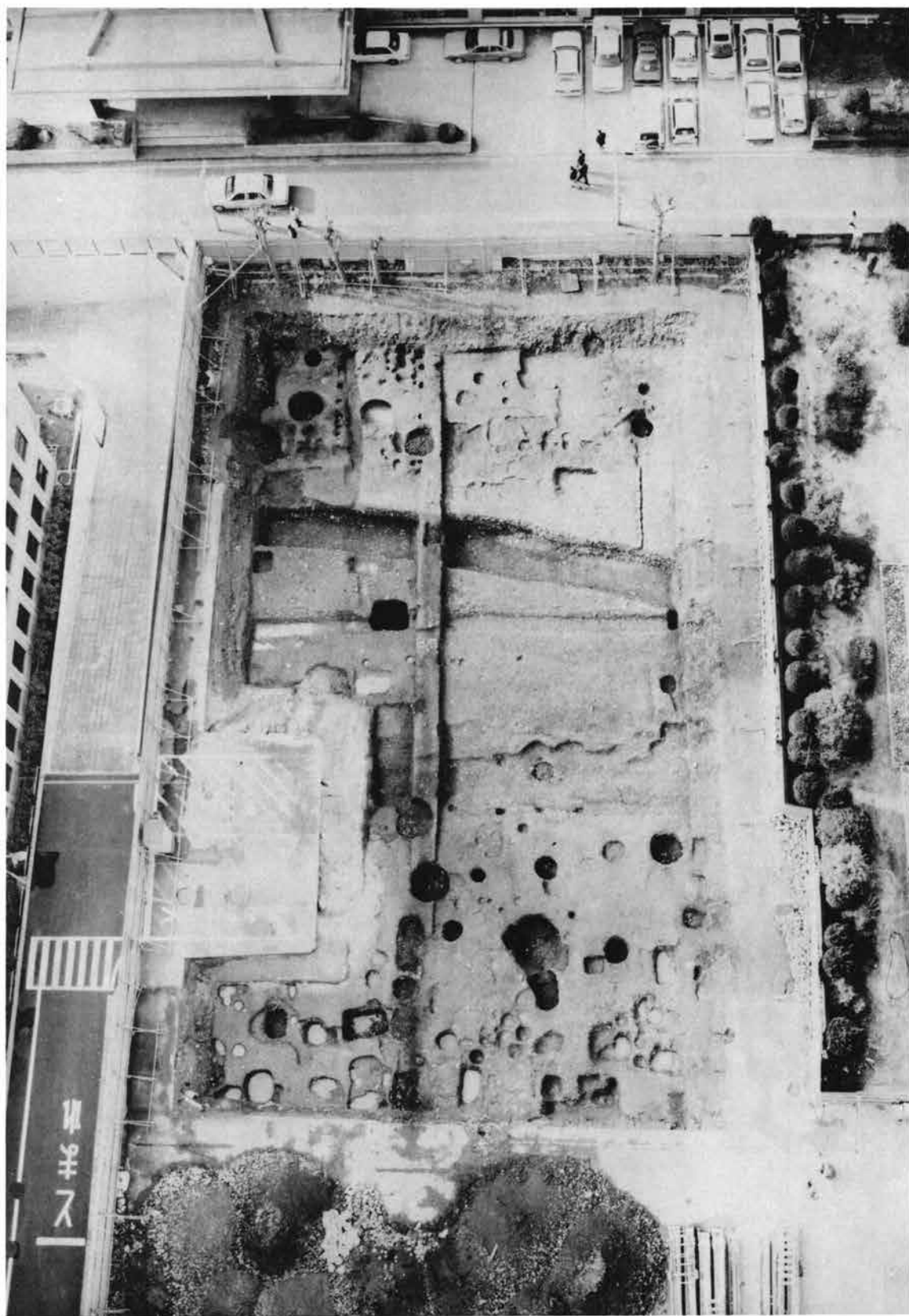
出土遺物(13) 鳴鏞・櫛・劍形・下駄・戸びらほか



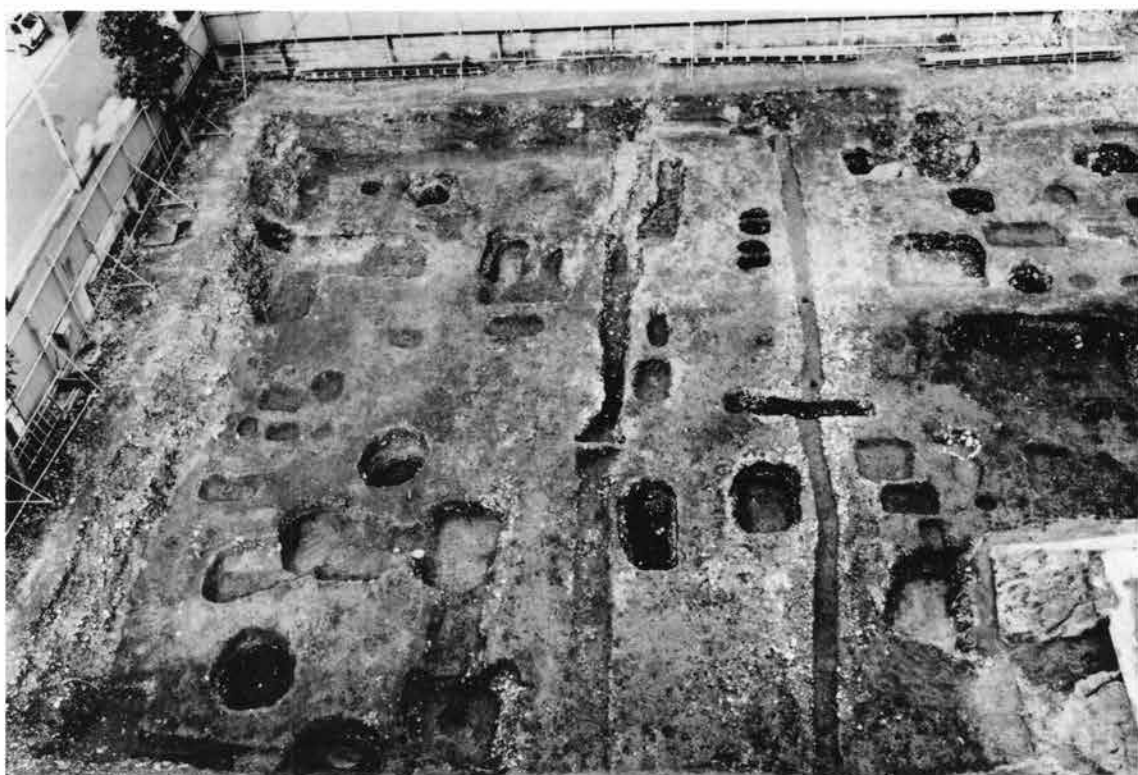
(1) 調査前風景（北から）



(2) 西洞院大路（南から）



調査地全景（東から）



(1) 調査地西半部 (近世・南から)



(2) 調査地東半部 (近世・南から)



(1) 井戸42 (北東から)



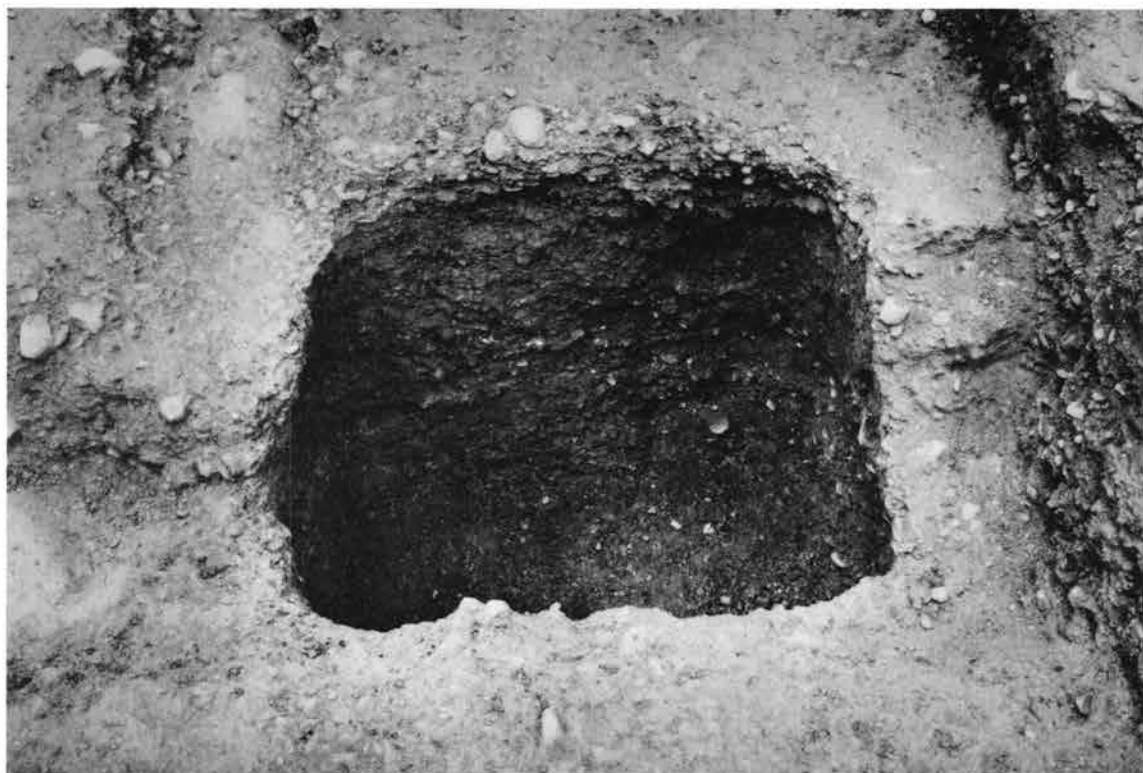
(2) 井戸95 (北から)



(1) 土坑50 (北東から)



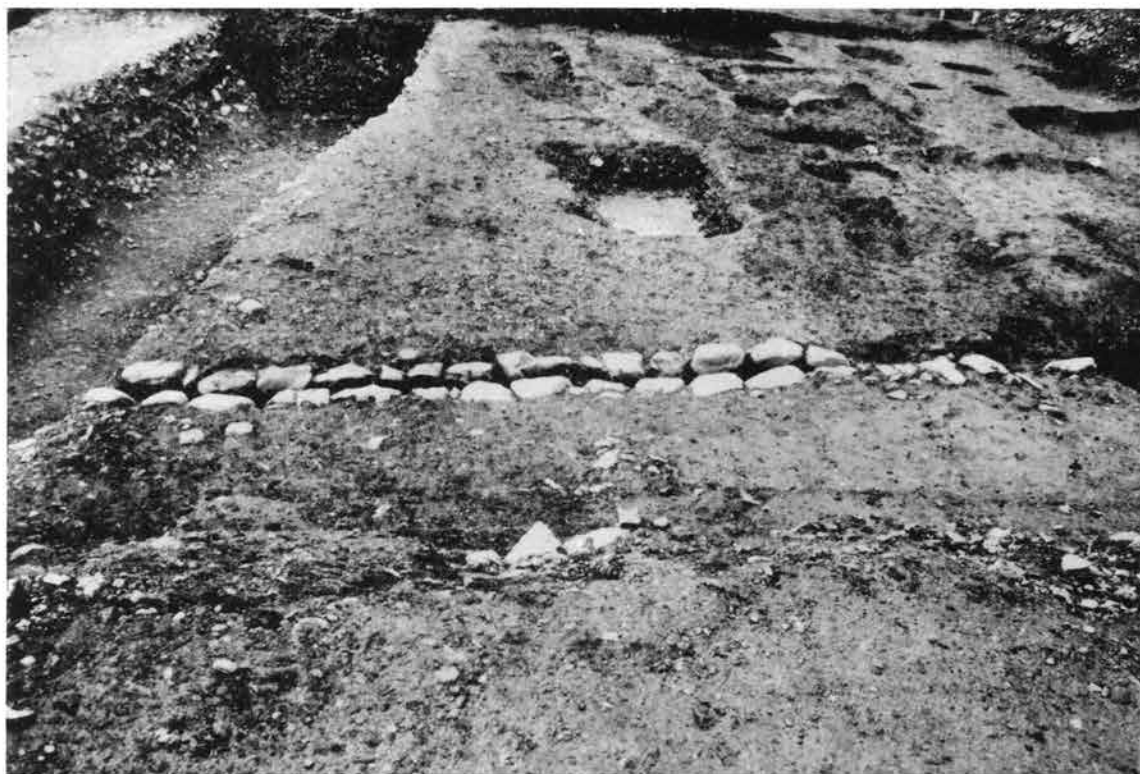
(2) 土坑63古銭出土状況 (西から)



(1) 土坑16 (東から)



(2) 土坑125 (北から)



(1) 溝281 (北から)



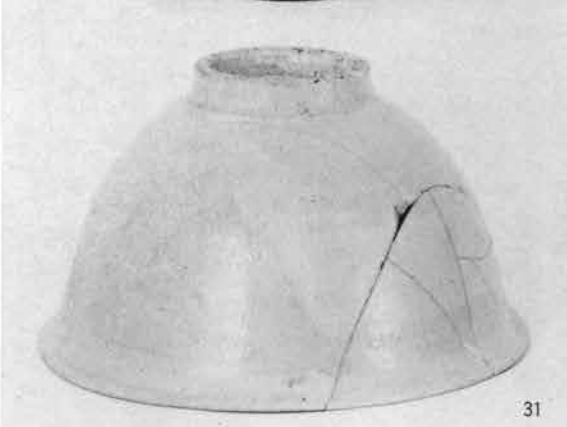
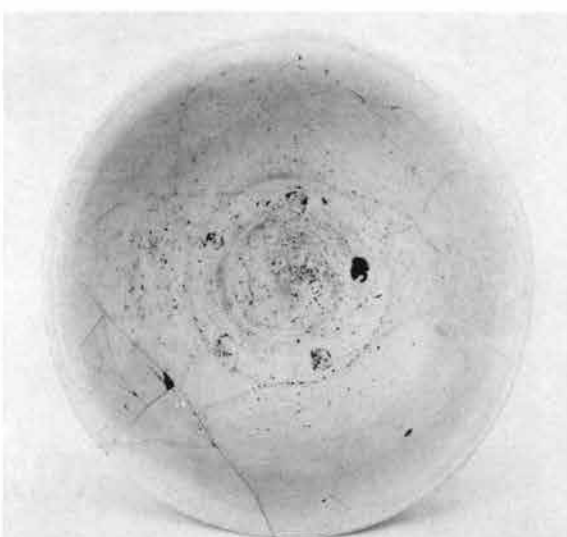
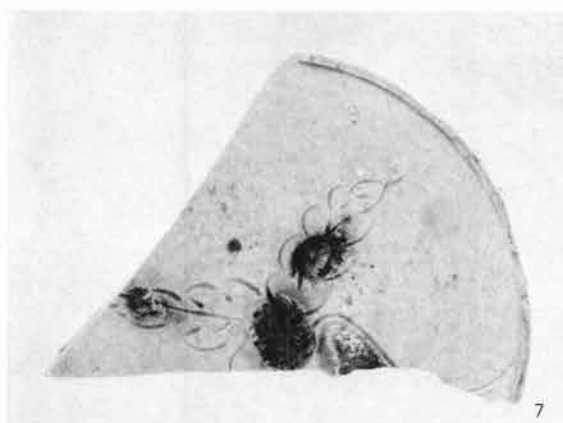
(2) 溝220(左)・溝201(右) (北東から)

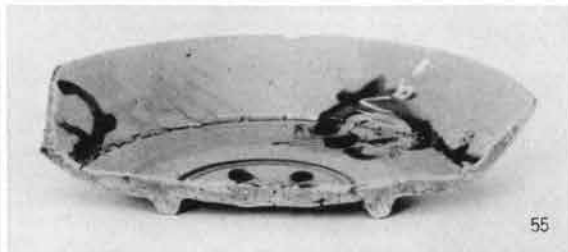
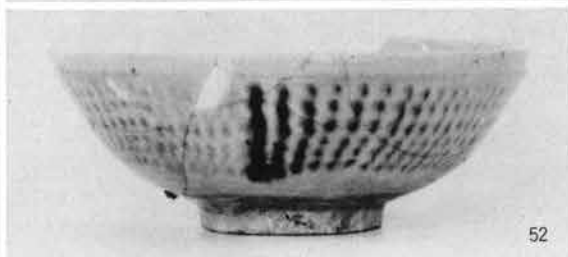


(1) 溝241 (西洞院大路東側溝・北から)



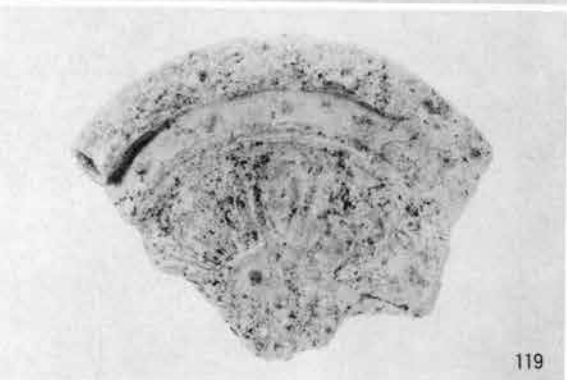
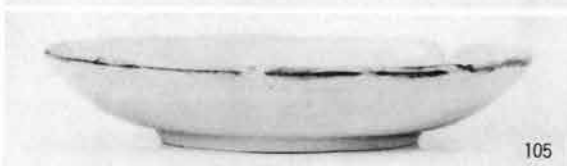
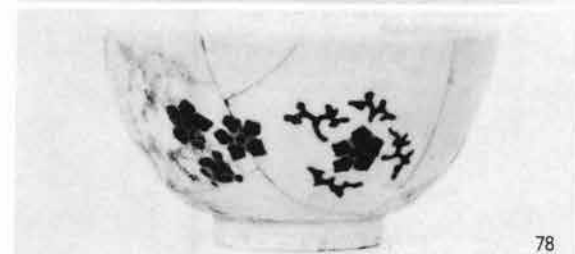
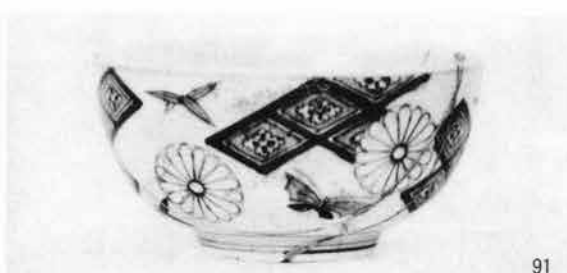
(2) 溝290 (西洞院大路西側溝・南から)







出土遺物 (3)



京都府遺跡調査概報 第45冊

平成3年3月28日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
TEL (075)933-3877

印刷 中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
TEL (075)441-3155(代)